

609-240



1200501533830

609
240

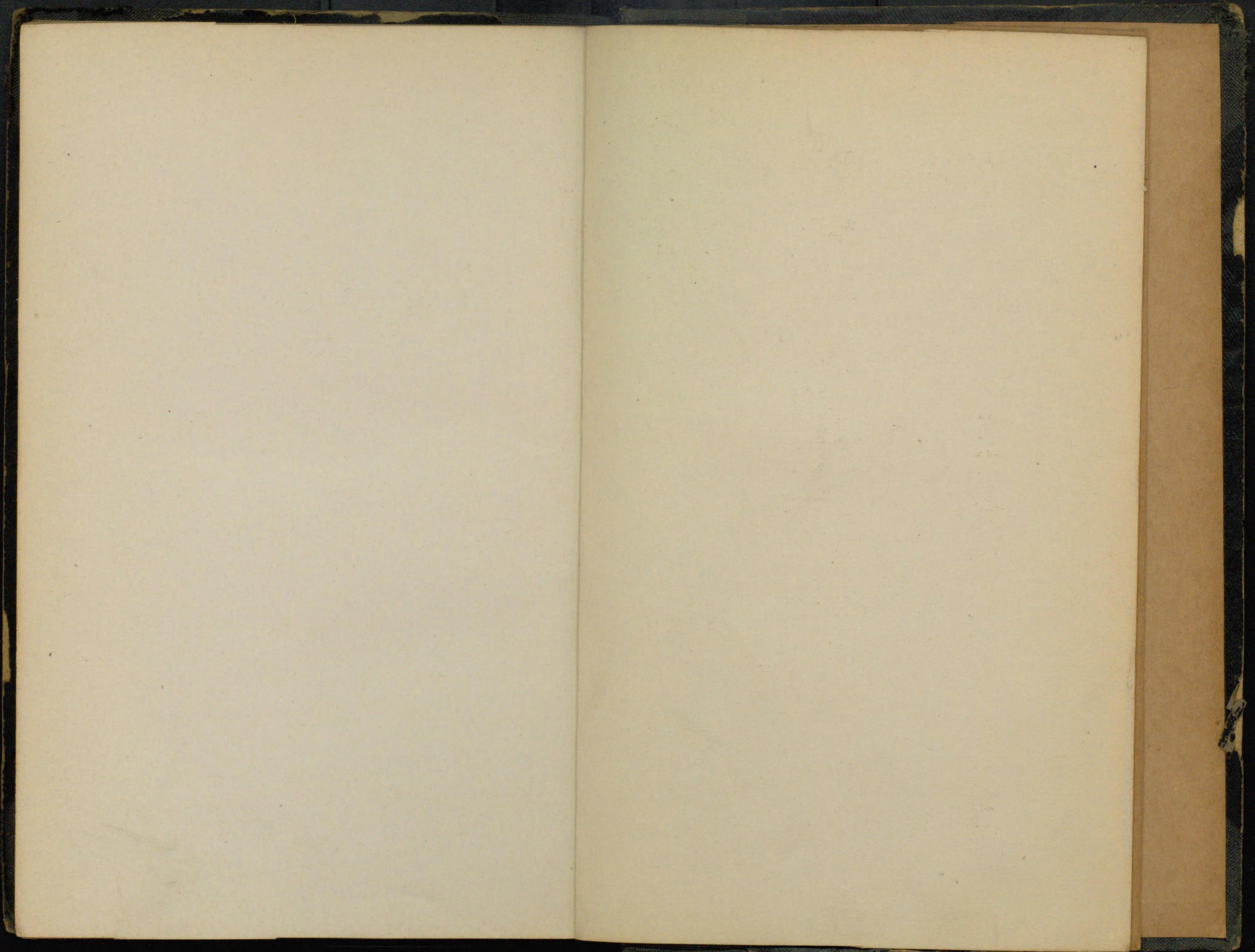
1121 20

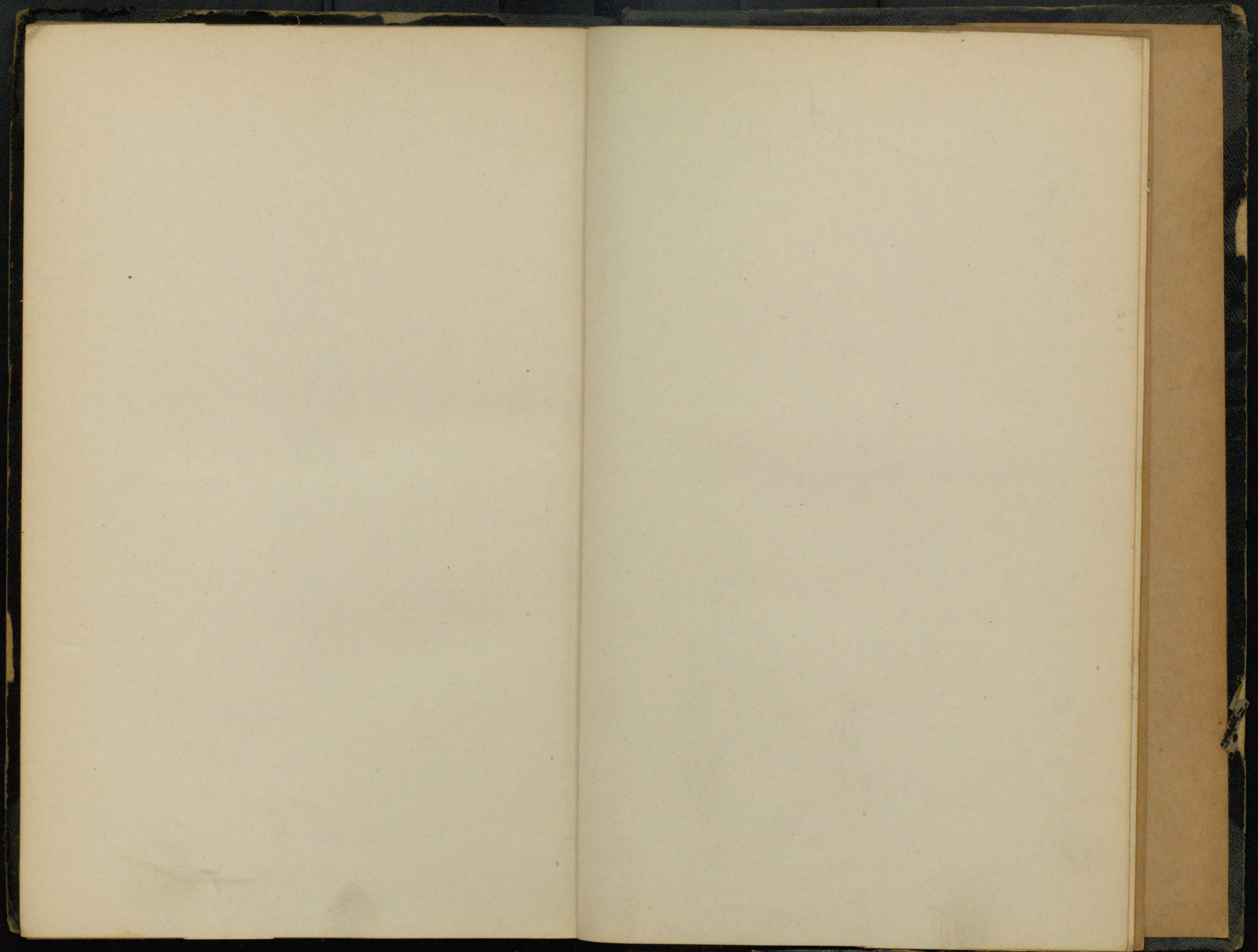
6. 7. 23

大谷光瑞述

妙法蓮華經講話

東京大乘社支部發行







妙法蓮華經講話



609-240

妙法蓮華經講話

目次

第一講

一、緒言	一
二、經題	五
三、異譯	六
四、一乘の妙典	一〇
五、釋迦一代説法の結歸	一二
六、如來の任務	一七
七、序品の意義	二三
八、法華經の究竟問題	二六

目次

九、法華經の聽衆……………三二

一〇、一切諸佛義務經……………三四

一一、天親菩薩の序品釋……………三七

一二、方便品の意義……………四五

一三、開三顯一……………四八

一四、天親菩薩の方便品釋……………五二

一五、舍利弗未曾有を得……………六〇

一六、火宅三車の譬……………六二

一七、天親菩薩の譬喩品釋……………六四

一八、結論……………七七

(一) 授記作佛……………七七

(二) 如來の壽量……………七八

(三) 信受說法者の功德……………八一

(四) 女人成佛……………八二

第二講

(五) 護衆生諸難力……………八五

(六) 觀音を通じて觀た法華道と彌陀道……………八七

(七) 南無妙法蓮華經の眞價值……………八九

一、序品……………九二

二、方便品……………一〇三

三、譬喩品……………一二三

四、信解品……………一三〇

五、藥草喩品……………一三八

六、授記品……………一四一

七、化城喩品……………一四一

八、五百弟子授記品……………一四八

九、授學無學人記品……………一五二

一〇、法師品……………一五三

一一、見寶塔品……………一五四

一二、勸持品……………一六一

一三、安樂行品……………一六三

一四、從地涌出品……………一六四

一五、如來壽量品……………一六六

一六、分別功德品……………一八九

一七、隨喜功德品……………一九三

一八、法師功德品……………一九五

一九、常不輕菩薩品……………一九七

二〇、如來神力品……………一九八

二一、陀羅尼品……………一九九

二二、藥王菩薩本事品……………二〇一

二三、妙音菩薩品……………二〇五

二四、觀世音菩薩普門品……………二〇五

二五、妙莊嚴王本事品……………二一四

二六、普賢菩薩勸發品……………二一五

二七、囑累品……………二二七

二八、總結……………二二八

妙法蓮華經講話

大谷光瑞述



第一講

緒言

本日から三日間妙法蓮華經（うほうれんげきやう）に就て、講演を申し上げます。色々考へましたが、それと申しましても、餘り變つたお耳になれて居らぬ經卷につきましましては、いかゞかと思ひます。一番此の「妙法蓮華經」と云ふ題が適當だ」と斯う考へまして、それで之を選びましたのでございます。此の妙法蓮華經と申しますお經は、可なり大きな面積がございまして、相當文字數も多うございます。一字々の事を研究して行くだけの時間が、一寸三日間にはございませぬ。一字々の研究をやらうと思ひますれば、どうしても

二週間、即ち五十時間乃至六十時間戴かねば出来ませぬ。即ち三日間六時間で片附けようと思ひましては、如何に私がお喋りでも、さう云ふ無理なことは出来ませぬ。それで今日は「妙法蓮華經と云ふものは如何なるものか」、斯う云ふ大要を申し上げます。是が釋迦一代の說法にどう云ふ關係を有つて居るか、他にも澤山經論釋がありますが、就中妙法蓮華經が最も尊とい經典であるのは、如何なる理由であるか、此の大要論を申し上げます。それから明日明後日四時間に、二十八品各品に就きまして、此の品は斯う云ふことを言つた、此の品は斯う云ふことを言つたと云ふ、今度は一品一品の大要を申し上げます。これで大體お分りになる筈でございます。

この經典はどちらかと申しましたら、極く解釋のしやすいお經でございます。大乘入楞迦經のやうな、あゝ云ふ複雑したお經であつたら、さう云ふことは出来ませぬ。此の妙法蓮華經と云ふお經は、ずつとそれが一本に立つて居るお經で、洵に讀み易い、知り易い、結構な經典でございます。それから又註釋物も非常に澤山あります。其の註釋本に就て、篤學のお方は一々文字に就て、御研究になつて居ります。こゝで大體

申上げて置きますから、それらをお繕きになつても、よくお分りになります。さう云ふ風に三日間を使ひます。二と四に分けて使ひますから、左様御承知を願ひます。

もう一つ申上げて置きますが、此の經典は日本に於きましては天臺宗、日蓮宗、此の二つの大きな宗派が、之に依つて出来て居ります。其の天臺宗と云ふものは、元來支那の輸入で、日蓮宗は日本の發明でございます。どちらに致しまして同じものであります。それ以外の宗旨も、やはり大凡それに依つてやつて居ります。洵に是は立派な解釋でございますから、依つても差支ございませぬ。が併し吾々の信じて居ります淨土眞宗は、妙法蓮華經に特別の解釋を致して居りませぬ。天臺宗の解釋、日蓮宗の解釋を申上げててもよろしうございますけれども、是は天臺宗の人、日蓮宗の人にお聞き下さる方がよろしうございます。私の受賣より専門家の方が、よく分るやうにお話しになります。

私は天臺宗、日蓮宗の分れて來ない以前の、妙法蓮華經の古義の解釋を申し上げます。此の古義の解釋から、天臺宗智者大師の解釋が出て參ります。又日本の日蓮上人の解

釋が出て参ります。今日は其の古義の解釋を申上げて置きます。此の古義の解釋には、専門の宗旨しゅうしと云ふものはございませぬ。それでございませぬから、私が申上げるより仕様さまございませぬ。

其の古義の解釋を致しましたのは、婆藪槃頭ばそはんづと云ふ菩薩ぼさつでございませぬ。この人は西曆六世紀頃に印度に居つた人でございませぬ。吾々眞宗で使つて居ります、往生淨土論を書いた人でございませぬ。曇鸞大師どんらんたいしがこの書の註釋を致して居ります。是は先年お話し申し上げました。この人は千部の論師と謂いはれ、論に於ては印度其の右に出た者の無いと云ふ、偉い人でありまして、あらゆるお經の論を書いて居ります。逆も偉い學者でございませぬ。其の人の書かれた妙法蓮華經優波提舍めうほうれんげきやうつたしやと云ふ論がございませぬ。往生淨土論じやうつろんは即ち無量壽經優波提舍むりやうじゆきやうつたしやでございませぬが、今日はこの妙法蓮華經優波提舍めうほうれんげきやうつたしやによつて申し上げます。是は天臺宗の未だ起きぬ以前の古義の解釋で、なか／＼婆藪槃頭ばそはんづだけあつて、立派な解釋がしてございませぬから、これからそれに依つて申上げるのでございませぬ。

二、經 題

それで第一に、妙法蓮華經めうほうれんげきやうと云ふ名字の原名を出しまして御覽に入れます。

Saddharmapundarika

サツダルマブンダリーカと云ふ原名であります。サツは善とか妙とか云ふ字でございませぬ。Dharmaは法で、法律の義でございませぬ。pundarikaと云ふのは、蓮の華の名でございませぬ。これは蓮華の一種の名で、斯う云ふブンダリーカと云ふ蓮であります。元來蓮と云ふのは、Padmaと云ふのが普通でございませぬが、是は多く赤い蓮華のことを申しまして、紅蓮華をバドマと云つて居ります。ブンダリーカは或は白い蓮華と云ふ説もございませぬ。どんな色か知りませぬけれども、印度に於ては蓮の華は各種あるけれども、一番立派なのはブンダリーカと云ふことです。私共ではわかりませぬ。何故蓮華と云ふ字を使つたか。何故斯う云つたか。一々議論がございませぬ。こんなことを言つて居ると、地球が廻轉しますから、斯う云ふ經題きやうだいだと思つて居つて下さい。

三、異 譯

それからこれの譯が二つある。と云ふより原本が二様に傳はつて居る。洵に困つたものですけれども、是はどうも仕様がございませぬ。二千年程前に生れて來たらよかつたが、今日は間に合ひませぬ。やはり原本が二本あると云ふより仕方がございませぬ。一つは Butcha 本であります。一つは印度の梵本で羅什が譯して居ります。ブツチャ本の方は法護が譯して居ります。

法護の譯したのは正法華であります。と云ふのは正と云ふ字でございませぬ。元來の正と云ふ字は、正と云ふ義より善とか妙と云ふ方が、字義が強くてございませぬ。華は蓮華であります。日本の花は櫻。印度は蓮でございませぬが、パドマの蓮と、ブンダリーカの蓮と、どつちが正しいか、疑問でございませぬ。理窟から言つたら、梵本が正しいと言はなければならぬ。よく見ると梵本にも足らぬ脱けた所があります。ブツチャ本にも脱けた所があります。兎に角、世尊涅槃の後、阿難尊者が承つて結集した。

こゝまではよろしい。阿難尊者が死んでから千年程の間、誰が書いたか分りませぬ。「阿難尊者が結集した」。それは確かです。それから誰が書いたか分りませぬ。

此の頃印度に遺つて居ります梵本に就ては、日本では亡くなりました南條文雄博士と、今生きて居る泉と云ふ人の手によつて譯されて居ります。ヨーロッパではケルンと云ふオランダの學者が譯して居ります。別にフランス譯もあります。あつちこつちに色々ございませぬ。

又鳩摩羅什は、法護が譯してから約千二百年後に譯して居ります。最近のものは餘計悪うございませぬ。金さへ取ればよろしい、と云つた鹽梅で、小僧共がよい加減な讀み方をして居りますから、益々悪うございませぬ。「書寫讀誦すると云ふことは、無上菩提に廻向する」と思へば、少しは氣張るかも知れませぬが、最近は皆んな黄金に廻向して居る手合ばかりの様です。そんな工合で何を書いてあるか分りませぬ。併し要するに皆んな一應感心して居ります。斯う云ふことは學者と云ふ閑人が、何か言つて居らぬと飯が食えぬから、色んな説を掲げて見たのかも分りませぬ。私共そんな馬鹿

なことは言ひませぬ。兩方とも尤もなことが書いてありますから、二つ合せたら一層完全なものになります。些細なことはどつちにしたつて極樂參りの種になりやませぬ。私共そんなことを一々研究する必要はないと思ひます。

それから此の二つの外に、もう一つ斯う云ふものがある。是は隋の時分でございます。丁度日本では聖德太子時代頃でございます。其の頃にどうも法華經が宜しくな。脱けて居る。羅什譯も完全して居らぬ。法護譯も完全して居らぬ。何とかならぬであらうかと云ふので、今度足米を附け加へたのでございます。之を添品法華と申します。品を添附して増やして居ります。それで此の添品法華を今日以後申し上げます。是がまあ今の所では一番宜しうございます。これは大體羅什譯を基礎にして居ります。けれども不足を補うて居るだけよくなつて居ります。

原本を申上げようかと思つて居りましたが、原本になりますと、私大無量壽經の時のやうに、正確に原字を推して來たら宜しうございますが、人の翻譯によるのでございますと、どれによつてやつても同じでございます。何れにしても人の翻譯によるとすれば、添品法華によるのが一番宜しうございますから、これによることに致します。この譯は隋の二十一年間に、闍那崛多と達摩笈多と云ふ兄弟が、譯しましたものでございます。今の羅什譯の普通の分よりは、少し異同がございます。此の異同も添品の方が宜しうございます。

どう云ふ所で異同して居るか云ふと、屬累品と云ふものがございしますが、是が羅什譯では、丁度終ひの少し前ぐらゐの所へ、はさがつて居ります。添品の方ではそれを直しまして、最後に持つて來ました。屬累品と云ふのは、どう云ふことかと云ふと、事務引繼と云ふことであります。事務引繼を中途半端でやることはありませぬ。事務引繼は前任者と後任者と、終ひにやるにきまつて居ります。屬累と云ふ字は、*accumulation* の義でございますから。是はどこでも終ひになればなりませぬ。大無量壽經も、彌勒に屬累すると云ふのが、最後へ來て居ります。是は最後へ來るのが當り前だと思ひます。

羅什譯は、短冊のやうなものに書いて、真中に綴ちてありますが、それを鼠に嚙ら

れて散亂した爲、今度入れる時にこんなことだらうと云つて、はさげそこねたものでありませう。あんなものは眞中へ這入るものではございませぬ。どうしても最後へ行かなければならぬ道理でございます。それで添品法華では、原本によりまして屬累品ぞく累品を最後に持つて來たのであります。先づ異同の概要を申し上げますと、さう云ふ風な分け方の相違がございます。

四、一乗の妙典

それから今度は此の經は、何故さう結構なのか。どう云ふ點がえらいのか。斯う云ふことを申し上げますと、是は昔から

一乗の妙典

諸佛の秘要

斯う言つて居ります。諸佛の秘要しよぶつひようと云ふことは、一切諸佛の一番大事な所だ。肝要な所だと云ふので、秘密にして言つてやらぬと云ふことではないのです。

一番大事な所であると云ふ、一乗の妙典いちじやうめうてんと云ふことは、どう云ふことかと申しますれば、此のお經の中、方便品ほうべんぼんにございます、「佛の説く所二乗三乗あることなし。唯一佛乗だ。」と云ふ、此の文から一乗の妙典と、斯う言はれて居るのでございます。恐らく釋迦一代の説法中、一番尊といお經でございませう。私は斯くの如く信じて居ります。

是は非常に結構なお經で、究極きうきよくした議論をして居ります。何故究極きうきよくした議論をして居るかと云ふと、總てのものに幾多階段があるやうに云つたら、是は低級な議論です。オンリイ・ワンと云ふ、是れ位高級な議論はありませぬ。段と云ふものには高い所低い所がある。さうすれば高を認め、低を認めねばなりません。オンリイ・ワンなら高もない低もない。是より上の議論はございませぬ。外の經典にはさう云ふことに類したことが屢々出て参ります。金剛般若こんごうぼんにやの如きは、現に「如來亦空なり。」と云つて、總てのものを叩き壊して居りまして、一乗の理を説いて居ります。其の他維摩經ゆゐきやうに致しましても、華嚴經けさんぎやうに致しましても、澤山一乗の理を説いてございます。説いてはござい

ますけれども、たゞ理として現してあります。

處がこの經典は、理は一乗だと言つたものと違ふ。總ての増上慢、即ち「私は偉い。私は悟つた。」と思つて居る者を、頭ごなしに恐れ入らしてしまつて、「恐れ入りました」と云つて、皆がお辭儀をして、「大菩提の道に入る」と云つたのは、此の經だけでございませぬ。それで釋迦如來は、外の經を説く時とは、大分調子を變へて居ります。餘程しつかりした態度で、總ての調子を變へて來て居ります。さう云ふ點は、「確かに是が諸佛の秘要」、「一乗の妙典」、「一切諸經に勝れて居る所」、斯う昔から言つて居ります。私が言ふのではありませぬ。私も斯くの如く信じて居ります。

五、釋迦一代説法の結歸

それから、私は常に光壽會の講演を申上げて居りますが、「此の釋迦一代の説法と云ふものは、三經に結歸する。其の三經と云ふのは、何であるかと云へば、法華、涅槃、無量壽、此の三經に結歸する。」と云ふことを始終申上げて居ります。今日も私斯くの

如く信じて居ります。

法華經に於ては、「オンリイ・ワンだ。幾多の階級がそこにあると云つたのは、皆んな是は假りの説で、お前等にオンリイ・ワンと云へば、吃驚りするから、吃驚せぬやうに、假りに色々と言つてやつたので、元來オンリイ・ワンのものだ。」と斯う言はれた。實に廣大な説です。けれども、オンリイ・ワンは、どんな格好をして居るか、法華經には書いて居りませぬ。「唯一つぢや」一つはどんな格好か。三角か、丸か、十文字か、それは分りませぬ。ダイヤモンドのやうに、八面體か、六十四面體か、それも分りませぬ。「二つは斯う云ふものだ」、「如來常住にして、一切衆生は悉く佛性を有つて居るものだ」、「如來は滅滅するものでない。不増不減のものが如來である。同時に一切衆生悉く如來たるべき所の性質を有つて居る。が故に不増不減である。如來は一切衆生が如來だ。」と云つた。それが涅槃經であります。それを言つて貫はぬと、オンリイ・ワンは分りませぬ。「如來は不増不減常住して居る。ありとあらゆる一切衆生、牛馬に至る迄、佛性を有つて居るから、如來常住して、オンリイ・ワンになつて居る。」とこゝ、

まで言つて貰はぬと、オンライ・ワンの説が分りませぬ。

妙法蓮華經は、「唯一つの乗物だ。」と言つた。其の唯一つの乗物の解釋を、涅槃經は如來常住一切衆生悉有佛性で現して來た。斯う云ふ形になつて來て居る。此の妙法蓮華經は一乗と云ふことを現す。「一乗と云ふものは是はどう云ふものか？」と斯う云ふ疑問が起つて來た。さうすると、此の一乗と云ふものは斯う云ふものだ。」

一 乘——法華

如來常住

一切衆生——涅槃

悉有佛性

斯うなつて居ります。是は今の説明で分りました。如來は常住して居る。外のものも如來と同じ性質を有つて居る。成程御尤もです。併し格好が氣に喰ひませぬ。長さが短かつたり長かつたり、人間の格好をして居るかと思ふと、犬になつたり、猫になつたり、南京蟲になつたり、油蟲になつてはどうもならぬ。一切衆生悉有佛性でも、

南京蟲をお佛壇に入れて拜む譯に行きませぬ。昔はあんなものは居らなかつた。日清戦争以後、船に積まれて南京蟲が上つて來た。郵船會社の方も悪うございますけれど、郵船會社にしても、賃銀を取つて乗せて來たので無いから、どうもしかたがございませぬ。その南京蟲を南京蟲亦佛性ありと云つて、佛壇に入れて拜ませぬ。格好が變つて居る。どんなに云つても仕様ございませぬ。さうすると如來と一切衆生と、大分距離があります。成る程佛性は同じだから距離はないのですが、吾々の智慧の程度では、如來と南京蟲と吾々とは大分段が違ふ。これらを同じものとして受入れることは出来ませぬ。

斯う云ふ不調法なことでは埒があかぬ。何故違ふか？ 吾々が畢竟淺學の致す所であることになりませぬ。博學でなかつたら佛陀になることは出来ませぬ。どうしても賢うして、南京蟲も如來と同じに見える目にせねばならぬ。さうすると今度は、何とかしてそれにならす工夫をせねばならませぬ。さうするには智慧を與へる。與へるか貰ふかどつちでもよい。與へるのは貰ふことになるから結局同じことです。けれ

どもそれを具へる、即ち具有する法と云ふものがなくてはなりません。それをこゝへ持つて来た。

- 一 乘——法華
- ← 如來常住
- 一切衆生——涅槃
- ← 悉有佛性
- 往生極樂
- ← 無量壽
- 无上菩提

「どうして具有するか？」それを具有するのは斯う云ふことだ。「往生極樂と云ふこと」。是はえらい上等な所で、皆んなえらい者ばかり居る所です。えらい者の居る所へ行けば、自然にえらい者になる。觀音勢至と同じ資格を具へることが出来ます。何とえらいではありませんか。其の證據に觀音さんは皆んな拜んで居ります。明後日申しますが、お釋迦さんが感心して、「觀音菩薩はえらい。あんなえらい菩薩は外にどこに

もない。」と云つて感心して居ります。その中へ行つたら、南京蟲も如來と同じことになつてしまふ。どうしても觀音勢至と同じことにならなくてはいけません。

「往生極樂无上菩提」、是は何が教えたか。即ち無量壽經がそれを云つて居ります。

「一切衆生佛を信ずる一念に於て、悉く極樂に往生する。觀音勢至と同じく無上菩提を悟る」と教えた。尤も妙法蓮華經にも、是は明日申しあげますが、方便品の下に、

「一度南无佛と稱ふれば、佛道を成ずべし。」と書いてあります。書いてありますから妙法蓮華經の、「一稱南无佛、皆已成佛道」と云ふことは、即ち此の無量壽經の、「往生極樂无上菩提」と云ふことになりませんが、その實行方法を専門に言つたのと、それを學理の一端として示しただけの違ひであります。此の三つを總括せぬといけません。之を總括しましたら、釋迦如來一代の説法の、秘要と云ふことは現れて来る。

六、如來の任務

もう一つ面白いことがあります。

如來所應作者皆是作

是は無量壽經の言葉です。「如來に於て爲さるべき事は、我によりても成し終れり。」と云ふ言葉です。是はどう云ふことかと云ふと、此の世界に釋迦牟尼世尊が現れて來て、此の下界に現れた所の、如來としての任務は、我れ釋迦牟尼佛も、今日爲し終つた。」と云ふことです。さうして見ると、「此の無量壽經はどう云ふことか？」釋迦牟尼如來が此の世に現れて來た所の任務を、今日やつたからすんだと云ふのです。この處、原文を讀んで見ますと、如來と云ふ字に單數の字を使つて居ります。釋迦牟尼如來と云ふ義から云ひますと、一切諸如來一々任務がございませぬから、複數を使ふ譯に行きませぬ。どの如來にも任務がついて居ります。複數を使つたら、五人あつても複數であり、九十萬あつても百萬あつても複數です。それでは限界がつかませぬから、文法は Tathāgata と云ふ尻へ、*ana* と云ふ單數の語尾を使つて居ります。kartavyam kīrtam 「爲さるべきことを成せり」こう云ふ風にみな單數を使つて居ります。勿論翻譯者によつて、少し字の使ひ方は違つて居りますけれども、之と變らぬものを妙法蓮華經に使つ

て居ります。「如來に於て爲すべきことは我に於ても爲し終つた」して見ると、此の二つの經を説くと云ふことが、如來の任務であつたと云ふことは明瞭であります。此の文字は經の上に出て居ります。いづれ明日書いて參ります。是はブツチャ本の方にはございませぬが、法護の譯しました梵本、それから現在ヨーロッパや日本で譯されて居ります梵本、兩方に此の文字がございませぬ。これは此の文に來た時申上げます。此の二つの經を説くのが、如來の任務だと云ふことを、釋迦如來自ら言つて居ります。それです。これはもう間違ひございませぬ。他人が忖度しまして、是は大聖世尊の任務らしいと云つたのでございませぬ。本人が言つたのでございませぬから、間違ひございませぬ。

もう一つ涅槃經は、如來の任務でないかと云ふと、さうでございませぬ。この涅槃經は、釋迦如來が印度からもう姿を隠す時の經であります。言はなくても分るまで、皆に充分納得さして居る。釋迦の任務の遂行された所の經典でございませぬ。任務が盡さねば形を隠しやませぬ。夜ぬけをするやうな如來は居りませぬ。借金が增えて夜

ぬけをする。そんな不見識な如來はありませぬ。「自分に直接関係のある有縁の衆生を濟度する。自分に分らぬ所があるなら皆聽け。」、涅槃に這入つて形を隠したらいかぬから、色々の菩薩がはげしい問答をして居ります。其の問答が、「如來常住一切衆生悉有佛性」でございます。

それもいよく話がつきた。所がアジャータシヤトル (Ajātagatru) 王が亂暴してお父さんを殺す。大騒動を四五年前からやつて居ります。其の擧句愈々どうもこれでは地獄へ墮ち相なと心配になつてくる。そこで Jivaka と云ふ名人のお醫者さんに、「お前何でも羅漢の悟を開いて居る相だが、お前に擱まつて居れば地獄に墮ちまい。お前の象に乗せて呉れ。」と哀願します。お父さんを殺した時の罰で、幽靈が頭を撫でに來ると云ふ様などうもえらい騒ぎです。ジーバカは、「そんなら大聖世尊が、今クシナーガラ (Kusināgara) に居られるから、行つて聽いてお出でなさい。そんな腰の弱いことを言つては始まらぬ。悪い事をしたと思つたら、行つて懺悔するがよい。」葑蕪の幽靈のやうに滅茶苦茶に體が震うていかぬ。それから恐る恐る尻馬でない、尻象に乗つて

やつて來た。さうしてクシナーガラの世尊の涅槃の床に來た。

其の時、釋迦世尊になると、人の心を讀みます。「マハーラージャ (Mahā rāja)」と言はれた。其の一言でアジャータシヤトル満足して、「是で大丈夫。俺も地獄行きはやめになつたらしい。どうやら工合がよいらしい。抑も私が王たる所の資格のない悪人であつたならば、佛があゝ言はれない筈だ。佛は嘘をお仰ることはない。今日私にマハーラージャ(大王)と云ふ言葉を使はれた。私が大王たる福分を具へて居るから、大王といはれたに違ひない。人民の信望を失つて、王位を辱しめれば、大王とは言はれぬ。佛が大王とお仰るとすれば、私には大王の資格があるに違ひない。」安心して佛の前へ出てお辭儀をした。「私は今日まで全く考へ違ひをして居りました。もう凡て善と云ふものもない。信と云ふものもない。今初めて根の無い信が生じたのでございませぬ。」無根の信を得たと云つた。

其の時佛がどう言はれたかと申しますと、「私は今涅槃に入る。如來常住であるから死ぬのでない。此の世を去るのでもない。いつまでも居つてよいが、汝等増上慢の

者達がいつでも聽けると云つて怠けるから、一寸形を隠して、汝等の勉強するやうにするだけだ。」と斯うお仰つたけれども、アジャータシヤトルは本氣で如來が死ぬと思つて居る。「早く間に合ふ間に行かねば仕様がな。」と言ふた。あ、云ふ智慧の足らぬことを云ふ者には、佛は死ぬ相を見せませぬ。それですから佛は、アジャータシヤトル一人の爲に、未生怨王の爲には涅槃に入らぬ。譯の分つた者には隠すけれども、譯の分らぬ者には隠して居りませぬ。此の經が最後の説法であると云ふことは、經典四十卷を讀んで見ますと分明に出て來ます。アジャータシヤトルの濟度までしなければ、如來は此の世を去らぬと云ふのです。

それで、此の三つの經典だけは如來の任務だ。「如來の爲すべき所は我に於ても爲されたり」と云ふのは、此の三經中二經は明文がある。是は最後の説法でありませぬから、言葉を入れて置ませぬと、人が疑ふから言葉を入れたのでせう。涅槃經は最後の説法ですから、言葉を入れる必要はありません。事實を見せたらよい。「私はもうこれで今日は寝みます」と云ふことは、午後九時か十時なら寝みますと云ふことを云ひます。

十一時五十九分には、今日はこれで寝ますと言ふ必要はありません。寝まなかつたら明日になる。そんなことは言はなくても分つて居る。黙つて寝たらよい。それと同じことでもあります。是は事實が示して居りますから、間違ひでございませぬ。是から見ても、此の三經が如來の任務であると、確信して居ります。之をじつと見ますと、三經は同じ線を書いて、今御覽に入れましたやうに、一本の聯絡がずつとございませぬ。此の聯絡を辿つて見ましたら、釋迦一代の説法と云ふものは、すつかり現れて出て參ります。たゞ解釋する爲に色々枝が出て來る。斯う御覽になつたら誤りがなからうと存じて居ります。先づこれで一寸三十分大要を申し上げました。

七、序品の意義

それから今度は少し變りまして、稍々婆藪槃頭の意に随つて、少しく難しい所に這入つて來ます。あ、云ふえらい菩薩の學説ですから、却々容易に窺ひ知れませぬ、私も出來る丈けの力を出して取調べましたが、どうも充分と云ふわけに參りませぬ。此の

世では天親菩薩の代りをするやうな、偉い人はまづ居りませぬから、皆吾々と背比べするやうな程度で、ちつと上手に言ふか言はぬかの相違です。そのおつもりでお聞き下さい。

元來この經の初めに序品じよひんと云ふものがある。此の序品じよひんと云ふものは、言つても言はなくてもよいものです。けれどもやはり家にも玄關と云ふものがあります。近頃の安い借家にはあゝ云ふものはありませぬ。殊に三ノ宮鐵道線路の兩脇にあるやうな、あんな粗末な家にはありませぬけれども、あなた方のやうな富豪よこの御尊宅には、大小の玄關がある。お設けになつておるでならぬのは、簡易生活か、質素儉約なさつて居る爲でせう。私共の家は誰が建てたのか知りませんが、先代が澤山なものを建て、置きました。ツイ此間も私共一寸門を建て、置きました。そうしませぬと物貰ひが入つて来る。上等な人ばかりならよろしうございますが、下等な者が居りますから、何とか制限を加へませぬといけませぬ。どうしても玄關と云ふものが必要である。さうするとこれは必ずしも家宅の美觀ばかりではないやうです。其れ等のやゝこしい者を

追拂ふにも、玄關が是非必要です。私共の所が適例である。金を出して特に門を拵へねばならぬのは、自分が住むだけではない。邪魔になる者を入れぬ様にする用もしてくれます。それで大分奮發しまして玄關を拵えました。

それから推して人間の生活する家に玄關のある如く、お經にも玄關がある。これは當然そうあるべき筈のものです。

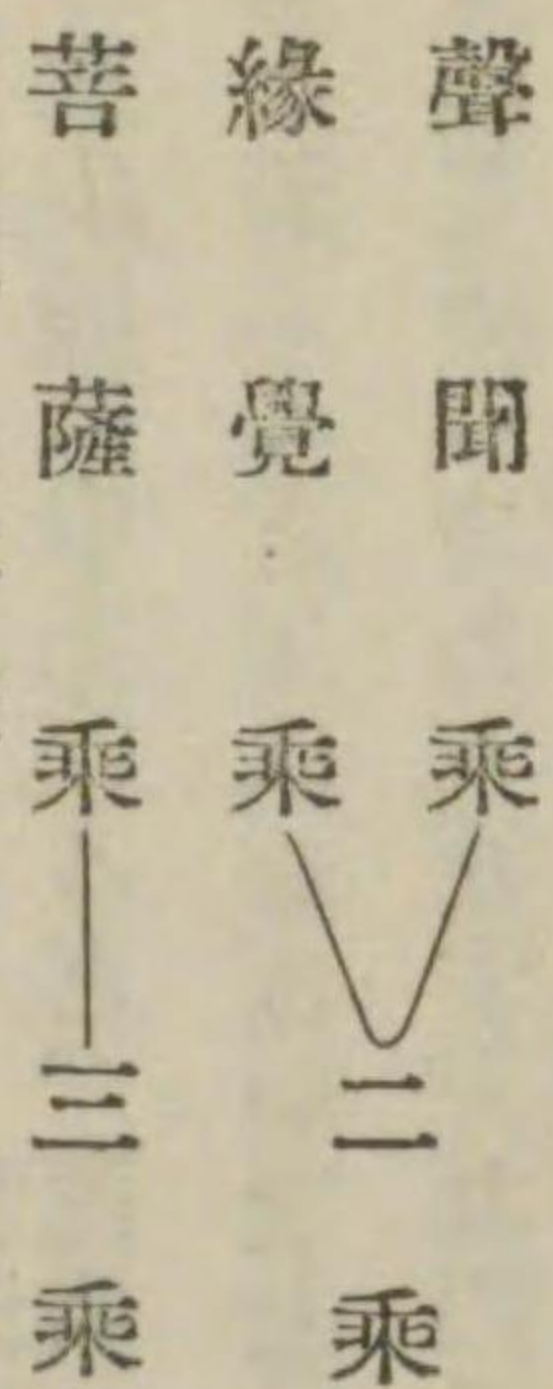
さうするとよいお經程、玄關がやかましくございます。妙法蓮華經めうほうれんげの玄關のやかましいことは迎もでございます。玄關で既にぐつとへたばつてしまふ程であります。大無量壽經たいむりやうじゆきやうも涅槃經ねはんぎやうも、玄關がやかましい。やはり此の經は、一代の說法中重要なだけ、玄關が迎も大きい。自動車も横づけになれば、大變にえらい門番が澤山居ります。物貰ひが樂々這入るやうな門ではございませぬ。第一出て居る所の聽衆ちやうしゆが違ひます。妙法蓮華經めうほうれんげ、涅槃經ねはんぎやう、大無量壽經たいむりやうじゆきやう皆さうです。

私甚だ不肖不敏ふしやうふびんでありますけれども、あなた方のやうな賢明な方の前に講演するのを、非常に名譽に思つて居る。斯う云ふ光壽會員のやうな、偉い方の前で講義すると、

「あの人は偉いだらう。」と知らぬ人は思ひます。知つて居る人は、「何某も聞いた。それぢや餘程名説を言つたに違ひない。」と斯う思うであります。それは何故かと云ふと、聞く人に偉い人が居るからであります。「金を十錢やるから聽いて呉れ」、乞食に斯うふれて廻りましたら、此の頃は不景氣ですから、千人位寄せるには、百圓やつて、新聞地へ行つて頼んだらドン／＼來ます。其の前でやつて御覽なさい。誰も感心しは致しませぬ。貧民救濟の演説でもやつて居るか、それとも赤化宣傳か、それなら警察から一寸來いと引つ張られる位が關の山です。それではつまりませんから、どうしても聽手を選ばねばなりません。此の妙法蓮華經の門前には、却々偉い人達が集つて居ります。序品玄關の値打がこゝにある。ボン／＼穢きたない風をして泥靴で上ると、自動車で綺麗な靴を履いて上ると、玄關でも大分違ひます。泥だらけの靴を履いた手合は、玄關から逃げ出して居る。下等な手合は、一つも妙法蓮華經うほうれんげきやうを聽いて居りませぬ。

八、法華經の究竟問題

全體此の經の趣意はどこにあるかと云ふと、斯う云ふことが佛教ぶつげうにはございます。



聲聞乘、緣覺乘と云ふものがありまして、それから菩薩乘と云ふものがあります。聲聞乘はシユラーヅカ(Śrāvaka)と云ふ字でござります。斯うと云ふ聞くと云ふ字から來て居ります。佛直説の聲を聞いて、さうして悟を開く、佛直接の弟子でござります。緣覺乘と云ふのは、或る種の因緣いんねんの現れによつて、覺即ち悟を得る、斯う云ふのが緣覺えんかくでござります。是はプラチエーカブツダ(Pratyekabuddha)と云ひまして、緣えんによつてやります。プラチエーカブツダは、獨覺どくかくと譯して居るのでござりますが、獨覺と云ふのは、佛を待たない者のことで、佛が出ようと出まいと、さう云ふことには關係せぬ。水の流れを見、風の吹くのを觀、時計の廻るのを見て、そこに悟を開くのであります。是は先生が要らぬのですから獨覺です。それから菩薩ぼさつと云ふことは、ボーデイ

サットヴ(Bodhisattva)無上菩提に志して居る所の人と云ふことです。此の二つ(聲聞乗、緣覺乗)が二乗で、三つ目の(菩薩乗)が三乗でございます。此の上に斯う云ふことがございます。これは四乗とは言ひませぬ。

佛 乘——一 乘

佛乗と云ふものがございまして、之を一乗と言つて居ります。乗と云ふ字は、甚だ面倒な字義を持つて居ります。これを動詞に読みますと、乗せると云ふ義になります。名詞に読みますと乗物となります。春秋左傳なんか讀んで見ますと、車三百乗と云ふことが表れて居ります。恐れ乍ら 陛下のことを萬乗の君と云ふ。それはどう云ふ譯か、天子は萬乗と云ふ言葉が、春秋にございましてから、それで 陛下の事を日本で、文字的に申上げると、萬乗の君と吾々書くことがございます。其の時の乗は、乗せると云ふことではございませぬ。恐れ乍ら 陛下は一萬遍お乗り遊ばしたと云ふことではないのであります。其の時には一萬の乗物をお持ちだと云ふことであります。諸侯は千乗と云はれて居ります。昔春秋時分の大名と云ふものは、千の車を持つて居

つた。天子はえらいから一萬車を持つて居つた。其の時の乗は、車乗と熟字しまして、之を名詞に讀まなければならぬ。所が乗せる時も乗であります。汽車の時は乗車切符と申しますが、あの時の乗は乗ると云ふ字です。車乗と來た時には、車になりますけれども、乗車と云ふと乗るとなります。是は支那の文法が悪いので仕様がございませぬ。この時は乗を車と云ふ意味に取らねばなりません。さうすると乗は車と讀んでも宜しうございます。二車三車とやつて居る所もございまして。

そこでこれはどう云ふことかと申しますると、迷から悟に到る所の、運搬道具と云ふやうな意味です。それでもう一つ

六度 パーラミター(Paramitā)

と云ふのがございます。此の度は渡ると云ふ方の義でございまして。車とか乗とか云ふ處を、今度は渡る道具と云つたのでございます。シュラーヴカ、プラチエーカブツダは渡る者であり、渡る道具を言ふ。所が此の二つの先生は、自分でも悟つたと心得て居る。「私はもうこれでニルヴァーナ(Nirvāna)即ち涅槃、滅度を得て居る」皆さう

思つて居る。ボーデイサツトブは是は滅度を得て居りませぬ、未得滅度の者です。吾々と同じ仲間ですから、それは往生極樂して、無上の滅度を取るかも知らぬけれども、現在に於ては未得滅度であります。片方は滅度したと信じて居ります。それでございませぬから、もう滅度の方へ行きませぬ。「私はもうこれでよい。これでちゃんと出來て居る。私はもう卒業して居る。學生にならんでもよいではないか。」と思つて居ります。今の言葉で云へば、「君等は學生でおやりなさるは御自由だけれども、僕はもう卒業して居るから要らぬ。」と云ふ風な處であります。日本の中でもさう云ふ心得違ひがあります。小さいことで天狗になつて居るのは、此の流を汲んで居る下等な手合です。それは何と言ふても動きはしませぬ。そこで佛陀になることもございませぬ。低級に甘んじてしまつてゐる。此頃で云へば大學へ行つても大して學問はせぬ。博士になつた其の點だけはえらいけれども、外は何も知らぬ。學問が少い上に、用事は多くなる。何事も成就することはない。それでも足れりと思つて居るのと同じことでもあります。片方は足らぬから何とかして完成しなければならぬ。假りに五十億年のカルバに何

十億カルバ倍した長い間かゝつても、「我はありとあらゆるものを、悉く知り盡さなければならぬ。」と云ふ未得滅度の者です。滅度を得て居ると思ふものは、満足して居るから、とても其の心になりませぬ。

それを叩き壊さなければならぬ。それがため佛は餘程骨を折られて居ります。其の苦心の程は、吾々によく分りませぬが、佛陀は何故それだけ骨を折られたか。全體吾々は大乗教徒であり、菩薩乘の教を受けて居る者である。聲聞乘緣覺乘の教は、佛教が日本に來た最初、聖德太子の時から受けて居りませぬ。是は悪いもの、あんなモルヒネをのんだらいかぬと教えられて居る。それですから私共どう云ふ譯で、佛が骨を折られたか分りませぬが、印度では木の下やら石の上に晝寝したり、かゞんで考へる手合が多い。此の連中が又相當らしいことをやります。娑婆に於て小さいことのえらいことは大抵やりませぬ。人の尊敬を受けます。大阿羅漢には自惚がよく出て居ります。其の小分に安んずる心を壞すのに餘程骨を折られた。維摩經にもそれがございませぬ。まだ澤山ございませぬ。妙法蓮華經は増上慢を打ち壊して、「皆んな最後はお前等は」

佛乘ぶつじやうに来るのだ。」斯う云ふことを言はなければなりません。

九、法華經の聽衆

そこでもとのお話に戻りますが、序品じよほんに大聲聞たいしやうもんの偉いのが居ります。緣覺えんかくは佛の居らぬ時に出て來ますから居りませんが、聲聞しやうもんは居ります。シャーリプトラ(Śāripuṭra)是はえらい大弟子です。外の弟子を引卒して、ちやんと會座に坐つて居ります。斯う云ふ大聲聞たいしやうもんがならんで居りまして、あとにマンジュシユリー(Mañjuśrī)と云ひます、智慧えのこりかたまりの大菩薩だいぼさつ、それから彌勒菩薩みろくぼさつ、えらいのが澤山居ります。それが皆列んで居ります。

それですから聽衆ちやうしゆにも、其の邊に何やら天子と云つて、人間世界の外の者が居ります。もつとはげしい處では、夜叉やしや、羅刹らせつと云ふ化物の親方、あゝ云ふ者にはまだお目通りして居りませぬから、どう云ふ恰好か知りませぬ。頭の澤山ある、尾の澤山あるナーガ(Nāga)と云つて、蛇の親方のやうなのが居ります。それも粗末な者ではありませぬ。そんなもの、皆頭をやると云ふのですから、十錢で呼んで來た聽衆ちやうしゆと違ひます。外そとに天女てんによや、緊那羅きんならと云ふ笛を吹いて居るのや、ガンダルヴ(Gandharva)と云ふ音樂師おんがくし、阿修羅あしゆらと云ふ喧嘩商賣けんわしやうばい、迦樓羅かろうらと云つて、身は鳶とびの大きいやうなものなど、色々居ります。

それから人間ではたつた一人、アジャータシャトル(Ajātaśatru)と云ふ、親を一寸片附けたと云ふ王さん。此の王さんが來て居ります。何故アジャータシャトルが、其の場合來て居るかと云ふと、是は人間の一番頭であります。其の當時ま摩迦陀かたの王様でございませぬから、一番頭でございませぬ。人間ではやはり其の一番頭を呼んで來て居ります。所が此のアジャータシャトルは、此の時に法華經ほけきやうを聽ききに來て居りますから、私はお父さんを打込んで居らぬと思ひます。ビンビサーラ(Bimbisāra)と云ふお父さんは、何か病氣であつたかどうかして來られなかつた。皇太子が來たのでございませぬ。特に選んで、ヴァイデーヒ(Vaidēhi)の子にして、マガダ(Magadha)の王なる、アジャータシャトル(Ajātaśatru)とありまして、お母さんの名前が出てございませぬ。

皇太子として話を聽いて居つたのでありませう。

印度では皇太子でも國王と言ひます。普通の子でも太子と云つて居ります。國王たるべき天質を有つて居る場合、國王と云つて居ります。必ずしも踐祚して居るのではないのであります。グーイデーヒの子なる、マカダ國王のアジャータシヤトル、後に王となつたから王と云ふ。アジャータシヤトルは未生怨と云つて、「未だ怨を生せず。」斯う云ふ義でございます。人間では此の王様が一人で、家來を澤山連れて來て居ります。けれども大將としては王様だけで、あとは何やらやゝこしい音樂師やら、聲樂家やら、トンビの親方のやうなものやら、色々澤山のもの居ります。それを前に置いて、之の經は説かれて居ります。

一〇、一切諸佛義務經

所が其の時に特別のことが現れる。世尊は其の時に、特別のサマーヂ(Samādhi)に這入つて、特別の光明を放たれた。一座の大衆は不審を抱いて、「一寸今日は調子が違

ふ、吾々毎々御説法の會座につながつて居るが、今日は大分調子が違ふ。何か是は事件があるに違ひない。」と斯う云つて問うて居ります。

其の時にマイトレーヤ(Maitreya)即ち彌勒菩薩は、マンジュシュリーに問うて居ります。釋迦世尊はサマーヂに這入つて、一言も語らず黙してをいでになりますから、それを壊してお尋ねする譯に行きませぬ。それで會座に居る一番えらいマンジュシュリー(Mañjuśrī)に問うたのであります。「マンジュシュリー、あなたは三世一切諸佛の智慧の母といはれる物知りである。過去久遠のカルバ、數勘定の出來ぬ大昔から、横にして論じたら三千大千世界を、四乘三乘した位の外まで、心得て居るから、何かお前の知識の範圍内に於て、之の類例を求めて呉れぬか。」と問うて居ります。

さうするとマンジュシュリーが言ふのに、「それは考へられぬこともあるまい。」これは序品の下で、詳しく申しますが、大要を申し上げますと、「大昔の昔の昔——非常な數が上げてあります——其の大昔に一寸斯う云ふことがあるのだ。それを俺が承知して居る。日月燈明佛が出られた時の模様と、今の模様とよく似て居る。多分其の時と同じことを

釋迦世尊が説かれるのだらう。「えらい此の人は、昔の先例を調べて心得て居る人です。此の位先例を心得て居る人は、餘りたんと其の後に出て來ませぬ。其の先例を出したのであります。」「どうすると其の先例はどう云ふ先例か。」「其は妙法蓮華經即ちサツダルマブンダリーカ(Saddharmapundarika)と云ふ經を説かれた先例である。今度もサツダルマブンダリーカを説かれるやうに思ふが。」「是が序品であります。

何故特にさう云ふものを、序品に置いて來たのかと申しますと、一つには聽衆のえらいことを云ひ、それから一つにはこれらのえらい聽衆同志の問答や、其の時の光景を云つて、斯う云ふ先例があるのだと示したのであります。それでは何故マンジュシリが先例を言つたかと云へば、先程書きました、「如來に於てなざるべし」とは、吾に於てもなされたり。」と云ふあの文字にピツと應へて來て居る。決して釋迦世尊だけの任務ではないのだ。ありとあらゆる所の世尊は、皆妙法蓮華經を説かなければならぬ義務を有つのだ。苟も佛陀と云ふ悟りを取つた以上は、妙法蓮華經を説かなければならぬ所の義務があるのだ。斯う云ふことでございますから、大昔から今日に至る迄、一

切佛は妙法蓮華經を説いて來た。其の適例、其の先例を、よく心得て居るマンジュシリに伺つたのであります。

一一、天親菩薩の序品釋

婆藪槃頭は此の序品に就て斯う言つて居ります。七種成就と云ふことを云つて居る。是は婆藪槃頭の説でございます。

- 一、時 處 成 就
- 二、衆 成 就
- 三、如來欲說法時至成就
- 四、依所說法威儀隨順住成就
- 五、依止說因成就
- 六、大衆現前欲聞法成就
- 七、文殊師利菩薩答成就

斯う云ふ工合に七つ擧げて來て居りまして、序品には是だけの七通りのものが完備して居るのです。此の完備がなければ、方便品以下妙法蓮華經の要領が立つて行かない。これだけの道具立が揃はねば、完備しないのであります。こゝで私が講義するにも亦同じことでございます。本年度而も本年度早々、本講を申し上げるのでございますから、先づ聽衆の態度に就き、考慮しなくてはなりません。議會が解散したり、其の他何やかやで、人間の心が散亂する様ではいけない。そう云ふことにならない間に、心が落着いて居る時にやらなくてはなりません。場所柄にしましても、昨年は大阪であつた。一昨年は京都、今度は神戸の番だと云ふことになります。神戸はどこがよからう、商工會議所に前から願して居るから、拜借させて頂くがよいと云ふこともありません。どうしても色々なものが揃はなければ、何事も出来るものではありません。出放題、氣まぐれにフラ／＼とやると云ふことでは、何事も成就することはありませぬ。氣狂でない正氣の者のすることには、どんなことにも順序と云ふものがある。計畫と云ふものがある。それが揃はなければ出来るものでない。況んや一代の大師が說法する時には色んなものがありませう。けれども先づさう云ふ工合に、婆藪槃頭は七種成就を説いて居ります。これに就て大體御説明申し上げます。

一、時處成就、これはこの經の説かれる時と、其の場所柄がちやんと成就して居ることを云つたものがございます。經典には「或る時佛王舎城なる耆闍崛山の中に住しましき」とございます。つまりこの或る時（一時）と、王舎城耆闍崛山とが、其の時の時處でございます。婆藪槃頭はこれを釋して、「王舎城は他の一切諸餘城に勝れ、耆闍崛山は餘の諸山に勝る。この法門最勝義を顯はさんが故に。」と申して居ります。

二、衆成就、これは聽き手即ち聽衆でございます。釋迦一大事因縁、一乘の妙典、諸佛の秘奥と云ふ、尊い經典を説かれるのですから、根機の下劣の者や、何時もそわそわして、心の散亂してゐる様な者ではいけなませぬ。それで經には、「大比丘衆萬二千人と俱なりき。皆阿羅漢なり。諸漏已に盡きて、復煩惱無く、己が利に逮り得て、諸の有結を盡し、心自在なることを得たり。」とずつと聽衆の偉いことや、其の時の聽衆の有様が述べてあります。

婆藪槃頭はこれを敷衍して、四種の義に解釋して居ります。一は數成就、二は行成就、三は攝功德成就、四は威儀如法住成就であります。

一は大衆の無數を云つたものであり、二の行成就には四種の義があつて、その一は諸聲聞の小乘行を修する者を謂ひ、二は諸菩薩の大乗行を修する者を謂ひ、三には優婆塞優婆夷比丘比丘尼の、菩薩神通自在にして、不可思議の事を具足し、隨時に種々の形相を示現するが如きを謂ひ、四には出家聲聞威儀一定にして、菩薩と同じからざるを謂つたものであります。

三の攝功德成就は、依處依心依智等に就て、善知識により、教化衆生により、三智（授記密智、諸通智、眞實智）に依る所であると云ふことです。最後の威儀如法成就とは、衆圍繞、供養恭敬、尊重讚歎等の事で、經には「爾の時世尊、四衆に圍繞せられ、供養恭敬せられ、尊重讚歎せられつ」とございます。婆藪槃頭はこれらに就て尙詳しく釋して居りますが、大體こんなことであります。

三、如來欲說法時主成就、これは佛が說法遊さんとする時が到來して、「諸の菩薩の爲に、大乘の經の、無量義、教菩薩法、佛所護念と名くるを説かれた」ことであります。

四、依所說法威儀隨順住成就、婆藪槃頭はこれに三種の威儀（法）があると申して居ります。一は三昧成就であります。お經には「佛、この經を説き已りて、結跏趺坐し、無量義處三昧に入りまし、身も心も動きたまはず」とございます。これに又二種の示現があつて、一は自在力を成就して、身心不動の故に、二は自在力に隨つて、一切の障を離るゝ故にとございます。

次は依器世間と、依衆生世間の二つであると云つて居ります。お經には「是の時天より曼陀羅華、摩訶曼陀羅華、曼殊沙華、摩訶曼殊沙華を雨らして、佛の上、及び諸の大衆の上に散らしつ、なべて佛の世界六種に震ひ動きぬ。爾の時、會に中れる比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人、非人、及び諸の小王、轉輪聖王、是の諸の大衆は、未曾有を得つ、歡喜合掌して、一心に佛を觀たてまつれり」とございます。

五、依止説因成就、佛は眉間の白毫相から大光明を放つて、東方萬八千の世界を照らし、他方諸世界の種々の諸事を示現せられた。大衆はこの佛の光明神通の相を拜して、希有の心を生じ、これはきつと佛が我々の爲に、何事かお説き下さるに違ひないと、渴仰欲聞の念を生じた。これが依止説因成就でございます。

六、大衆現前欲聞法成就、希有渴仰の念を起した、彌勒菩薩以下の比丘比丘尼等の大衆は、然し乍ら佛は何の因縁で、斯うした不可思議の瑞相を示されたのであらう。一體誰にこの理由を尋ねたものだらうと疑の心を起した。所で文殊師利菩薩は、ずっと古い昔から、無量の諸佛にかしづき供養してゐるから、彼ならこの希有の事相を拜見し、其の因縁を知つてゐるに違ひない。と云ふので、文殊師利に疑を質した。これはそう云ふ事でありませう。

七、文殊師利菩薩答成就、これは彌勒の質問に對する、文殊の答辯でございます。佛世尊に斯うした瑞相のある時には、必ず妙法蓮華經をお説きなされるのである。佛は大法を説き、大法の雨を雨らし、大法の鼓を撃ち、大法の義を演べんと欲して居るの

である。過去の諸佛も亦大法を説かんとして、斯うした瑞相を示し、眉間の白毫相から光を放たれた。ずっと遠い昔に、日月燈明佛と云ふ佛がをいになつて、正法を説き、機に随つてそれ〴〵悟を開かしめられた。復次に佛があつて、矢張り日月燈明と號し、かやうの二萬の佛は、皆同じく日月燈明で、十號具足して、説く所の法、各々勝れていみじかつた。とずつと昔からの先例を擧げて、最後の日月燈明佛が、大衆の爲にこの妙法蓮華經を説かれたことを云つて居ります。其の時妙光菩薩と云ふのがあつて、八百の弟子を持つて居つた。この弟子の中に、求名と云ふのがあつて、利養に貪著し、忘れ失ふ所が多かつたが、諸善根を植へて、無量の諸佛に値ひたてまつることが出來た。其の時の妙光菩薩こそ自分（文殊師利）で、求名とは汝（彌勒）である、文殊も彌勒も、日月燈明佛の時から、この法華經に因縁のあることを言つて居ります。この處を婆藪槃頭は、十種の事柄に分けて、解釋して居ります。

一、大義因成就

二、世間文字章句意甚深成就

- 三、希有因成就
- 四、勝妙因成就
- 五、受用大因成就
- 六、攝取一切諸佛轉法輪因成就
- 七、善堅實如來法輪因成就
- 八、能進因成就
- 九、憶念因成就

一〇、自身所經事因成就
 七種成就とは先づこんなことでございます。序品はこれだけのことであります。そこで斯う云ふ工合に道具立が揃つた。さうすると世尊甚深の三昧より下つて説かれた。斯う云ふことになります。

無量壽經では、其の時に阿難尊者が問うて居ります。「世尊どう云ふ譯で斯う云ふことがあるのですか。」と云つて問うて居りますが、此の經では世尊と直應對でなしに、マ
 ンジュシユリーが、大衆同志の問答として言つて居ります。是は何故さう云ふことになつて居るかと云ひますと、何故と云ふことの説明は、非常に難しうございますけれども、一寸そこに二つの經の違ひがございます。一方では現世に一番長くお側について居つて、釋迦佛の日常のことを心得て居るところから、阿難が現世に於ける先例を問うたのでございます。この經ではマンジュシユリーが、過去三千大千世界のもう一つ外まで行つて、先例を求めて居ります。そこでマンジュシユリーの方は、聽衆同志からさう云ふ問答が出ます。佛の間の問答ならまだ拜見したことがございませぬ。そこは此の經の相違でございませぬけれども、大體同じと私は見て居ります。

一一、方便品の意義

さうすると方便品になると、どう云ふ工合になりますか。今度は方便品でございませぬ。此の一品が妙法蓮華經の骨髓でございませぬ。後とは皆これから分れて出て來ます。此の一品が分りさへすれば、後とのものはみな分ります。

方便ほうべんと云ふ文字を申上げて置きますが、方便ほうべんと云ふ字は、ウバーヤ(upāya)で、upaは近づく、upāは文法上の變化でございます。それで近づくアップと云ふのが、一番の字義でございます。これは如何にして近づくかと云ふ方法でございます。遠ざかつて行くにも方法が要いるなら、近づく時にも方法が要いります。汽車には車がついてゐて、走りまいすから、次第に東京に近づいて、遂に到達致します。神戸には船がございまして、岸壁に近づかぬと、上り下りが出来ませぬ。日本の隣りはアメリカに違ひない。広い海がございます。淺間丸がどんなに氣張つても、十二三日かゝらぬと行きませぬ。幾ら隣りでも近附かぬと洵に便利が悪い。遠く離れた處は尙更であります。

併して近づくにはやはり方法がなければなりません。近づくアップと云ふ字義から、方法と云ふ字義を生み出す。洵に廻りくどく、持つて廻つて居ります。これはサンスクリットを研究することの困難である一例であります。こんな工合ですから、恰度一圓均一五十錢均一の中から、一つ合つた所のものを、選り取りするやうなもので、慾の皮をつつばつて、よいものはないか、よい字義はないかと思つて、選り出して當あてる。五十

錢均一の中を探さねばならぬので閉口します。近づくアップと云ふ字から、方法手段と云ふ字を出して來なくてはなりません。

今の所ではウバーヤは、近づくアップと云ふより寧ろ方法手段、戰略戰術と解さなくてはなりません。方便即ち手段方法にも色々ものがある。少々たらかして、足を引つ張つてやる惡方便もあれば、善方便もある。方便とはうまいこと支那人使つて居ります。放便と云へば、小便に使ふやうになつて居ります。日本でも便の字は、よい時にも悪い時にも使ひます。便利と云ひますと、役に立つと云ふことでありますし、又下痢して居るのも便利と云つてをります。方便は手段である。然らばこの方便品の方便とは、どう云ふ手段かと云ふことに就て、一切諸佛諸如來は、如何なる手段を以て、一切衆生を濟度して居るかいと云ふことが説いてあります。

そこでどう説かれてあるかと申しますと、世尊そんじん甚深じんじんの三昧さんまつより出で、シユラーバカの「我はもう悟つた」と云ふ、増上慢ぞうじやうまんの手合てあをなぐりつけて、「永久に吾々は悟れぬ」と思つて居りますのを、「今度悟を開かせて貰ひますから」と云ふ心を發おこさせなければ

ならぬ。一寸藝をやらなければなりません。

一三、開三顯一

先づ最初に呼び出したのが、舍利弗であります。「如來の智慧と云ふものは、逆も量り難いものだ。知り難いものだ。えらいものだ。お前等には解らぬものである。」と斯う書いてあります。解らぬ〜と言つて居りますけれども、ちつとも説法されませぬ。「難解難入逆もお前等這入れぬ。」とたゞ斯う何遍も言つて居られますが、どう云ふわけで解らぬのか、其の理由は何にも仰しやらぬ。聽いて居る者も、これでは何が何だか分りやませぬ。

舍利弗も初め閉口して、解らぬ説ではどうもならぬから、何とか言つて、どうか分らせて下さいと言ふと、「いかぬ〜〜お前等に言つても解らぬ。」一向話して貰へませぬ。三遍請うて居ります。「是非一つ解らせて頂きたい。」諸佛如來の知見は、難解難入でおつとばされてたまらぬものですから、シャーリプトラがへこたれて、「何とか言つて

解るやうになりませんか。」と頻りに解ることを求めて、三度請うて居ります。

三請して居ります時に、五百人のシユラーバカの弟子即ち聲聞弟子が、御辭儀して座を立つて行つて居ります。それが座を起つて行つたものだから、それから佛が、「シャーリプトラ、もう彼等が歸つたから言つてやる。彼等は増上慢の人間であつて、私の言ふことを聽かぬものである。聽かぬのはまだ構はぬけれども、それだけではない。私の言つたことに對して、少しでも疑を起したり謗つたりすると、非常な罪を犯す事になるから、可哀相ながら言はぬ。彼等はどんなにしたつて、悟を開く手合でない。もう少し長い間かゝつて苦勞しなければならぬ。今の所えらいと思つて居るから仕様ががない。それだから難解難入と言つて居つた。さあ彼等が居らぬやうになつたから言つてやつてもよからう。」

そこで其のシャーリプトラに、「お前は今日まで佛陀になられるとは、思つて居らなかつたか知らぬけれども、お前は未來——えらい〜遠い後のことです——に於て、斯くの如き佛陀になる。無上菩提を悟るのだ。」と斯う云ふことになつて居ります。

それは次の譬喩品まで亘つてさう云ふことになりませぬ。方便品だけではさう云ふことは出て居りませぬ。出て居りませぬが、其のもとになるのは、「聲聞乘或は緣覺乘と、今迄言つた所の二つと云ふものは無い。たゞ一つだ。」と斯う云ふことを言はれて居ります。それで聲聞乘も佛陀にならねばならぬことになり、譬喩品が起つて來ることになります。第一増上慢の者は、自分では卒業したと思つて居る連中ですから、聽いても信じない。「お前の卒業證書は不渡手形だ。」斯う云はれても、それを信ずることが出來ませぬ。私はこれに就て、「卒業證書は不渡手形なり。」と、「帝國の前途」に申して置きました。大學を出ても就職難で、職にありつけないお方は、これをお掴みになつて居る證據です。不渡手形でなかつたら、サツサと金に替へて呉れなくてはならぬ筈です。明治十九年頃の大學卒業證書はよかつた。此頃はどうも不渡手形が多い様です。今の大學卒業生にお前のは不渡手形だと云ふと、増上慢ですから怒ります。自分は足れりと思つて居る。智慧がある學士と思つて居る。誰か雇ひさうなものだと思つて居ります。が、なか／＼雇つて呉れませぬ。斯う云ふ手合に三を説いて一だと云ふと、びつくりして怒り出します。怒るのはよろしいが、惡口を言ふ。さう云ふことを言ふと罪を造るから言はれなかつた。増上慢の者が去つて、初めてたゞ一つだと云ふことを佛は言はれて居ります。方便品と云ふものは、澤山長いこと書いてありますけれども、其の要旨はたゞ一つだと云ふことであります。

この經典は序品、方便品、譬喩品の順序になつて居ります。此の三品は明日詳しく申し上げます。たゞ一つだと云ふのですから、もう二はありませぬ。一切諸佛は方便の爲に分る様に三を説いた。階級と云ふものを言つてやらぬと、たゞ一つだと高尚なことを言つてやつても解りませぬ。親父が子供に、「學問した」「えらい」「卒業した」「えらい」「卒業證書を貰つて來ました」「ようやつたお菓子をやる」と言つたと同じことで、假りに階級を分つて、三と説かれてあるのですが、「是は畢竟皆を誘引するために言つたのだ。」それが何になる。たゞ一つの佛乘より他のものはないのである。是が方便品でございます。

一四、天親菩薩の方便品釋

「それだからシャープトラ、お前も將來佛陀になるのだ。」と云ふ議論にびつくりした。其の原理としてオンリーワンと言つたのが、方便品でございました。之に五通りございます。

- 一、妙法功德具足
- 二、如來法師功德成就
- 三、三種義說
- 四、四種事說
- 五、斷四種疑心

斯う五つに分けて居ります。これに就き簡単に説明申上げて置きます。

一、妙法功德具足、これは諸佛の成就したまへる所の法は、甚深微妙であつて、解り難く、入り難いものだ、と云ふことを言つたものであります。諸佛の智慧は、何故

にそんなに甚深であるか。婆藪槃頭はこれに二種の甚深がある。一は證甚深で、これに五種の示現があり、二は阿含甚深で、これに入種の示現があると釋して居ります。

證甚深と云ふのは、如來所證の阿耨多羅三藐三菩提（大菩提）は、難見難知難解難入で、一切の聲聞辟支佛の知ることの出来ないものであると云ふことであります。

阿含甚深は、一は受持讀誦甚深で、佛は曾つて無量百千萬億無數の諸佛に親近供養したとございます。二は修行甚深で、百千萬億那由他の佛所に於て、盡く諸佛の無量の道法を行じたとございます。三は果行甚深で、如來は無量百千萬億那由他劫の間、勇猛精進して、所作已に成就して居るとございます。四は增長功德心甚深で、名聲普く聞へたまへるとございます。五は快妙事心甚深で、甚深未曾有の法を成就したとございます。六は無上甚深で、難解の法は如來獨り能く知るところであると云ふことです。七は入甚深で、宜しきに隨ひ説きたまふ所は、意趣解り難しとございます。八は所作住持甚深で、一切の聲聞と辟支佛の知ること能はざる所なりとございます。佛は三昧より安らかにお起ちになつて、先づ舍利弗に向つて、諸佛の智慧は、斯く

の如く甚深無量であると仰有つた。これが妙法功德具足でございます。

二、如來法師功德成就、これは佛如來の功德を言つたものであります。吾成佛してより已來、種々の因縁と、種々の譬喩と、無數の方便を以て、衆生を濟度して來た。それと云ふのは、如來は方便と智見と波羅密を已に皆具足して居るからである。如來の知見は廣大にして、深遠に、無量と無礙と力と無所畏と、禪定と解脱と三昧とありて、深く無際に入り、一切の未曾有法を成就したまうてゐる。又よく種々に分別して、巧に諸法を説き、言辭柔軟にして、衆の心を悦ばしめたまう。佛の成就しませる法は、第一希有難解にして、唯佛と佛とのみ、能く諸法の實相を究め盡したまうと、ずつと功德が擧げてあります。婆藪槃頭はこれを住成就、教化成就、功德畢竟成就、説成就の四種に解釋して居ります。

三、三種義説、これは三種義の示現であります。三種義とは、一は決定義で、お經には、爾の時大衆の中に、諸の聲聞、漏盡の阿羅漢、阿若憍陳如等の千二百人、及び聲聞辟支佛の心を發せる比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷とございます。つまり方便に

よつて得證し、聲聞道に於て、決定心を作してゐる者であります。

二は疑義で、諸聲聞辟支佛等は、佛所得の難解の法の意趣を知ることが出來ないので、疑を生じたのであります。三は依何事疑義で、先に疑を起した四衆、及び舍利弗自らもこの謂が、どうもはつきり呑み込めない。昔からずつと今日まで、是の如きお説を拜聽したことは曾つて無いが、一體世尊は、何の爲に、甚深微妙難解の法を稱歎せられるのであらう。と疑念を起した。まづざつと斯う云ふ工合になつて居ります。

四、四種事説、これは決定心、因授記、取授記、與授記の四種の事柄でございます。決定心と申しますのは、如來は能く衆生の諸の疑懼を破するから、如來には決定心ありと申すのであります。因授記とは舍利弗が再三佛に説法を促すので、そんなに熱心に請ふのなら、説かぬわけに行くまいと云ふので、愈々第一希有最勝の義理を説き示されるのであります。丁度こゝは其の前提で、舍利弗の三請と、佛の三止で、三止三請と云ふ面白い所でございます。

舍利弗の最初の請に對して、佛は、止みなむ。止みなむ。復説くべからず。若し是

の事を説くならば、一切世間の諸天及び人は、皆驚き疑うであらうと答へられた。婆藪槃頭は、この驚怖に三種の義があると申して居ります。

一は佛は彼の諸の大衆をして、甚深妙境界を相求せしめんと欲す爲で、二は諸大衆をして、尊重心を生せしめ、畢竟して如來の説を欲聞せしめんと欲す爲、三は増上慢の聲聞をして法座を捨離して、去らしめん爲であると釋して居ります。

斯くて取授記となりますと、佛は舍利弗の心持の程を讀まれて、お前は已に三たびも懇ろに請うた。そう云ふのなら今から説いてやるから、諦かに聽いて、善く心に止めよと云ふので、愈々説法が始まるのであります。

最後の與授記は、六種の義に解釋して居ります。一は未聞令聞、未だ聞かざるものをして聞かしむで、かやうな妙法は、諸佛如來の、時ありて乃ち説きたまふので、優曇鉢華（無花果）の花を見ることは殆んど無い様に、甚だ稀なことである。舍利弗よ汝當に信ずべし。佛説には虚妄の言はないから、安心して信せよと、斯う云ふことでございませう。

二は説で、佛は無數の方便と、種々の因縁と、譬喩の言辭とを以て、諸法を演説した。この法は思量分別のよく解る所ではない。唯佛と佛のみよくこれを知るのである。それはどう云ふわけであるかと云ふに、三は依何等義と釋して居りまして、即ちそれは諸佛世尊は、唯一大事因縁の故に、世に出現したまふからである。それ故に諸佛の宜しきに隨つて説かれた法は、義理甚深にして、意趣難解であるのだと云ふ事でありませう。

一大事因縁には四種の義がございませう。一は無上義で、これは如來の一切智知のみ無上であつて、更に餘の道理は無いことを云つたものです。諸佛世尊の世に出現したまふのは、即ち衆生をして、この物智見を開いて、清淨を得しめんためであると云ふこととございませう。二は同義で、聲聞辟支佛と、こうした二乗の輩も、畢竟佛の法身平等である。故に佛知見を示さんと欲すが故に世に出現したまふと云ふことです。

三は不知義で、聲聞辟支佛等の輩は、眞實處（究竟唯一佛乘）を知ることが出来ぬ。故に佛知見を悟らしめんと欲して、世に出現したまふと云ふこととございませう。四は

令證不退轉地で、佛は衆生をして佛知見の道に入らしめんために、世に出現したまうと云ふことでもあります。

四は令住で、如來は唯一佛乘を以ての故に、衆生のために法を説きたまふと云ふことでもあります。

五は依法でございまして、過去の諸佛も無量無數の方便と、種々の因縁と、譬喩の言辭を以て、諸法を演説したまふた。是の法は皆一佛乘のためであつて、諸佛に従つて法を聞いた諸の衆生は、皆究竟一切種智を得た。未來の諸佛も衆生も亦是の如く、現在の十方無量百千萬億の佛土の諸佛や、衆生も亦是の如く、我も今亦復かやうくの次第である。諸佛出世の本懷は、實にこの法華經を説かん爲であり、様々の方便、譬喩、因縁、念觀を以て、隨宜説法したのは、權を開いて實を顯はさんために他ならぬ。但一佛乘の故である。と云ふことでもあります。

六は遮、これも亦但一佛乘と云ふことを言はんが爲に、十方佛土中に、餘の乘の若しく二若しくは三あることなしと、最後にとどめをさしたのでございませう。

五、斷四種疑心、佛は四種の疑心を斷んせられた。一は疑何時説で、佛は所謂劫濁とか、煩惱濁とか、衆生濁、見濁、命濁とか云ふ様な、五濁の惡世に出でたまふのである。斯うしたごちやくと亂れた時は、衆生は慳貪嫉妬等色々の罪障が多いから、諸佛は方便によつて、一佛乘を分別して三と説きたまふのであると、何時説の疑を斷じられてあります。

二は疑云何知是増上慢人で、増上慢とはどんなものであるか、それは比丘、比丘尼にして、自分は已に阿羅漢を得た、これこそ最後身であり、究竟涅槃であると思つて、菩提を求める志のない輩である。併し比丘にして實の阿羅漢を得たものならば、此の法を信じないと云ふ謂はないと斷んせられて居ります。

三は疑云何堪説であります。佛の滅後に於て、かやうの經を、受持し讀誦して、其の義理を解することは、甚だ難しいことであるが、諸佛は五濁の惡世に出現したまふ。若しこれらの餘の佛にお遭ひしたならば、佛に従つて法を聞いて、其の甚深の義理を了悟するであらう。と云ふことでもあります。

四、疑云何如來不成妄語、諸佛如來のお言葉に虚妄は無。唯一佛乗であつて、餘の乗は無いのである。舍利弗よ、それだからお前等は、一心に信解して、佛のお言葉を受持しなくてはならぬ。と佛には虚妄の言なきことを斷んせられたのであります。大體以上の様なことでございます。方便品の要領は、斯う五通りに分れると云ふのが、婆藪槃頭の解釋でございます。

一五、舍利弗未曾有を得

それから其の次は譬喩品です。此の譬喩品が又面白い。是は譬でございませぬ。詳しい事は明日申し上げます。今の聽衆の筆頭シャーリプトラが座より起つて、「今日まで斯う云ふことを聞いたことがございませぬ。非常に結構なことでございます。今迄自分等は到底佛にはなれない、全く佛には縁故のない別のものであると思つて居つた。ところが「同じだ」「お前も佛になるのだ」と言はれたから、びつくりしたのでございませう。なれぬと思つて勝手に決めて居つたのに、ならぬといはれたから、知らぬ所

のおばさんが死んで、その遺産を貰つたより喜びます。これは日本には餘り例がないやうですが、外國には澤山あります。それ以上のことをやつたから、シャーリプトラがびつくりした筈です。「それで初めて私は無上菩提を得た。」と斯う言つて居ります。そこでシャーリプトラが自分の考を述べてゐます。其の考の中に非常に面白いのは、「自分は到底駄目だと思つて居りました。併し其の到底駄目だと思つて居つたのに、今日法を聽いて、初めてそれだけの悟が、開かれるやうになつたのでございます。」と斯う言つて居ります。

ものと云ふものは、自分と云ふ、この慢心を全部去つてしまはぬ限りには、本當のことは聽かれませぬ。自分の根氣と云ふものは、詰らぬものであると云ふことの、確信が出来ぬ限りは、其の法と云ふものは、たつといものだと云ふことは分りませぬ。眞宗で「自力を捨てよ」といはれて居ります。何をやつてもさうでございませぬ。「一寸慰みに聽いてやらう」とか、又は批評的の頭では信は起きませぬ。それですからシャーリプトラは、自分が今日迄智慧第一といはれた智慧を、全部捨て、居ります。「私等何に

も解りませぬ。到底さう云ふことは出来ぬと思つて諦めて居りました。」と斯う云ふ風に自己を否定して居ります。是は譬喩品の所で文字を擧げてお話し致します。さうした所が釋迦佛が、「お前は斯う云ふ譯で、これから非常に後には、如來になるのである。」と成佛の授記を與へて居ります。

一六、火宅三車の譬

それから今度譬喩品と云ふ文字の起つて來ましたのは、(其の次に譬を出して居りますが)此の譬が方便品と丁度一致して居ります。方便品に原理を説いて、「一にして二も三もないのだ。」と斯う云つたのを、今度は譬を持つて來て居ります。此の譬が頗る面白い譬でございます。

非常に大きな家がある。そこに澤山人間が住んで居る。却々の舊家とみえて、堂閣は朽ちて、壁など崩れかゝつた處がある。其の中にゴチャ／＼色々な者が住んで居る。南京蟲、蛇、百足蟲、守宮などの悪い者も住んでゐます。おまけにそこへ火事が

行く。其の時に其の家を持つて居る所の主人は、丁度外出して居つたが、火事だと云ふので飛んで歸つてくる。子供等がそこに残つて居るので、何とかして助け出さねばならませぬ。そこで子供等に、「火事だからそこから出て來い／＼」と云ふけれども、家が大きいのだから、子供等は自分の家が焼けて居ることに氣づかぬ。餘所の火事だ位に思つて出て來ませぬ。親父は安心がならぬ。うか／＼して焼け死んでは大變だからなんとかして引ずり出してやらねばならぬ。「さう／＼お前はいつか私と一緒に、公園へ行つて遊んだ時に、羊にひかせた小さい車に乗つた。あの車が門の所に用意してあるから、公園に行かう。其の次にいつか鹿の車に乗つた。よく走つて面白い。あの鹿の車に乗つて行かう。いつか牛の車に乗つて行つた。」斯う言つて、皆な喜んで乗つて遊んで居つた車のことを言つた。「是は面白い。又お父さん公園に連れて行つて遊んで呉れる。」と云ふので、皆んな飛んで出て來た。ところがそこには羊の車も鹿の車も牛の車もない。大きな二頭だての車が一つあるきりです。「お父さんどこにある。」「馬鹿ツ羊の車や鹿の車のやうな小さい車で間に合うか。早く乗れ／＼。」と云つて乗せた。斯

う云ふ譬たとへが書いてある。明日詳しく申し上げます。

是はつまり羊の車、鹿の車、牛の車と云つたのは、子供を安全地帯に連れ出す假りの方便ほうべんである。それを言つてやらぬと出て來ぬ。ぐづ／＼してゐると遂に焼け死んでしまひます。「お前等は何も知らないだらうが、今はそんなものでは間に合はぬのだ。大きなもの一つでなければ役に立たぬ。三つの車と云つたのは實は嘘で、一つの車こそ本當であるのだ。」と此處に其の譬ひゆ喻ゆが出されて居りますから譬たとへ喻ゆ品びんで、さきの方便ほうべん品びんと、ちやんと合致するやうに出來て居ります。

一七、天親菩薩の譬喻品釋

婆藪槃頭はそはんづは此の譬ひゆ喻ゆ品びんを、次の如く七通りに解釋して居ります。

七種具足煩惱染性衆生

- 一、求 勢 力 人
- 二、求 聲 聞 解 脫 人

三、大 乘 人

四、有 定 人

五、無 定 人

六、集 功 德 人

七、不 集 功 德 人

煩惱ぼんのうに完全に染まつて居る。煩惱ぼんのうを完全に具そなへて居ると云ふ。其の煩惱ぼんのうに斯う七通りあると言ひます。これは吾々なら大抵持つて居ります。箆筒へいじゆうの中は空でも、煩惱ぼんのうは三越の倉庫につまる位澤山持つて居ります。その中味が七通りあると云ふ。これは何れも餘り感心せぬ手合であります。

これからあと今度は七通りに分れて來まして、是が七種の増上慢ぞうじやうまんに變つて來ます。増上慢ぞうじやうまんと云ひますと、自慢して居る者が、度を越えて自慢してゐるので、一寸あつさり自慢して居る者では無いのです。下手な鐵砲打ちが、鐵砲を撃ちに行つて歸りに、店で鳥を買つて、これは俺が打つたのだと云つて提さげて來ます。あ、云ふのは増上慢ぞうじやうまん

に這入りませぬ。もつとえらい卒業證書を持つた學士、博士方が、自分は偉い者と思つて居る。斯う云ふのが増上慢であります。鐵砲打、玉突、碁打、將碁さし等多少手に覚えがあつて、自慢して居ても、極く程度の低い自慢で、是等は増上慢のうちに這入らぬ。どつと駄目な癖に、大抵俺が偉いと思つて居るのが増上慢です。

此の七通りの増上慢に對して、譬喩品、信解品、藥草喩品、化城喩品、五百弟子授記品、安樂行品、壽量品と云ふ工合にずつと次に參ります。是は明日、明後日一括して申上げます。

此の七種増上慢の者に對して、七通りの色々違ふ喩を擧げてたゞき壞してある。七種増上慢に對して、七種の譬喩があるのであります。此の増上慢は大分えらい手合で、玉突鐵砲打位な程度の低い連中ではありませぬ。

七種増上慢

- 一、顛倒求諸功德 (火宅) 譬喩品
- 二、聲聞一向決定 (窮子) 信解品

三、大乘一向決定 (雲雨) 藥草喩品

四、實無謂有 (化城) 化城喩品

五、散亂 (繫寶珠) 五百弟子授記品

六、實有功德 (輪王髻中明珠) 安樂行品

七、實無功德 (醫師) 壽量品

斯う云ふ工合になつて居ります。先に煩惱を具足して居る七通りの衆生を擧げて、これらにかやうに七種の増上慢の者である。その増上慢を破るために、かうした譬喩を以て示されてあります。これに就て、簡単に申し上げますと、第一の顛倒して功德を求める。是はどう云ふのかと云ふと、右のものを左と思ひ、左を右と思ふ、考へが間違つて功德を求めようと思ふのである。間違つて居るから眞の功德になりませぬ。是はさき申上げた火宅の喩を以て、破つてあるのであります。

聲聞一向決定は、聲聞でかたまつて居る。是は窮子の喩を以てして居ります。大乘一向決定とは、雲が出、雨が降つて、一切の藥草をヒマラヤの所で、繁茂させる

と云ふ喩で、是が藥草喩品であります。實無謂有とは、無いものを有ると思つて居る者に、幻術を以て城の姿を見せた。是が化城喩品で、其の喩が説かれてあります。

散亂とは、散亂して居る者には、頸にダイヤモンド、眞珠をつけてやつて、友達が、「お前食へぬやうになつたら之を賣れよ。」と云つて、金をやる代りに、寶珠を與へて置いた。働かずに寢てばかり居るので、飯が食へぬやうになつて、乞食をして困つて居る。そこへ前の友達が歸つて來た。「眞珠を賣つたら、困ることは要らぬではないか。」ハツとびつくりして、お、そうだと氣が附く。只今はそんな親切な友達はないが、知らぬ間に金を入れて呉れた。是が五百弟子授記品であります。

實有功德とは、チャクラヴァルテイ (Cakravarti) と云ふ大皇帝が、頭の毛の中に大きな眞珠を入れて居る。これは金鷄勳章功一級でも却々貰へぬやうな立派なもので、大勳位菊花大綬章と云つたやうなものです。是は安樂行品に説れてあります。

實無功德とは醫者の喩、これは壽量品であります。斯う云ふ工合に、七種の増上慢を破つて居ります。もう一つ七人の諸功德王と云ふのがございます。増上慢は破つた。破

つただけでは役に立ちませぬ。障子を破つたらあとを張りかへて貰はぬと役に立ちませぬ。

今度は破つて障子の張替をするとしても、少し違ふ手合がある。却々面倒な者共が居ります。

三種無煩惱人

と云ふのがあります。さきのは煩惱を具足して居る増上慢で、是は吾々の仲間です。三種無煩惱人は吾々の方と、學派を異にして居ります。

信種々乘異

信世間涅槃異

信彼此身異

もう少し分るやうに、はつきりしなければならぬ手合です。これは無煩惱の癖に間違ふと云ふ、却々厄介な學派です。種々の乗があると云ふ間違ひ、世間に涅槃があると思ふ間違ひ、彼れ是れからだがあると思ふ間違ひ、斯う云ふ二つの間違ひのため、徹底

した空になれぬ手合であります。是は吾々と學派を異にして居る。併し煩惱具足も無煩惱も、役に立たぬ所は同じことでもあります。斯う云ふのには三種平等を話してやらぬといかぬ。折角骨折つて煩惱は斷じたものの、結局役に立たぬことは同じだとすると、煩惱を斷じなかつた方が氣が利いて居る。骨折つて間違つて居ては仕方がない。初めから煩惱具足の吾々の方が手數がかゝらぬだけでも、まだましであります。

三種平等

- 一、乘平等唯一大乘無二乘（聲聞授記）
 - 二、世間涅槃平等——多寶如來入涅槃
 - 三、身平等——多寶如來已入身
- 聲聞授記

此の無煩惱の系統はといへば、大智シャーンプトラの系統ですから、吾等と學派が違ふと申上げた。種々乘異ると云ふ無煩惱は誤りを起します。二乘三乘ありと思つて居つた。それをたゞき壞して一乘平等、唯一乘のみあつて、二三乘は無いのだと云つて、其の上にシユラーヴカの地位の者も、如來になられるのだと云ふ授記をする。

世間涅槃は、多寶如來が涅槃に這入つて居ると云ふ言葉が、此のあとに出て參ります。

又身平等は、多寶如來が既に身に這入つて居ると云ふことになりました。是がやはり聲聞に授記する理由になります。

それから今度ごちやくした所がございますが、一括しまして、十無上と云ふことを天親が言つて居ります。之を以て婆藪槃頭は法華經を皆一括して、こまかいことを言つて來て居ります。

十無上

- 一、種子無上（雲雨） 藥草喻品
- 二、行無上（大通智勝如來） 授記品
- 三、増上力無上（商主譬喻） 化城喻品
- 四、令解（繫寶珠） 授記品
- 五、清淨國土（示現多寶如來） 見寶塔品

- 六、説 無 上 (髻中明珠) 安樂行品
- 七、教化衆生 (涌出) 從地涌出品
- 八、成大菩提 (三種佛菩提)
- 九、涅槃 (醫師譬喻) 壽量品
- 十、勝 妙 力 多寶塔品

斯う云ふ工合に、十無上が説いてありますが、七種増上慢を破る喩と、それからこれより上等のことが無いと云ふことを、十に種類分けして、前の喩で邪を破るばかりでなく、正を顯す方を示したのが、此の十無上であります。

元來種子が上等なんだと云ふのですから、雨が降つても、藥草は藥草として出て來る。雜草とは違つて、種がよい。これが種子無上でございます。行は大通智勝如來の行が、今日に及んで居ると云ふことであります。増上力無上と云ふのは、其の手腕の卓越して居る所を言つたのでございませう。是は今皆が疲れきつて居る。「斯うえらくてはかなひませぬ。喉が渴きます。」と云つてへこたれる。「茲でへこたれてはいかぬ。」

と云ふので、卓越の手腕を振つて皆の物を勵す。これが商主化城の譬であります。

商人の主人、まあ商工會議所の會頭と云ふやうな人が、隊を組んで物を外國に賣りに行つてをる。船で商品運んで行くやうに、印度では陸路、馬に積んだり駱駝に積んで、五十頭三十頭連れて、ガラン／＼と大陸を歩くのです。其の時手下が道中でへこたれた。「お前等こゝでへこたれてはいかぬ」。「でも苦しくてとてもやりきれません。」「少々儲かるか知れませぬが、このまゝでは命がなくなります。」「處が茲で休ませでは困ります。そこで商主は却々えらい。大きな町を見せてやつた。「あの町に行け。もう直ぐ町だ。あそこへ行つたら、今晚はゆつくり休める。水も飲める。酒も飲める。肉も食へる。結構なことだ。」と言ふ。「さあ直ぐだ。氣張れ／＼。」「いくら行つても、そんなものは初めからありやせぬ。さう云ふ工合に悪く言へば騙した。騙したのではない、うまく吊つた。どつちみち同じ事ですが、これが増上力無上であります。

令解と云ふのは、さきに申上げた貧乏するといかぬと云つて、眞珠かダイヤモンドの頸飾を入れた。清淨國土と云ふのは見寶塔品に説れてあります。多寶如來の塔が現れ

た。清淨國土が現れて居ります。説無上とは、大皇帝の髻中明珠であります。教化衆生は、地面から泉がわく／＼涌いて來た。天から降つたか地から涌いたかと云ふに、茲では地から涌き出る方です。成大菩提は、三種佛菩提で、それから涅槃、是は如來壽量品でございます。それから勝妙力は、多寶塔即ち見寶塔品であります。

次に勝妙力の中から三つの力が現れる。天親菩薩と云ふ人は、澤山な數字を使ふことが好きな人で、末世の衆生、受賣甚だ大儀でございます。化城喻品のやうに、何か見せて貰はぬと大變でございます。こつちが化城を出さねばならぬとなると、甚だ工合が悪ふございます。

三 力

法 力

持 力

修 行 力

この力が出て來ます。天親菩薩に學問があり過ぎるものですから、受賣が一寸難し



うございます。もう少しやつて置かぬと、あとが動きませんから、これから説明致します。

法 力 五 門

持 力 三 門

修 行 力 五 門

これだけある。この中修行力が一番大事であります。

修行力五門

- 一、説 力 如來神力品
 - 二、行 苦 行 力 藥王菩薩本事品、妙音菩薩品
 - 三、護衆生諸難力 普門品、陀羅尼品
 - 四、功 德 勝 力 妙莊嚴王本事品
 - 五、護 法 力 普賢菩薩勸發品、囑累品
- 斯う云ふ工合になつて居ります。法力、持力、修行力が、最後の勝妙力から出て來

た。法力に五つあり、持力に三つあり、修行力に五つあると云ふ。此の中修行力の五つで、終ひを裁いてしまつて居ります。如來神力品から終ひまでを之に割當て、婆藪頭は解釋して居ります。

第一の説力は如來神力品であります。第二行苦行力、これは藥王菩薩品と妙音菩薩品で、苦行或は行で出來た所の力を現して居ります。第三護衆生諸難力と云ふのは、衆生が色々難儀になる。其の諸難を保護してやると云ふ。それは普門品、陀羅尼品がそれに當ります。それから第四の功德の勝れて居る力と云ふのは、妙莊嚴王本事品がそれに當るのであります。第五護法力は、普賢菩薩品、屬累品がそれに當ります。これで妙法蓮華經は終ひでございます。

婆藪頭が、妙法蓮華經を讀んだ讀み方は、以上の如くでございます。是はあなた方には、少し繁雜だと思ひます。私も自分の力量より、超越したことを言つて居りますから、苦しうございます。けれども書物にして、之を残す時には、之を書いて置かませぬと方針が立ちませぬ。今度これから進んで、妙法蓮華經を研究しようと思ふ人

に、此の科目を斯うして残して置きませぬと、研究の指針が立ちませぬ。是は丁度水路部で、海圖を書いて居るやうなものであります。船の行かぬ所の海圖は、書かなくともよいではないか。成る程通らぬ所は書かずに、おいてもよいやうなものです。水路部では通つても通らぬでも、ちやんと測量してあります。それで常航路にあらざる所でも、安心して行ける。それと同じ様に、これは法華經の測量圖ですから、斯う云ふ風に却々六ヶ敷うございます。婆藪頭のやうなえらい人の受賣は、煩惱具足の吾々には大變です。大變ですが、やはりそれを研究しようと思へば、水路部で全部の測量をせねばならぬ様に、この經の全體に涉つて、其の組織を調べてかゝらねばなりません。少々御氣の毒でありましたが、これで終ひですから、今度一括して申上げます。

一八、結 論

(一) 授記作佛

妙法蓮華經の大要と云ふものは、どう云ふものであるか。序品を以てえらい人がある

と云ふことを言つて、方便品を以て幾多のものがあると言つたのは、お前等を誘引してやる方便に言つたのだが、實はたゞ一つのものであるのだ。譬喩品以下に於て、今迄えら相に思つて、不渡手形の免狀を喜んで居つた手合に、「お前等そんなことではいかぬ。」初めて「これでは悪うございました。逆も見込がないと思つたが、今日承つて、初めて吾々も如來も、同一の自覺を具へると云ふことが判りました。洵に有難うございます。」と云ふことを如來から承つて、今度は弟子の方から一でございませうと、斯う受けて來た。如來が方便品に一を示して、譬喩品、信解品に於て弟子の方が「洵に一でございませう。」と斯う云ふことを言つた。其のあとには、大智舍利弗其の他のお弟子に、「お前等は最後には如來になるものだ。」と云ふことを仰せられた。「併し吾々如きには、まだお言葉がありませぬ。如何なるものでございませう。」と斯う外のお弟子が問うて居ります。そこで五百弟子授記品に、色々さう云ふことが、そこへ現れて來て居ります。

(一) 如來の壽量

それからもう一つ法華經のよい所、尊い所は、如來壽量品でございませう。明日は方便品、譬喩品でひつかゝりますから、明後日壽量品を申し上げます。是はどう云ふことかと云ふと、如來の壽量と云ふものは、過去久遠より今日に至り、それから今後永遠に亘り、盡くることの無いものだ。「我が釋迦牟尼如來は、カピラヴスツ(Kapilavastu)に生れて、ガヤ(Gaya)の城を去ること遠からざる所で、悟を開いて、今に至る四十何年」そんな不埒なことを考へて居つたら、とんでもない間違ひになる。如來の命はそんなものではない。えらい計算がしてあります。一寸私の知識で分らぬことが書いてあります。さうして如來の壽量は、そんなに遠い昔から今日まで來た。これから後それより倍以上あつて計られぬ。と云ふのですから、非常にまあ永いものらしいでございます。此處には銀行員が澤山でございませうから、算盤の名人も澤山お居でせうが、この壽量品には、人間の算盤で分らぬことが書いてあります。

そんな如來壽量品を、何故言はねばならぬかと申しますと、オンリーワンは横に言つたものです。智慧の程度は、大學中學小學等色々あるが、それらは不渡手形だと云

つて、オンリーワンを表した。併しそれだけでは縦はどれだけ行くかわかりませぬ。如来がいつ出るかわからぬ。出て直ぐ消えてしまふやら分らぬ。それが分らぬと何にもなりませぬ。それですから如来の命と云ふものは變らぬものであると、どんな寸法のものであるか、ちやんと現して来て居ります。それが如来壽量品でございませぬ。一番最後に行きましては涅槃經に於て、如来常住を説いて居ります。如来は過去に常住する如く、未來も常住する。如来と云ふものには、過去現在未來の三者はない。抑も三者を認めるのが間違ひなのだ、とございませぬ。丁度さつきあつた顛倒求諸功德の如く、考へが間違つて居るから、眞の功德になりませぬ。如来は無始無終である。勿論過、現、未と三者區別することは出来ませぬ。それを認めるとなると、顛倒心のうちに這入ります。そこで如来壽量品が大變大事になる。日蓮宗は如来壽量品を非常に大事にしますが、尤もなこと、私共思つて居ります。そう云ふ風に如来壽量品に、一つ大きな法門を現して置いて、次に安樂行品、常不輕菩薩品等、色々なものがございませぬ。要するに此の經は、尊といものだと云ふことを言はなければなりませぬ。

(三) 信受說法者の功德

最初えらい勢を示してありますから、大抵分つて居る筈ですけれども、其の會座の者ばかりではございませぬ。二千餘年の今日に至つた吾々迄、妙法蓮華經を讀むのでございませぬから、釋迦佛の上から考へると、滅後の大衆を見て行かねばならぬ。其等の者が妙法蓮華經を輕んじてはいかぬ。少しでも謗つてはいけませぬから、今度妙法蓮華經の功德が、うんと説いてあります。此の經を一度聽いたら斯う云ふ功德がある。此の經を讀んだら斯う云ふ功德がある。此の經を謗つたり惡口言つたら、斯う云ふ罰がある。信じなかつたら斯う云ふ罰がある。輕蔑したら斯う云ふ罰がある。賞罰分明に書いてございませぬ。

それから賞罰分明だけでない。此の經によつて、今日迄救濟され發心され、色々大なる利益を獲た所の適例を擧げてあります。適例を擧げぬといけませぬ。一錢を以て一萬圓貫ふ、十萬圓貫ふと云つても、貫ふたと云ふことを出して來ぬと役に立たぬ。それでその例が色々出て居ります。最初や、こしい先生が居ると言ひました怪物の親

類、あの手合がびつくりしてしまつた。「えらい事だ〜」と言つて、「吾々怪屬は皆大いにこれから氣を附けまして、妙法蓮華經を讀んで居る者を、私共保護の任に當ります。」吾々妙法蓮華經を信じて居りますから、怪物が保護して呉れて居るのであります。顔は出さぬが後ろでやつて呉れて居るのであります。若し夜半頃便所へ行く。保護者がニユーツと顔を出す。氣絶してしまふやうな、やゝこしいのがあります。これは明後日申し上げます。

(四) 女人成佛

それから其の次に、女の悟を開いた者がある。是は眞中程に来て居りますが、二ヶ所に出て居ります。元來言へば三ヶ所であります。一つは佛の姨さんで、それから佛の皇太子時代のお妃及び其の他弟子の女の人であります。是がやはり當來に於て、如來になると云ふ授記であります。

もう一つの授記はナーガ(Naga)と云ひまして、龍と云ふ字が書いてありますが、これは蛇の親方のことでもあります。支那の龍は、鬼の顔に目鼻をつけたやうであります。

すが、印度のはあんな顔はして居りませぬ。皆んな八つ九つ蛇が出て居ります。一寸恰好が違つて居りますが、兎に角やゝこしい手合です。其の娘さんが、悟を開いたと書いてあります。此の娘八歳になつて悟を開いたのですから、日本の娘さん達のやうに、女學校へ行つて、勉強する必要はなかつた。日本もあゝ云ふやうになると幸せです。濱口さんも政治が執り易くて、至極都合が好いでせうが、残念乍ら斯うして一遍に悟を開くやうな、えらい者は居ないやうです。シャーリプトラが、「女に何が悟れるか」と申しますと、「馬鹿言へ、女も男もあるか」と云ふので、自分の持つて居る一つの眞珠、三千大千世界に値する、工合のよいのを佛に奉つた。佛憐んで、「然らば受けてやらう」と受けられた。さうしたら外の者共がそれを見て、「えらいものを奉つて居る。やはりナーガの親方の娘だけで、よいものを持つて來て供養してゐる。」と感嘆して居ります。「私が悟を開くのは、今珠を佛前に差し上げた、佛がそれを受取られた時間より、まだ早い時間で悟つてしまふ。」と言つたと云ふのが、第二回になつて居ります。

第三回には藥王菩薩品の所で、女が藥王菩薩品即ち此の法華經を讀んで、謂れを信

じ、之を書き寫し、之を疑はずに持つて居たものは、其の功德によつて、西方極樂と云ふ、阿彌陀佛の所に生れると書いてある。此の三ヶ所に出て居ります。昔から印度では女を輕蔑して、餘りよい者と言ひませぬ。中には偉い女も一寸出て來た。勝鬘夫人や、今のナーガの娘のやうな、やゝこしい偉い婦人が居りますが、全體女人成佛の義と云ふものは、外に餘りございませぬやうです。大無量壽經は、女人成佛の義を立て、居りますけれども、是は女人成佛には違ひないが、特に女人成佛と云ふ譯はございませぬ。一切衆生皆成佛する、女人も一切衆生の中だから成佛する。併し極樂は生殖する必要は無い。蓮華化生でありますから、男女の區別は要りませぬ。男も無い女も無い。それが女人成佛の義でございませぬ。

此の妙法蓮華經に女人成佛の義を出して居ります。天臺宗日蓮宗と淨土宗眞宗が、是で喧嘩したものです。私共喧嘩をするのは馬鹿で、何も喧嘩する必要はないと思ひます。「法華經を讀んで、其の功德によつて、阿彌陀佛の極樂世界に生れる。」と斯う云つてあります。何れ成佛するのですから、成佛さへすればよろしい。私さきに申

上げた法華、涅槃、無量壽は、釋迦如來に於ては一本である。後代になつて、安土問答で、信長の時、淨土宗と日蓮宗と喧嘩して居る。其の閑があつたら、淨土眞宗も、もつとよく法華經を讀み、向ふも無量壽經を讀んで、妥協した方がよかつた。妥協しなくて喧嘩して居ります。あゝ云ふことはよくないことであります。私共喧嘩せぬ。どつちも同じことになるかと云ふのですから、喧嘩する餘地はございませぬ。

(五) 護衆生諸難力

其の次に如來成佛の時期。非常に重大な時期がある。同時に妙法蓮華經に出て居ります。

もう一つ外に勝れて居るのは、護衆生諸難力、普門品でございませぬ。是はいづれ明後日終ひ口に、普門品を申し上げますが、是は觀世音菩薩の功德を讚嘆したのでございませぬ。吾々でも偉い人から讚めて貰ふと、洵に愉快に感じます。乞食に讚めて貰つても一向感心しませぬ。小さい涙垂小僧に讚めて貰つても、何ともございませぬ。何となれば自分より向ふの方が劣等なものですから、讚められても嬉しくございませぬ。

自分より優等なものに褒められたら、それだけ値打があるに違ひないと、非常に嬉しく感じます。觀世音菩薩は釋迦如來が、口を極めて讚めて居ります。あんなえらい人はない。非常にえらいと言ふ。如來が讚める位だから、餘程えらいのでございませう。私もやはりえらいお方だと思つて居ります。如來がえらいと言はれるから、えらいと思つて居る。これはもう間違ひございませぬ。

全體觀世音菩薩と云ふものは、印度、西藏、蒙古、支那、朝鮮、日本苟くも大乘佛敎の渡つて居る所では、知らぬものは無い筈です。どの宗旨でも觀音様を拜まぬ宗旨はありやませぬ。まだ比較的吾々の眞宗が、觀音様を拜む分量が少うございませぬ。拜まぬことばございませぬが、外の宗旨が百パーセント、九十七パーセントやれば、眞宗は二十五パーセントやります。けれども拜まぬと云ふことばございませぬ。吾々ども、拜んで居ります。私は觀世音菩薩に就て講演した大意を、本にして大乘社から、出版してありますから御覽下さい。あの人を讚めて置いたら、間違ひございませぬから、ウンと讚めて置きませぬ。

其の觀世音菩薩がどう云ふ働きをするか。斯う云ふと、妙法蓮華經の以上の謂れによつて、現れて來た幾多の力のうちに、衆生の諸難を護ると云ふ力、即ち此の觀世音菩薩が、其の力を現して居る。丁度國に軍隊あり、警察があつて、總て吾々を保護して呉れるから、大きな顔をして居られる。此の頃の支那では、そんなことは言つて居られやませぬ。日本の警察領事館のない所では、殺したら殺し得でやられるから、頗る危険であります。日本で安心して居られるのは、國力が強いからで、斯う云ふやうに、日本の國の力が、吾々日本の國民を護つて居る。觀世音菩薩は一切衆生を護つて呉れる。其の護るのが積極にも守り、消極にも護る。七難を守ると云ふことがありますが、今食へん者に一圓やつてもよろしい。何となれば苦しんで居る所の難を救ふ方が、樂を與へるよりもまだよきです。護衆生諸難力ですから、七つの難ばかり守つて、食へる者を知らぬ顔して居る、そんな冷淡な觀世音菩薩はありやしません。其の觀世音菩薩の非常な威力の發動を示して居ります。

(六) 觀音を通じて觀た法華道と彌陀道

此の觀世音菩薩はこの人か、どこかに戸籍がなくてはならぬ。觀世音菩薩の戸籍調べをすれば、極樂の大衆、即ち阿彌陀佛のお弟子の中の一頭で、極樂國土の人でございす。故に妙法蓮華經普門品で、釋迦如來が極樂の大衆を讚めて居るのですから、それを一寸でも喧嘩すると、工合が悪うございす。吾々喧嘩をやりませぬ。喧嘩せよと法華經に書いてありませぬ。昔から喧嘩したことは洵によくない。今日の人でも、動もすると妙法蓮華經を重んじぬ人があります。是は非常に悪いことで、此の經位尊といふ經はない。大功德を説かれて居る觀世音菩薩は、極樂國土から來たと無量壽經に書いてあります。極樂國土の能力が、普門品に現れて居る。それでつまりこれは極樂國土の延長であることと見ることが出來ます。法華道と彌陀道とは、同様だと私共見て居ります。

もう一つ婆藪槃頭は面白いことを言つて居ります。それはどう云ふことかと云ふと、「觀世音菩薩の名を稱へるものは、六十二億恒河沙の諸佛の名を稱へると同じ功德がある。」と云ふことを、婆藪槃頭は説いて居ります。六十二億恒河沙と云ふと、百年位の命では稱へられませぬ。如何に高速度で言つてもいけませぬ。「名前を稱へるだけに、それだけの効力があるのは、どう云ふことか。」と斯う云ひますと、是には二つの理由がある。名號功德の義でございす。

- 一、信 力
- 二、畢 竟 知

此の二つの理由によつて、名前を稱へると、六十二億の諸佛の名號を稱へると同じ功德がある。詳しくは明後日申します。之を私考へますと、日蓮上人が題目を稱へられて、南無妙法蓮華經と云ふ、其の中に總てのことがこもつて居るといはれたのは、やはり斯う云ふ點から見られたのであるまいかと思ひます。あゝ云ふ大徳になると、獨創的な智慧もありますが、やはり佛教には師匠の教によらずして、獨創と云ふことは無いのでありますから、其のよつた範圍に於て、獨創的の知識を出すのであります。

(七) 南無妙法蓮華經の眞價値

妙法蓮華經と云ふものが、一番尊といものである。尊といものとして見ると、題目は全部を包含して居る。觀世音菩薩の威力は、非常に大きいけれども、名の下に威力の全部を包含して居る。包含して居る爲に、其の名がどれだけの働きがあるか、信力畢竟知、斯の如き力を出すと、婆藪槃頭は言つて居りますから、妙法蓮華と云ふ名の下に、信力畢竟知に於て、一切の說法が這入る。だから題目を稱へよ、と仰しやるのではないかと思ひます。私共日蓮宗でございませぬから、解釋は存じませぬ。門外でございませぬけれども、さう解釋して差し支なからうと思ひます。日蓮上人がさう云はれて居るか、明文は存じませんが、さう云ふ道理になるのです。

吾々妙法蓮華經に歸命すると云ふ言葉の中に、妙法蓮華經の一切の謂れが這入つて、其の謂れと同じ能力が、私の身に出て來なければ、南無妙法蓮華經の値打がない。阿彌陀佛に南無して、阿彌陀佛の能力が現れ、南無觀世音菩薩の言葉の下に、觀世音菩薩の能力が現れるのは、信力によつて起つて來る。畢竟知によつて起つて來る。題目と云ふものが非常に尊とい。妙法蓮華經と云ふものは、非常に結構な經であるか

ら、其の尊とい題目を稱へた 斯う私は解釋致して居ります。

第二一講

一、序 品

昨日ずつと大體の趣意を申上げました。今日から經文に就て申しますが、昨日も申上げました通り、一字々々やつて居りましたらこんな長いものは、二週間五十時間乃至六十時間頂かねば迎もいきませんから、今日は本文一品々々に就きまして、大體の趣意を申上げます。

昨日一寸、之に七通りの成就があると云ふことを申し上げました。是は原文も一番先にあります。序品にはどう云ふことを言つてあるか云ふと、序品の一番頭には、其の時の大衆の名前が出て居ります。之も昨日一寸申上げました。餘りくだらん者は居りませぬ。迎も偉いのが澤山列んで居ります。是は經の文を見て頂いたらお分りでございます。大別して申上げますと、昨日書きました聲聞弟子。これの一番偉いのがシャリー

プトラ（舍利弗）でございます。之を頭としての聲聞弟子がずつと列んで居ります。弟子の中でも、まだ極く十分と云ふ所迄行かん人が混つて居りますが、偉い中には、先づ卒業を來年しようと思ふ位の人も、這入つて居ります。それに出家の男子と出家の女子が加つて居ります。出家の女子と云ふのは、どう云ふのかと申しますと、その頭はマハーブラジャーバチ（摩訶波闍波提）と謂ひまして、佛の姨さんになる人です。是は佛の太子中、佛を御養育申上げた人です。佛のお母さんとは申しますと、此の上の摩耶山にお寺があります、あのお寺に祭つてございます。名前はマハーマーヤ（Mahāmāyā）と申します。是は佛御誕生後、直ぐ亡くなつた人でございす。それで佛御幼少の間をお育てしたのは、姉さんのマハーブラジャーバチでございます。佛はいつもさう云つてお經に説いて居られます。私の姨は私の母と同じやうに、私を育て、呉れた人だと云つてございます。之をサンスクリットで書くとき Mahāprajāpati で、摩訶波闍波提は、支那で音譯したものでございます。それから佛の皇太子の時代に、妃になつておゐるでた耶輸陀羅（Yasodharā）比丘尼も列して居ります。

其の次が今度は菩薩方で、之には逆も偉い、佛と同じ能力を有つて居る、大變にえらいのが居ります。マンジュシユリー(文殊師利)、觀世音、大勢至、斯う云ふ豪傑が皆列んで居る。其の次が却々や、こしい先生方です。是は人間世界外を歩いて居る、天に住んで居る人と云ふ天帝、シャークラインドラ(Cakra Indra)が、手下を連れて来て居ります。もう一つまた上の方をうろくして居る大自在天、マヘーシュヴラ(Mahesvara)これは印度人が今日も盛んに拜んで居ります。この大自在天が手下を連れて来て居ります。天帝が二萬、大自在天が三萬連れて来て居ります。それからもう一つ偉いのは、マハーブラフマン(Mahābrahman)梵天と謂ひますが、之も亦空の上に居る先生ですから、こつちの方に關係のない手合であります。是が又眷屬家來を連れて来て居ります。これは少々減つて、一萬二千の者共と一緒に来て居ります。斯う云うのが集まつて来て居ります。私曾て印度に參りました時、佛の法華經を説き給ふた所へ行つて見ましたが、普通お説きになる所より、ちよつと低くなつて居ります。五六百坪ありまして、上は狭い百坪ばかりの處であります。天は三萬連れて來ると、二萬連れて來ると、空の

上に居りますから、今で云へば飛行機で空の上を廻つて居る様なもので、一向差支ない。菩薩と云ふも、どうせ空中に居るのでせうから、そう困難しないわけです。

次は八大龍王と云ふ蛇の親方で、是は若干千の眷屬と俱に來て居ります。緊那羅と云ふ笛吹き、乾闥婆(Gandharva)と云ふ歌うたひ、阿修羅なる喧嘩商賣、迦樓羅と云つて、トンビの大きいやうな、鷲の親方のやうなのが、澤山居ます。是等が皆百千の眷屬、十萬位の手下を連れて、空やら地面の中に居る。五百坪もあつたら、斯う云ふ偉い手合はいくでせう。

それから今度は人間です。人間は地面の上に立たねばなりません。王様が來て居る。是は人間ですから、地面の上に居らんと工合が悪い。飛行機や地の底から首を出して居る譯に行きませぬ。この王様は昨日申上げました、アジャータシャトル(Ajātagarhu)未生怨王で、若干千の眷屬と俱にありき。とございますから、かれこれ十萬の者共を連れて來て居ります。兵隊やら巡查やら宮内官やら連れて來たのでありませう。是は上に上げて貰へぬから、下の方の平原に居つたのでせう。現場に行つて知つて居り

ますから。約そ想像がつきます。

それだけがまあそこへ寄つて揃うた。さうすると今度佛は、無量義處三昧 *Ananta nirdeṣa Pratiṣṭhāna samādhi* 斯う云ふや、こしいサマーデイに這入つて居ります。サマーデイは心を靜かに、じつとやつて居ること、色々サマーデイには名がある。考へ工合が色々違ふのでございませう。其の中でアナンタ、ニルデーシャ、ブラチシユトハーナ、サマーデイ、こんなや、こしい難しい名は分りませぬ。全體分らんのが當り前で、分つたら間違ひです。佛には分るが、吾々凡夫にはとても分りはしませぬ。「分つた。」と凡夫がそんなことを言つたら、それは嘘を言つたのです。えらい佛だからこんな難しいサマーデイに這入つた。身心不動、身がじつと動かなかつた。所があとの手合は、佛がサマーデイに這入られたが、どんなになるかと待つて居る。さうすると佛の眉の間の、白い毫の間から、ひどい光線を出されて、東の方一萬八千の世界に向けて、丁度サーチライトの様に、ぱーと照された。大分光力が強い。日本には燈臺は幾百もあります。下關を少し行つた所にもあります。あれが六十哩の沖を照して一番え

らい照明力を持つて居りますが、それ位のことではございませぬ。東方の世界一萬八千を照した。下は地獄の底から、上は天の上迄照して、みちいたらざるところはなかつた。餘程サーチライトの光度が大きかつたのであります。「どの位の波長を出した。」波長は書いてございませぬ。こつちが見えても、向ふが見えぬといかぬから力が餘程強い。そこでそこに居る手合がびつくりしてしまつた。東の方へ強いサーチライトをさしつけられたので、そのサーチライトに照されて、其處に寄つて居る連中が、皆よく見える。「えらいことになつて來た。何ぞ難しいことがあるに違ひない。」と會座の者達が疑を起して來ました。

そこで一方の頭マイトレーヤ (*Maitreya*) 彌勒菩薩即ち慈氏菩薩が、マンジュシュリー (*Mañjuśrī*) に其の因縁を問ふて居ります。このマンジュシュリーは文殊菩薩と謂つて居りますが、サンスクリットの解釋では妙吉祥でなくてははいけません。マイトレーヤは慈氏。慈悲と云ふ苗字をして居る苗字で、少々や、こしい苗字であります。それで慈と云ふ苗字の人ではなくて、慈悲を苗字にして居ると云ふ苗字であります。日本

で謂ふと慈氏とでも申しませうか。是は印度には澤山ございます。此の次に出て來ます、マハーマードガルヤーヤナ(Mahāmāudgalyāyana)、目連尊者もくれんそんじや。是は大マードガルと云ふ苗字の苗字であります。サンスクリットでは、餘り不思議と思つて居りませぬけれども、日本人の頭には這入りませぬ。

當來の彌勒佛みろくぶつ。此の次にお釋迦しやくかさんの後繼者として出る人でございます。是がマンジュユリーに言ふのに、「お前は逆も大昔から偉い人間で、ありとあらゆる過去無量の諸佛の前に出たことであるが、斯う東にサーチライトを向けて、萬八千の國土を照されたやうなことがあつたか。どうも私に分らぬ。私に分らぬだけではない。茲に寄つて居るだけの、大衆皆たいしゆ是は不思議なこと、思つて居るに違ひないが、マンジュユリー何とか知つて居るなら言つて呉れんか。」と斯う云つて問うた。さうするとマンジュユリーが言ふのに、「イヤそれは斯うだ。さう言はれるならば、私は知つて居るから言つて上げよう。」「さうか。それでは一つ言つて呉れ。」「是は今釋迦しやくか世尊せそんが、非常に大事なことをこれから説かうと云ふ時になつて居る。却々普通では斯う云ふことはせられない。

い。斯う云ふ奇瑞きぎの現れるのは、其の次に起るべき問題の大切な所を示すので、過去無量の諸佛皆斯う云ふことを今日迄して居る。で先例がある。」「さうか。それでは一つ先例を言つて呉れんと困る。」「宜しい善男子ぜんなんし。これから説明して上げる。」

過去無量無邊不可思議阿僧祇くわごむりやむびへんふかしぎあそうぎの劫かむばの時に、と云ふのですから、澤山な十を百乗せんと、此の數が出ません。劫と云ふのは kalpa で、印度で長い年限を計算する時、計算の仕方に使ふのでございます。三百六十五日で地球が一回轉するのを、一年と云ふのが、吾々の曆でございます。所が天文學者の使ひますのは違ひます。光年と云ふ。是は光が到達する時間から割出した年でございます。それでかなり長いものでございませぬ。それから地質學者の使ひますのは、又違つて參ります。是は地球の作られた時から割出して來て居ります。これも相當長いものでございます。一期間を四十萬年五千萬年宛で、計算して來て居りますから、相當長いものであります。天文と地質とは、普通吾々の使ひます曆よりは、少しく長い曆を使ひますけれども、先づ其の位の

程度のものでございます。印度の學者と云ふものは、洵に根氣のよい先生で、殊に釋迦佛の時分等は、みんな人間長生して居つたものでございますから、百年そこ／＼で死ぬと、「そんな短命なもの」と云つた時代でございます。此の頃は、「六十年生きて居つたから、還暦だ。」と云つて祝ひをして居る。向ふでは、「あれもとう／＼短命で、百年で死んだ……。」六十年はあろか、百年位では短命の中に計算されるのです。所が此の地球が、瓦斯體から一遍固まつて出來て、これが冷えて壞けて、もとの瓦斯體に戻る迄を、一カルバと謂ふのである。印度學者の計算で四十億年とか、四十何億と云ふ詳しい數があります。いづれたんと信用出來ませんけれども、大體一つの地球のゼネレーションでございますから、概算致しまして、私共五十億年と見て居りますが、私ものはつきりした計算は申せませぬ。こんなことはさちつとは出來ませんから、印度の色々の學説を綜合し、大數を取つて、五十億と見て居ります。此の一カルバに十の百乗をかけた年限ですから、人間の頭で一寸計算が出來ん程古い年代です。

其の間に日月燈明佛と云ふ佛があつたのです。其の後澤山日月燈明佛が段々／＼出

た。その所に詳しく書いてありますが、其の日月燈明佛の時に、斯う云ふ風な光明を放つて、さうして東方一萬八千の國土を照した。國土々と云ひますが、地球など國土でございませぬ。相當間隔を置いて、地球位とばして居ります。其の時同じやうなサーチライトを照して法を説いた。それが此の妙法蓮華經だつた。斯う書いてございます。それから皆びつくりした。「えらいことだ。それは全體どの位、妙法蓮華經を説かれた。」「六十劫の間説いた。」「六十劫と云ふと、どう云ふことになりませるか」と云ふに、

1 kalpa × 60 = 60k.

50 億年 × 60 = 3000 億年

三千億年か、つて、此の前説かれたと言ふ。大變長い間か、つたものです。聽いて居つたのもえらい。三千億年じつと坐つて聽いて居つたのですから、餘程の忍耐がいります。説く方の佛もえらいが、三千億年聽いたものもえらい。身心動せず。身と心と一向動かなかつた。そこがえらい所です。それだけの間を一寸茶漬を食ふ間位にし

か感じなかつた。ハツと思つた間に、三千億年濟んだ。茲がえらい所で、時間を超越して來ると、斯う云ふことになつてしまふ。又それを聞いた妙光菩薩と云ふのは、八十カルバの間、つまり今度は四千億年かゝつて説いた。其の澤山の話、ずつと昔から説いたことが書いてございます。

斯くの如く妙法蓮華經と云ふものは、諸佛が一番大事な時に、過去で説かれたものである。それだから聴く者も、大切なもので、洵に上根上智のえらい人である。今申上げる通り八十億年も、六十億年もかゝつて説いたのですが、今日はさう云ふ譯に行きませぬ。却々人間の命も、百年足らずで死ぬやうでは、さう云ふことは出来ませぬけれども、それ位の長い時間を、飯一寸食べる位にも感じぬ程、心を集中する結構な教なのです。それが段々々々今日に及んで來て居るのであります。「私は其の昔から今日に至るまで、ちやんと知つて居る。其の時に聽いて居つた妙光と云ふのは、即ち今日の私だ。」斯うマンジュシユリー自分で言つて居ります。「だから今じいつと待つて居るがよい。今釋迦佛が説くに違ひない。」是が序品で、この經典の玄關であります。

之に昨日申上げました通り、七通りの成就がございませぬ。場所の準備が出來て居る。人の準備が出來て居ると云ふ工合に、七通りのものが備つて居ります。

二、方便品

是が妙法蓮華經一部の肝要な處で、こゝをしつかり聽いて下さらんと、妙法蓮華經は分りませぬ。それだけの玄關が終つた時に、釋迦佛が初めて三昧から今度は離れて法を説かれる。聲聞弟子の一番頭である、智慧第一の舍利弗を呼び出して、言はれて居ります。

この舍利弗は、梵語で Śāriputra と云ふのですが、Śāri は鳥の名です。舍利と云ふ鳥が居ります。雀のやうな小鳥でございませぬ。Putra は子でございませぬから、つまり小鳥の子と云ふことになります。どう云ふ譯でこんな名を、えらい人の名に使ふかと申しますに、お母さんが舍利と云ふ名でございませぬ。これには色々な説がある様です。舍利のやうな綺麗な聲で唄を歌ふと云ふ説や、舍利と云ふ鳥はお喋りな鳥である。お

母さんはお喋りが上手だから、舍利と云ふたのだと云ふ説などあるやうです。私は其のお母さんに會つたことがないから、どつちか知りませぬが、兎に角斯う云ふ名の人です。それで鳥のやうな人の子、母の子と云ふことでございます。誰だつて母の子でない者はありません。父の子でないこともありません。印度には斯う云ふ妙な名が澤山あります。弗と云ふ字は、ブと云ふ音だけ書いたのです。

其の時釋迦佛がこう云ふことを言はれた。「諸佛の智慧は甚深無量で、其の智慧の門は、解釋も出來ぬことであるし、中へ這入ると云ふことも出來ぬことだ。難解難入のことだ。一切の聲聞や辟支佛の能く知る能はざる所だ。あたまたから「お前等は分らないだ」とやられた。舍利弗黙つて聽いて、分らないと言はれた吾々には、聽こえぬものと聽いて居ります。

さうすると段々次に、「私は色々の因縁を交へ、様々の譬を以て色々の言ひ方をして、無量の方便を以て、皆を導いてやつて居るのである。要を取つて言つたならば、無量

無邊未曾有の法を、佛は悉く成就して持つて居る。併し私はもう言ふまい。何となれば佛の成就する所の、第一希有難解の法と云ふものは、唯佛と佛とが解るのみで、お前等の解ることでない。お前等に分らんことを言つても始まらぬから、私は黙つて居るのである。一切諸法の實相悉く皆佛は知つて居る。それはどう云ふものであるか。どう云ふ形どう云ふ相であるか、と云ふことを皆知つて居るが、お前等に解らぬから、それで言はぬのである。「言はぬと云ふ講釋をして貰つた。

シャーリプトラ閉口して、「諸佛の法は甚深難解難入、お前等には解らんとお仰るが、分らんでほかなひませぬ。何とか分らせて貰はんと、甚だ吾々疑がございます。何とか大慈大悲を垂れて、吾々に解るやうに言つてやつて頂かねば、解らん」と仰しやつて、放つて置れたのではほかなひませぬ。何とか一つお願ひします。「シャーリプトラは聲聞弟子の一番頭をして居りますからさう言つた。

佛は、「言ふまい。言つて駄目だから言ふまい。やめておく」と言つて居る。「止みなん」と復た説くを須ひず。「言つたつて駄目である。私が此の難解難入のことを言

つてやつたら、一切世間の天人や人間、迷ひの煩惱を有つて居るお前等のやうな手合は、びつくりしてしまふ。びつくりするといかぬから言はぬのである。と先づ斯う云ふ工合に制止されて居ります。

さうするとシャーリプトラ重ねて、「今仰しやる通り私は信じます。佛の所説を聞いて、則ち能く敬ひ信じます。敬信致します。兎に角言つて下さい。お心配に及びません。皆こゝに居りますのは、佛説を信するものばかりでございます。言つて下さい。」「いかん。それを言つたら、皆んなびつくりする。びつくりするだけなら構ひはせぬけれども、それを信じないで謗る者が出て来る。さうすると信じない謗る所の増上慢の者は、非常な罰を蒙る。それが氣の毒だから私は言はない。言ひさへせねば謗らぬ。謗らねば罰は蒙らぬ。私は言はないで置く。」「そこでシャーリプトラもう一つ重ねて言つた。「是非お願ひ致します。吾々こゝに居ります者は、非常に澤山の大眾であります。百千萬億世々の間續いて宿縁深くして、佛の説を聴き、佛に近づいて來た者でございます。必ずそれを信じます。それを承れば、大變利益を得ますから、どうぞ是非言つて

下さる。」「

無上兩足尊

願くば第一法を説き給へ

我は佛の長子たり

唯分別の説を垂れ給へ

是の會の無量の衆は

能く此の法を敬信せん

と言つて居ります。「私はお弟子の中一番頭、謂はゞ佛の長男でございます。それだから私が代表として、是非お願ひ申します。此の大眾、こゝに居ります者は、これは皆敬つて信じます。」と斯う三遍請うた。三遍も請れたので佛が、「それだけ言ふなら俺が言つてやらう。」と言はれた。時に大眾の中、五千人が座より起つて、佛を禮して退いた。それらが退くのを見て佛世尊は、默然として制止せず、「出て行くなら勝手に出て行け。」で黙つて居られた。

それが出て行つてから後、「さあもう佳し。もう言つてやる。信じない者が五千人居つた。罰根深重にして、未だ得ざるを得たと思ひ、未だ證らざるを證つたと思つてゐる、増上慢の手合が出て行つたから、もう幾らでも言つてやる。あゝ云ふ手合が五千

人居ると信じない。信じないばかりならよいが、疑ひを起す。大罪を犯すと氣の毒だから黙つて居つた。もうあれが出て行つて、お前等信ずる者だけ残つて居るから幾らでも言つてやる。全體法と謂ひ、如來と謂ひ、是が出て來ると云ふことは、無花果の花が咲くやうなものである。」

この無花果と云ふ木は、梵諾で Udumbara、英語では Ficus glomerata と云ふ木で、珍木でも名木でもなく、無花果系統のもので、何でもない木でございます。日本にも無花果は幾らもございますから、あなた方御存知でせう。私は五十年生きて居りますけれども、無花果の花は見たことがございません。花は咲くことは咲くのですが、萼が外側になつて居りますから、中で開花結實してしまつて、外側からは少しも見えない。それで支那人はびつくりして無花果と云つた。無花果とは却々賢いことを云つて居ります。菩提樹も此の系統でございます。フィカス系統は皆さうでございます。それが花が咲くやうなものだと云ふのですから、詰り、「難しいことである。間違つてひよつと出来ることがあるかも知らぬが、まづ無いことである。」と云ふ代へ言葉に、これを出したのであります。

「舍利弗當に信せよ。佛の諸説言虚妄ならず。佛と云ふものは嘘は言はぬものである。佛の説法と云ふものは實に難解のものである。此の法は思慮分別の能く解する所でない。唯諸佛あり乃ち能く之を知る。佛と佛でなければ、お前共淺學の輩は解らぬ。諸佛世尊唯一大事因縁を以ての故に世に出現する。舍利弗云何が諸佛世尊唯一大事因縁を以ての故に、世に出現すると名くる。」是が天臺宗でも日蓮宗でも、非常に大事な所であります。誰が讀んでも大事な所であります。全體釋迦牟尼如來に限らず、一切如來が世間に出て來るのは何の必要があるか。何か其處に必要ながなければならぬ。需要あれば供給ありで、必要のないものは絶滅してしまふ。諸佛世尊も何等かの需要がなければ出て來る譯はございません。諸佛世尊は唯一大事因縁を以て此の世に出た。其の一大事因縁は何ものか。「如來は但一佛乘を以ての故に衆生の爲に法を説く。餘乘若二若三あることなし。舍利弗一切十方諸佛の法も亦是くの如し。全體如來の説く所のものは、一佛乘よりあるものでない。佛となることより外に何物もない。二も三も

ありやしない。これだけ言つたら如來にょらいの出て来る用事は濟んで居る。二乗であるとか三乗であるとか、そんなものはある筈のものでない。」是で初めて説を言はれた。

「今日迄色々の譬喩ひゆいんげん因縁を以て、種々の事を説いて來たが、皆此の一佛乘にならしめんが爲に、言つて來た方便に過ぎないのである。本當はたゞ一つのもの、オンリーワンのものである。二もなければ三もない。お前等シュラーヅカ、プラチエーカブツダのやうな悟りや、菩薩に幾多の階級がある如く見える。殊にお前等はニルヅーナと云ふものを得たと思つて居る。或る一部を以て底に達したものと見て居る。けれども是は決してそんなものでない。是はみんな到達して居らぬのだ。唯一つの佛より外何にもありはしない。ありとあらゆるものゝある如く、お前等は考へて居る。考へて居るのではない。私がさう言つてお前等を引つ張つて來てやつた。種々の方法を以て、所謂方便ほうべんを以てそれを誘引して來た。初めからたゞ一つの佛だと言つたら、びつくりしてしまふ。」

そんな難しいことは、迎も吾々には分りません。佛ならぬ我等の出來ることでない。

釋迦如來去つて二千五百年後に生れた、此の頃の私共もあなた方も同じく分らぬ。難なん解難入かいなんにゅうのことは分つて居るけれども、その他の偉力は本に書いてあるだけで、現物を見て居りません。此の時は會座えざの大衆皆現物を見て居ります。釋迦如來しやくかにょらいの廣大なことを見て、あんな眞似はとでも出來ぬと云つて、引つ込んで居ります。吾々でも非常な傑物が出て來ると、「あゝ云ふことは吾々出來ぬ。あの半分位のことにはやつて見よう。一割位ならやつて見よう。」と思つてみるが、却々一割も難しうございます。もつと卑近な例を取つていへば、誰だつて金を儲けることの嫌ひな者は居りません。「三井ぐらゐ一生のうちに出來るだらうか。」迎も出來ぬ。三井岩崎は迎もいかぬ。やれるお方があるかも知りませんが、私共出來ませぬ。五千億年も生きて居つて、金持になれば兎も角、百年では迎もいけません。餘りえらいのを差つけられると閉口します。それ故にあ吾々は其の分に安んぜよ。勝手に廣い所へ高塀たかべいを拵えて、中へ小さう這入つて居る。まあこれ位で満足する。是がシュラーヅカの手合であります。度すべからざる者で、杓しやくで大海の水を酌んでしまへといはれる。迎もそんなことは出來はしないが、それでも

酌んでしまふ決心をしなければならぬと、それにこびりついて居る。さき逃げた手合はそれなんです。

「佛になる。あんなことは大體出来はしない。そんなことをいはれても逆も行はれぬ。あゝ云ふ人は適には出て来るか知らぬが、それこそウドンバラの華の出て来るやうなもので、常人の出来ぬことである。」えらい方は棚に上げて、小さい所で満足して居るのです。佛はこの手合を増上慢ぞうじやうまんといはれる。増上慢はへこたれたやうでございませが、へこたれたのではございませぬ。増上慢は自慢して居るのです。何で自慢して居るかといへば、これで自分はちやんと出来て居るのだと思つて居る。そこに慢心が出来て居ります。能力がないのに、あると認めて居る所に、慢心が出来て居る。まだ及ばぬなりで、私は十分だと思つて居る。一寸へこたれたやうに見えますけれども、實は是が増上慢ぞうじやうまんになりますのであります。

元來此の三乗じやうと云ふものは無いものだ。「我に方便力ほうべんりきあり、三乘法じやうほうを開示かいじする」ともございませぬ。又實に面白いことが書いてございませぬ。

十方佛土中 唯有一乘法

無二亦無三 除佛方便說

これが妙法蓮華經中一番大事な所です。是が分らぬと妙法蓮華經は難解難入なんかいなんにうで分りませぬ。これだけは解るやうにして貰つて居るのです。全體十方佛土ですから、此の世界だけでない、どこでもよい。唯一乗じやうがあるだけで、二乗三乗じやう、そんなものはありやせぬ。唯一つのものだ。併し佛が方便で、二あり三ありと言つたのは、是は除外例である。引つ張つて來るのに、斯う云つて引つ張つて來てやつた。是は無ないものがあると見せて釣つて來た。けれども本來は一乗じやうよりありはせぬのである。それで

我有方便力 開示三乘法

「私は方便ほうべんを行ふと云ふ所の手腕を有つて居る。我れ釋迦牟尼佛じやくかひにぶつは、この力量りきりやうを有つて居るから、假りに一のものを二と見せて、さうしてお前等を引つ張つて來た。三と云ふものは決して無いものだ。それをお前等が、三ありと思つて喰ひついて居るから間違ふのである。それを初めから一であると云ふと、びつくりするから、三だと云つ

て連れて来た。もう今日になつては、大分ものが解つて来たから差支へない。三は假りで一は本當だと云ふことを説くのである。「妙法蓮華經の趣意、法華八卷の要領は、これだけであります。」十方佛土中、誰有一乘法、無二亦無三、除佛方便説「我有方便力、開示三乘法」これだけ解れば、法華經全部分つたのです。是が釋迦如來の説法の骨髓であります。一代の秘要、一乗の妙典と謂はれて居りますが、これより何にもありやしません。

それから今度はどう来たかと云ふに却々面白い。それで唯一つの法よりない。此の一乗と云ふものは一佛乘だ。三乗は假、一乗が眞實だ。と云ふことを説かれたが、さうして見ると、皆なが佛になれねばならぬと云ふことになりません。所が佛になれぬ者が色々ありまして、○。五佛やらなにやら出て来た。一乘法でない、二乗三乗になつて来ます。そこで昨日申しました涅槃經に、一切衆生悉有佛性と云ふことを説いた。一切衆生佛になる性質を具へて居ればこそ、一佛乘と云ふことが出来る。一佛乘だと云ふ、どう云ふ譯か解りませんが、涅槃經に詳しく説明して、悉く具へて居ると云ふこと

が分ります。法華經を延長して来たのが、涅槃經と云ふことが分ります。所が方便品の中に多少、一切衆生悉有佛性のことを言つて居ります。どうしてもかゝしても佛にならねば、外のものになれない理由が出て居ります。

- 六 度
- 起 塔
- 造 像
- 彩 畫
- 華香音樂
- 歌 唄
- 稱 名
- 聞 法

これだけ種類を擧げまして、これが皆次のやうになつて居ります。
皆已成佛道

これは即ち「皆已に佛道を成じた」と云うことであります。六度によつても佛になれる。佛道といふのは佛に行く道中と云ふことではございません。道の字が使つてございますが、是は支那の譯で道と云ふ字は洵に工合が悪うございますから、私は斯う書いて置きます。

皆已成無上覺

「皆已に無上覺を成じた」此の方が宜しうございます。日本人にはこの方がよく解ると思ひます。道と云ふ字は、支那に譯が二つあるのです。道路の道と云ふ時と、孔子の謂はれる、人の行ふべき所の道、と云ふ時とありますが、この道路の道とは違ひます。此の時の道は、此の無上覺の意味であります。原字は *rope* と云ふ字が使つてございます。ポーデイは悟のことです。故にこの佛道はさとりと見た方がよいのであります。道路の道は、別に *Marga* と云ふ字がございす。翻譯は間違つて居らぬのですけれども、讀む者が間違ふと議論が出て來ます。原文は佛のさとりと云ふ字が使つてありますから、くるひつこはありませぬ。光壽會はどうしても原文をやらぬ

といかぬ理由はこゝにあります。お粥でも米からたくとうまうございすますが、一度だきはうまくない。それと同じ理窟でございす。

佛の悟の中にこれだけの種類があつてある。六度、起塔、造像、彩畫、華香音樂、歌唄、稱名、聞法、之に皆んな輕重上下があるのです。けれどもまあ同じことです。六度とは六波羅密でございす。是に布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智の六つがございす。此の六度が一番主要な基礎でございす。此の六度の完全に行けた者、中位な者、六度の門を飛行機で走つたやうな者、どれでも皆無上覺になるのでせう。

起塔は塔を拵えることとあります。塔はこゝらにもございすますが、屋根を澤山重ねたものを造つてございす。あれは日本と支那とで、あんなものを發明したので、全體塔と云ふものは、屋根を重ねるものではございせん。あれは全體いひますと、原字は *Stupa* であります。佛の遺骨、遺身の舍利を尊崇して、祭つたもので、どつちかと云ふと、お墓のやうなものです。スツーパーのツ（ト）だけが塔になつて、塔と云つた譯

で、笠を澤山重ねてあんな恰好のものを造つたのでせう。何にも笠を重ねなくてもよいのです。ダイヤモンドや、真珠のやうな寶石で拵えても、子供が玩具に砂を盛つて、「これがスツーパーだ」と云つても、皆な同じことであると云ふ。だから輕重上下がござります。

造像、梅檀香木で彫刻したのもござります。彩畫、これは繪でござります。爪で紙へ佛さんの繪のやうなものを、子供が書いても、皆無上覺を成ずる種だと書いてあります。其の次が華香、音樂、歌唄是等は印度で貴人の前に奉るものでござります。日本でもお佛壇に華をあげたり、お香をたいたりしますが、印度の習慣を其の儘持つて來て居るのです。けれども華香、音樂、歌唄と云ふものは、人間の好むものです。人の欲する所のもの、最上のものを、貴人に差上げると云ふのが、供養の義になつて參りますのでございませう。同じ香でも糞便のやうな惡臭のものはいけません。やはり香水のやうなものでないといけません。「香は少々どつちになつても同じぢやないか」それではいけません。やはり名香をあげなければならぬ。音樂にしても、川崎あ

たりへ行くと、ポイラーを叩いて居ますが、成る程これも音樂に違ひないでせうが、ガチャ／＼／＼とどうもやかましくていかぬ。笛とかヴァイオリンとかピアノとか笙とか這入らんといいけません。唄でも酒酔ひがやつて居るやうな、出放題の譯のわからぬでは工合が悪い。聲樂家の唄ふやうなものでないといけません。佛を供養するに物が要る。是等は其の供養の種類であります。

それから其の次は名を稱へる。どう云ふのかと云ふと、「一稱南无佛、皆已成佛道」とありますから、一度塔廟の中に這入つて「我佛に歸命する」と云ふたら、無上覺の資格を具へて居るものだ。と云ふのであります。今迄の六度以下の稱へる心迄は、皆自分の業にかゝつて居ります。是等は凡て能動的のものである。一番分量の大きな能動が六度で、一番分量の小さいのが稱名ですが、これでも能動であります。ところが最後の聞法は所動でござります。

六度
起塔

方便品

造	像	能	働
彩	畫		
華	香	能	働
歌	唄		
稱	名	能	働
聞	法		
	受		
	働		

聞法は働きを受けて居ります。向ふの言はれたのを聞いて居ります。聞いて居る受働でも、皆佛道を成就して居る。皆無上覺を悟つて居る。悟ることが出来るると云ふと、能でも受でも同じことです。茲に面白い所がある。輕重上下が出来て參りますのは、茲の所であります。歌唄と云ひ、稱名と云ひ、聞法と云ひ、凡て散亂心を以てするのです。ゴチャ／＼／＼した心を以て、南无佛と稱へ、又は法を聞いてゐる。散亂心と申しますと、例へば私共の心は、こつちのことを思つたり、あつちのことを思つたり、こつちの話をしたり、あつちの話をしたりと云ふ工合で、常に動搖して居る。是が散亂心で

あります。之に反對したのが寂定心即ちサマーテで、禪宗あたりで坐禪されるのは、サマーテを旨とするからである。ところがこの精神統一は、却々容易なことではございませぬ。吾等のやつて居るのは散亂心の形である。其の散亂心であつても同じことなのであります。六度は寂定心を有つて居ります。又六度の中、輕いのに忍辱定と云ふのが擧げてあります。サマーテ即ち寂定心を持つて來なければ、六度は出て來ぬのであります。ところで散亂心の最も粗末になつて來た一稱南无佛、それでも皆無上覺になる迄の資格があるのだと説かれてありますから、一切衆生皆な佛性があるのだと云ふことになつて來ます。

さうすると今度涅槃經が、それを説明して來て、昨日申しました實行方法は極樂往生、一稱々名の聞法で無上覺になるのだ。斯う云ふ風に涅槃に行き、無量壽經に來て、一本棒にしゆうつとなつて居ります。現に散亂心の稱名なんか、觀無量壽經の下品下生に出て居ります。散亂心の中、稍々寂まつて居りますけれども、それでも寂定心はございませぬ。死にかけになつて居るのに、寂定心はありやしませぬ。『お前死にかけで苦し

いだらう。極樂ごくらくに行けるか行けぬか分らぬ。稱名しょうめいせよ。「アップ／＼言ひ乍ら、十聲稱名じゅうしやうしょうめいで以つて、下品下生げほんげしやうが極樂往生ごくらくわうじやうをして居ります。下の下げだらうが何だらうが、佛道ぶつだう成就じやうじゆさへすればよいのであります。下品中生げほんちゆうしやうの如きは、聞已もんい、即發そくほつで何も能働のうどうして居りません。聞いたきりで何にも働いて居りません。それでもやはり極樂往生ごくらくわうじやうして居ります。

それですから能働のうどうでも受働じゆどうでも同じことであります。苟くも佛の説法と云ふものに、一寸でも觸れたら、もう其の時ぶつたうが佛道を成じた時である。言ひ換へて見れば、寫眞の種板しゆばんに光線が當つたら、種板が變化すると同じことです。近頃は種板もよいのが出來ました。一セコンドの一萬分の一曝露しても、太陽の光線で寫るやうになつて居ります。一度び佛の法を一セコンドの一萬分の一入れても、佛道ぶつだうを成じて居るのだと云ふことを表したのが、この方便品ほうべんぽんであります。さうすると涅槃經ねはんぎやうで一切衆生いっさいしゆじやうしやう悉有佛性しつゆうぶつしやうと云つたらば、無量壽經むりやうじゆけうに十方衆生じつぱうしゆじやう…若不生者にくふしやうじやう不取正覺ふしゆじやうと云つて、同じ原理がさうつと通つて居る。それだから佛の説法せつぽう終始しゆうし尊そんといふものでなければならぬと云ふことも亦分ります。これで方便品ほうべんぽんは、大凡お終ひでございませう。これを要するに、「さう云ふ工合のものであるから、色々の方法を以て、お前等に分るやうにしてやつたのである。それで道中が色々にあるのである。」と云ふことであります。

三、譬諭品

これで一番難關を通つて居ります。それを聞かされて、舍利弗しゃりぶつびつくりしてしまつた。「どうも實にえらいことだ。今日迄斯う云ふことは承りませんでした。私共洵しんに了見りやうけんが悪うございました。今迄の考へでは、佛になるなんて云ふことは、到底思ひもよらぬことだと思つて居りました。今日此のお話を承つて、非常に自分は慚愧ざんき懺悔ざんげを致します。深く自ら責めます。自ら自分を欺いて居りました。私もこれで初めて無上覺むじやうかくを悟ることが出來ます。一つの法の中に居りながら、自分に出來ぬと決めて居つたのは洵しんに詰らぬことで、さう云ふことになり得る所の、一切の功德くどくを自分が捨て、しまつて居つたのでございます。これで初めて後悔を滅し、教を承つて、始めて安心をしま

した。私は非常に心に大歡喜を得ました。「我が心大に歡喜し疑悔永く已に盡く」自分が疑つて居る、悔いた所もこれになつた。

「實智の中に安住して、我定めて當に佛にならむ」實際の智慧の中に這入つて、これから私が佛になります。「天人の敬ふ所と爲り、無上の法輪を轉じ、諸の菩薩を教化せむ」舍利弗進み出て、「これから私は天人に無上の法を説いてやつて、一切衆生達を化導する所の佛となります」と今度はどつと勇氣が出て來て居る。こゝが面白い。先づ最初に智慧と云ふものに對して、非常に慚愧をしてしまつて、何んにもない詰らぬ者である。斯う信じてしまつて、今度一度法を信じた時には、我は即ち佛なりと言つた。眞宗の教でも其の通りでございます。「我はもう地獄一定の者である」と云ふのは、自分の増上慢を除いてしまつて、彌陀の願力によつて佛になると云ふことで、是はもう誰でもさうなければならぬ。眞宗であるとか天臺宗であるとか日蓮宗であるとか云つても、皆同じことであります。無量壽經法華經と云ふ譯はございません。一切佛敎それではなくてはならぬ。

先づ自分がえらいと思つたら駄目です。自分はえらいといへるのは佛御一人で、あとは資格はありやしません。自分は詰らぬと云ふことが分らぬ限り、半々で行かうか、七三位で行かうか、それでは行けません。自分が零になつて、向ふが十でなければ、法を信ずることは出来ぬ。舍利弗は流石智慧第一ですから、原則通りやつて行きます。さうすると佛が言はれるのに、「それでは私これからお前に言つてやる。お前はこれから後、未來の世、無量無邊不可思議の劫を過ぎて、一切百千萬億の佛を供養して、菩薩の行ずる所の行を悉く具足して、さうして華光如來、華の光の如來になる。」と云ふ并ヤーカーナ(Vyākaraṇa)を舍利弗は得た。之を授記と譯して居ります。この授記の無い者は嘘です。佛からお前は將來に於て、佛になると云ふ并ヤーカーナを貰はなければ、佛になられると氣張つても役に立たぬ。本當に佛になる者は、佛から并ヤーカーナを受けて居ります。舍利弗は目前に釋迦佛から、并ヤーカーナを授かつた譯ですから、それで非常に喜んだ。それから長い間、舍利弗が華光如來になつた時の模様が、ずつと書いてございますが、長うございますから、こゝには略します。ゆつくりお經

其の時に宅主が門の前に立つて、小さい子供達に、「お前等早く出よ。段々焼けて来ると、毒蟲が居れぬやうになるから、お前等の處に出て来る。ましてや大火が後に急つて居る。早く出て来ぬと駄目ではないか。」と言ふけれども、小供達は、そこで今迄遊んで居つて、面白くて一向出て来ない。平常ならばよいけれども、片一方から火がついて来る。「怪物や蟲は、飢え渴き惱んで居る。お前達は危険だから、門外に早く出よ。」父親がいかにとなつてみても、一向出ようとしなない。仕様がなから、父親は考へた。

「それでは何んぢや、お前等の好きな面白い色々の車やら、楽しい玩具やらある。羊の車、鹿の車、牛の車が門の外に着いて居るから、早く出て来い。焼けるから、もうこんな家に居つてはいかぬ。怪物が出るし。毒蟲惡獸が出て来るから、早く乗つて行かう。」と斯う告げます。さうすると小供たちはお父さんの其の話を聞いて、「それぢやいつも遊びに行く、羊の車、鹿の車、牛の車に、良い玩具を積んで下さい出ます。」「良い物をやる。お前方の好きな寶を何んでもやる。前に用意してあるから、早く皆出て来い」。子供は喜んで、とんで出てきた。「當に三車を以て、汝の欲する所に隨ふべし。今正に是時なり。汝が願ふまゝに與へるべし。」と書いてあります。さうして子供達が出て来ると、其處に非常に立派な二頭牽きの大白牛車が置いてあつた。

印度では其の時には馬車も使ひましたが、立派な馬がございました。ずつと佛の時代より三百年ぐらゐの後、アラビヤ馬が這入るやうになりましたが、それ迄印度には良い馬はございませんので、従つて良い馬車もございません。寒い所から、アリアン人が這入つて参ります迄は、良い馬はなかつた。王さんでも牛車に乗つて居つたのでございませう。王さん位になれば、或は名馬を有つて居つたかも知れませんが、普通は牛車でございます。印度の牛は速力も早く、うまく走る。それで當時は一般に牛を用ゐて居た様です。譬でも牛車になつて居ります。さうすると一つの大白牛の立派な車があるのみで、三つの車はありません。三つの車と云ふのは父親が子供等を救はんために、方便を設けて假りにこう言つた。「此方が上等ぢやないか。」「それはもう成程、我々思つて居つた小さい車と、比べ物になりません。是は結構でございます。」と言つて、歡喜踊躍して礙り無きことを得た。丁度この譬のやうなものだ。お前等小さい

喜びに耽つて居る。此の世界と云ふものは、火事の起つた家のやうに、苦痛煩惱に充ち、南京蟲も居るだらう。怪物も居る。そんなものがうよくして居る。出よと云つても、小さい車、僅かの寶に満足して居つて、外へ大きなものがあると云つても出はしない。仕方がないから、お前等の爲に、斯う云つて引張り出した。出て見ると、お前等の思つて居るやうな小さな車ではなくして、ずつと立派な、大きなえらいものがあるのである。是が火宅三車の譬であります。

其の後とに、それであるから、此のお經と云ふものは、非常にたつといものである。今お前等は之を聞き得れば、有難い説法と思つて聽かねばいかぬ。一言でも信せんといふと、重罰を蒙ると書いてある。一句聽いたら非常な効力がある。一句謗つたら同じやうに非常な罰が来る。正比例して來ますから、注意せねばなりません。是が譬喩品であります。洵に面白い譬でございます。

四、信 解 品

それから今度は信解品ですが、これが又面白い。舍利弗はそれで解つたが、外のお弟子でございます。スプフーテイ(Subhūti)マハーカートヤヤーナ(Mahā-kātyāyana)マハーカーシユヤバ(Mahā-kātyapa)マハーマードガルヤーヤナ(Mahā-Maudgalyāyana)是等は皆舍利弗について來る大豪傑であります。是が言ひますのに、「シヤールポトラに今ビヤーカーナをお授け下されました。有難いことでございます。」と大變喜んだ。「私共は皆此の大衆の頭に居りますが、非常に老朽を致しまして、もう自分はこれで満足をして居りました。これから進んでやると云ふやうなことは、到底老年では出來ない。もう無上正徧智を求めると云ふことは、一向解りませんでした。併し今日之を承つて、初めて自分は大有の利益を獲ました。今私が自分で考へて居りますること、即ち自分の心持ちを一つの譬にして申し上げます。お聞き取りを願ひたい。」是が信解品の長者窮子の譬で、面白い譬でございます。火宅の譬は、釋迦佛がシャールポトラに對して、言はれた喩でしたが、今度は須菩提、摩訶迦旃延、摩訶迦葉、摩訶目犍連等が、自分の心持を佛に云つて居ります。是は洵に面白い譬でございます。

す。

或る人が非常に年の若い時に、父を捨て、餘所へ行つてしまつて、永年他國を遊つて居つた。所が一向金が儲からぬ。年はかさむけれど、ますます貧乏で苦しむつゝあつちを流浪、こつちを流浪して、漸く廻り廻つて、自分の本國に歸つて來た。お父さんは自分に子が出来ればよいと思つて居つたが、一向出來そうにもない。子供がないので洵に困つて居つた。所が其の伴の方は、誰の家やら分らぬが、方々を經歷る中に、一つの大きなお城にたどりついた。——日本では石垣を積んだ、高いのをお城のやうに思つて居りますが、この城はそんなものではございません。支那の街へ行くと、城壁がぐるつと町をまいて居りますが、別に王様の居る所と云ふわけではございません。神戸市なら御影のさきから須磨の向ふ位、城壁でまいて居る。是が即ち城で、一つの町でございます。支那へ行かれたらすぐお分りでございます——其の中へ行くと、其處の家は廣大なもので、家來やら何やら澤山ある。車がある。輦輿がある。商賈が繁昌して居る。「吾々は故郷で一つ乞食をしてやらう。」城の中に這入つて來た。さう

すると主人の方では獅子の座からこれを見て、自分の息子が來たと云ふことを知つた。彼に一つ此の財産をやらねば仕様がな。城中自分のもので無いものはないが、もう自分も年が寄つて、餘命幾何もないから、財産をやらねば、此の儘消えてしまふのは残念な話である。何でも彼にやりたいものである。伴はどこへ行つたか、見つけたら呼んで來やう／＼と思つて居つた矢先ですから、早速家來に言ひつけて、其の小僧をつれて來させた。小僧と云つても大人ですけれども、其の窮れた乞食を連れて來た。

「來い／＼」と云ふので、警察が惡者を引つ張つて來るやうに引つ張つて來た。さうすると獅子の高座にお父さんが掛けて居ります。城の一つも持つて居るやうなお金持ですから、獅子の高座にも掛けますでせう。婆羅門刹利居士が恭敬圍繞し、眞珠璣珞を以て、身を飾り、拂を持つて居る者や、箒のやうなものをおつ立てた者達が、左右に立つて居ると書いてあります。華簾を下して香水が撒いてある。却々うまいこと書いてあります。この王様のやうな勢力ある有様を見て、乞食は吃驚してしまつた。何でも是は神さんに犠牲を供へると云ふ話があるが、そんなことで、自分はどうせ首

をとばされるに違ひない。金持の方はお前に斯う云ふものをやらうと云ふ肚があるから呼んで来た。小僧の方はこれは大變な所へ来たものだ。自分などの力を用ひて物を得る所ではない。うっかりこんな所に居やうものなら首があぶない。と斯う思つた。此頃免職になることを、首がとぶと申しますが、口に這入るものがとぶだけで、命には別條はございません。所が是は本當に首がぶつとんでしまふ。乞食は首がとんでは大變と云ふので、「逃げ〜」逃ぐるに過かずに、走り去つてしまつた。

そうするとお父さん、小僧がやつて来て、お辭儀したまでは頗る好都合だつたが、これからと云ふ所で、警察便所から逃げるやうな工合にス〜と逃げた。是はいかぬ。何であれば逃げるのであらう。早速つかまへぬといかぬと云ふので、人をやつて追つかせさせる。使丁が走つて行つてつかまへます。向ふはお辭儀して、へたばつて、「どろぞこらへて呉れ、屹度殺されるに違ひない」此の財産はお前のものだ」そんなことが世の中にあるものでない。私は一個の貧しい乞食に過ぎない、此の何十里の城を一貫つて、俺の所にそれが這入る。そんな筈はない。よい加減なことを云つて俺を引

つ張つて行つて、チヨンと来るに違ひない。何とか御勘辨を」と云つて斷るが、使丁は無理矢理に牽いて主人の所へ連れ還つた。小僧はびつくりしてしまつて氣絶してしまつたと書いてあります。父親はこれを見て、「そんなだつたら無理じいするな」冷水を顔に吹いてやつて氣を付けさせて、お前の思ふ様にせよと云つて放つてやつた。「よろしいこれでは仕様がな。あれは志いやしく劣つてゐる。あんな者に何を言つてやつても仕様がな。方便で誘引しなければ駄目である。今度は二人の威徳無き者をやつて、うまく云はせて連れて來させます。「俺の家には穢い仕事きたなが澤山ある。埃溜ごみたの、便所がある。あれに掃除を言ひつける。掃除人に雇ふと云つて連れて來させやう。これなら乞食相應の藝だから安心するだらう。」

印度では便所の掃除をします者は、非常に下等な者で、人間の仲間へ入れません。日本人が糞便を扱ふので、印度では評判が悪うございます。内務省衛生局の技師さんが、熱帯醫學の研究のために、向ふへ行つて、兩便の始末といふことは、洵に衛生上重大なことであると、大いに論せられて、日本に於ては、之を肥料に使ふのである

と、斯う云ふことを淨化装置じよくわくわそうちの時に言はれた。イギリス人は、「日本は衛生が進んで居る」と非常に感心した。所が印度人は、「ハア日本人はあんな下等な者でも、あんな高官になられるのか。昔から聞いて居る。日本には階級がないと云ふ。糞便を自分で手を着けて扱ふてゐる。あゝ云ふ下等なものでも高官になられる。妙な國だ。」と不審に思つた。私は行つた其の技師本人から聞いたのですが、「西洋人は感心したが、印度人は輕蔑してどうもなりません」と言つて居りました。それぐらゐ輕蔑したものです。腹の中に入れて居る間は、王侯貴族も同じことである。出たから空氣に會うて、急に汚なくなる」と云ふことはないと思ひますが、印度は習慣ですから仕様がございませぬ。

これを聞いて乞食は大變喜んでやつて來た。さうして二十年の間糞掃除、便所掃除をした。「二十年の中常に糞を除かしむ」と書いてあります。それから進んで番頭にして家事を治めさせ、出入自由で、漸く心持ちが打ちとけて來た。愈々長者が病氣になつて、「もう自分の壽も久しくない。私は藏くらの中に非常に澤山の金銀財寶を有つて居るが、之はお前よく知つて居る。それで私はもう疑ひはせんから、之を番をせよ。」それでそ

れを番をすることになつた。けれどもまだどうも自ら貧しきことを思ひ、本當の所に行かなかつた。さうすると愈々もう臨終りんじゆうが近づいたと云ふ時に、親族しんぞく、國王こくわう、大臣たいじん、刹利せつり、居士こしと云ふ、ありとあらゆる人々を集める。城を有つて居るやうな長者ですから、さう云ふ人に来て貰ふ。さうしてそこで親族會議のやうなものを開く。「實は是は私の子なんだ。私の子なのだけれども、私がさう言つた所が承知しない。うろ／＼家出してから五十年、引つ張つて來て既に二十年の今日迄來た。私は斯う云ふ名で、此の伴は斯う云ふ名で、斯う云ふやうにして生れて斯うである。もう私は壽が餘計ない。臨終も近づいて居るしする。「此れは實に我が子、我は實に其の父」だから、此の財産は皆んなこの子にやるのである。」と斯う云ふことを皆んな多勢の前に言つた。其の時に初めて父の言を聞いて、「なる程是はえらいことである。此の大財産が今自分のものになるのである。」と云つて、「大歡喜だいこんぎして未曾有みそうを得たり」と書いてあります。

「丁度私共そんなものです。佛が無上正徧智むじやうしやうへんちを覺れと仰しやつた。そんなことは逆もかなひませんと云つて逃げた。所が佛方便はうべんを以つて、ズル／＼と引きずつて、四十年

の間養つて、今日初めて吾々無上正徧智に至るべきものだと言ふことを、第一に兄貴の舍利弗に仰しやつたので、私共同様に思つて、非常に喜んで居ります。」と是が長者窮子の喩であります。是が自分達の心持を言つた、逆も面白い喩にしてあります。此の終りにもございますが、すべて此の經に於ては、信を以て能入とすると云ふことが書いてあります。「信と云ふことが一番基礎だ。信じなければいかぬのだ。無智の人の中に於ては、此の經を説くな。分らぬ者の所では言つてならぬ。」と譬喩品にも出て居ります。さうして信解品に来て、「佛の化導する所は虚しくない。是が即ち佛恩を報ずると云ふことになるのだ」。譬喩品で信と云ふことを言つて、此の信解品で報佛恩と云ふことを言つて來ました。「報佛之恩、我等爲すと雖も、諸佛子等菩薩の法を説き、以て佛道を求む」と斯う書いてございます。これで是は終ひになつて居ります。

五、藥草喩品

是はやかましい雲雨の喩であります。どう云ふことかと云ふと、三千大千世界のあり

とあらゆる所に草が生えて居る。大雲が三千大千世界を覆つて、一時に雨を澎いだ。上から降る雨は同じでも、生える草は各々異なるから、其の種性に随つて、皆受くる所を異にする。それだけのことで洵に簡單であります。それはどう云ふことを言つたのかと申しますに、如來は同じことを言つて居るが、聽く者の程度や了見が違ふ。百分の百、百分の九十、百分の三十と云つた工合に色々である。雨に何にも變りはありやせぬ。此の草には水をかけてやる、此の草にはかけずに置く。そんなことはない。皆同じやうにかけて居る。生えて居る者が違ふから、そこで聲聞、緣覺、菩薩と云ふ風に小乘あり、大乘ありで、各々差別が出來てきた。如來の方は一乘より言ひはせぬ。是が藥草喩品であります。さうして段々進んで來て、彼の藥草類が、大雲の潤を蒙り、其の種性のまゝに、各々生長する如く結局は皆佛になるのだ。それについてやはり摩訶迦葉に、色々詳しい話が出て居りますが、これだけにして置きます。

それからもう一つ盲者の喩があります。是は少し喩が違つて居ります。盲者の前に行つて、「赤い色がある」、「青い色がある」、「日がある」、「月がある」、「花がある」と云つ

ても信用しません。生れてから見たことが無いから、そんなものが何處にあるか分りやしません。中途から盲目になつた者は、子供の時に見て居るから、青いもの赤いものを想像する。生れ乍らの盲目に、青いやら赤いやら分る筈はない。三角である五角であると云へば、觸つて見れば分るけれども、色は觸つても分りやせぬ。所がこゝにえらいお醫者さんがある。非常によい藥を有つて居る。それを眼病で困つて居る者に、つけるかどうかして見えるやうにしてやつた。盲目はびつくりした。「は、あ世の中には色と云ふものがあるものだ。恰好と云ふものがあるものだ。私はありとあらゆる色、ありとあらゆる形が皆分る。」盲目が目を明いてさう言ひます。

さうするとこゝへ五通具足して居る大仙人が出て来て、「何を言つて居る。お前は目の前にある位のを、少しばかり見て、それで分るの分らぬのと言ふ。けれどもそれで足れりと云ふことは出来ぬ。地球の外を走る事も出来はせぬではないか。そんなことで何が分るものか。」仙人ぼろくそに言ふ。「そんなことが出来るか。」「出来る、それは坐禪して、神通をやらねばならぬ。」それから、生盲の目明が、山の中に這入つて、

五通仙人に師事する。そうしてやつて見ると、それは逆も今迄と違つた、まるで變つた面積のものが、分つて来るやうになつた。めくらの者は流轉三界の煩惱の者で、それから生盲が一寸目明になりよつた所で、やつと二乗三乗の仲間である。本當の五通仙人にならなければいかぬ。是が生盲の喩であります。是はこれで終ひでございます。

六、授記品

これは先にありました、摩訶迦葉、須菩提、摩訶迦旃延、摩訶目犍連等の大弟子が皆んな「お前は斯う云ふものになるのだ。お前は斯う云ふものになるのだ。」と云ふ、未來の世に如來になるビヤーカーナを、ずつと説いてございますだけで、大して事件はこれにはございません。さう云ふことを説いたものだと思つて戴いたら宜しうございます。たゞもう「皆當に佛になるのだ」と云ふことだけが主でございます。

七、化城喩品

是は二段になつて居りまして、化城の喩の出ます迄に、大通智勝如來の緣起と云ふものが、出て来て居ります。是は釋迦佛が一切大衆に説かれて、大昔の大昔の其の又昔の大昔に、佛があつて、大通智勝如來と言つた。其の昔の計算が逆もなまやさしい計算ではいけません。計算の數を御覽に入れます。びつくりする程の大變なものです。通常の算盤ではこんな計算は到底出来ませぬ。

三千大千世界のありとあらゆる所の地面、三千大千世界と云ふのは、此の地球ばかりでございませぬ。吾々の住んで居る地球は一つの大體でございませぬ。此の大體を三千寄せたのが三千で、大千はそれを二乗したのであります。一寸今の望遠鏡では見えません。それだけの世界があると假定して、其れを皆潰して、それを又墨にする。地球を一つ墨にするも大抵ではありませんが、三千大千世界を墨にする、其の墨をする硯が亦大變なものでございませぬ。兎に角其の墨を筆につけて、東の方千の國土を過ぎると、こゝで塵のやうな點、塵點を置く。さうして又千の國土を過ぎて、一つ塵點を置く。算盤が餘程複雑です。斯う云ふ工合に千の世界を過ぎては塵點を打つて、磨つた墨が

無いやうになる迄、行かねばならぬ。大分遠方迄行かねばなりません。その墨がないやうになるのをお前はどう思ふか。是の諸の國土を、若くは算師——算盤の師匠、算術の先生——若くは算師の弟子が、其の邊際を得て、其の數を知るや否やと書いてあります。算盤の先生でも弟子でもよいが、其の數が分るかと書いてある。とても分るわけはない。日本の算盤の先生でも、それは知りませぬ。中學校の教師の免狀位持つた者では逆も分りませぬ。

其れを今度はポツンと置いた塵點の所も、其の間の千の國土も、皆んな一緒に磨り潰して、今度は墨ではない埃にする。アトム(Atom)の状態に擦抹する。此の微塵をエコール五十億年に計算する。一切に計算する。其の數がどの位あるか、年で計算すると五十億を掛けなくてはならぬ。劫單位で行つて、此の國土を磨り潰した微塵の數がどれだけあるか。其の數よりもまだ長い昔に大通智勝如來がいました。「彼の佛滅度して已來、復是の數を過ぐることを無量無邊百千萬億阿僧祇の劫なり」とあるから、一寸吾々の算盤では計算出来ませぬ。それから「我如來の知見力を以ての故に、彼の久遠を

観ること猶し今日の如し」是が却々えらいところです。其の昔の方を、如來の力で観るから、今こゝで観て居るやうに見えると言はれた。是は一寸釋迦如來だけです。斯う云ふことの算盤は吾々には思ひもよらぬことですし、今現にあるやうに見るなど、吾々には到底出来ませぬ。さう云ふ昔に大通智勝如來と云ふ如來があつた相です。

其の如來に十六人の子供さんがあつた。王子があつた。此の如來がやはり釋迦如來のやうに、最初國王であつた時に出来た子供さん方です。それが後に出家をせられたのです。其の如來の時に色々のものが出て来ます。先づ大梵天が出て来て居ります。これらのマーハーブラフマン(Mahā Brahman)が如來の相好之に過ぐるものなし云々と云つて讚めて居ります。讚嘆光明で如來の光を讚めて居ります。さうして此の十六の息子さんも亦出家して居ります。其の十六人の名がずつと書いてあります。其の中色々の名がございますが、吾々の方で一番頭へ這入り易いのは、阿彌陀佛が九番目の息子さんであることです。吾が釋迦牟尼佛は十六番目の息子さんであるといひます。其の時分からやつて居る。お父さんの話だから釋迦牟尼佛もよく分つたでせう。それから今日

迄此の法を説いて来て居る。一乘法を説いて来て居る。是が大智勝如來の縁起でございます。九番が阿彌陀佛で、十六番が釋迦佛でございます。是はお忘れないやうに願ひます。こゝは非常に大切なところでございます。聲門乘、緣覺乘、菩薩乘と云ふ差別は無い、凡て一佛乘である。一切衆生は悉く佛性を有するものだと、色々の譬喩を上げて説かれて来ましたが、さて小乗の者が大乘の者と等しく成佛すると云ふ根據がございません。それで遠い昔の因縁を引いて来て、世々かくくであると言はれたもので、弟子達は未來何時に成佛すると云ふ授記作佛と共に、其の根據を明にしてあります。其の次に本當の化城の喩が出て居ります。一寸昨日申上げましたが、どう云ふことを云つたかと申しますと、「こゝらでちよつと一と儲けをせねば不景氣で立行かぬ。先づ外國貿易に行かうか、さうして五百人程隊を組んで、馬、駱駝、船、車色々のもつちを持って出掛けた。其の中一番頭になる、此の商工會議所の會頭と云ふやうな隊長がある。その言ふのには、これからさき五百由旬と云ふ距離がある。是は吾々でも計算が出来ます。一由旬は大略七軒であります。」

7 Kilom. × 500 = 3500 Kilom.

三千五百 粃位の距離でございます。三千五百 粃と云ひましたら、こゝから四川の成都へ行く位の距離でございますから、印度のやうな大きな大陸なら、こんなもの位でございます。其の道は大分えらいぞ。お前等覺悟して俺について来いよ。沙漠のやうな所を行つたのでございませう。所が皆途中で閉口してしまつて、「是は閉口です。親方 迎もどうもなりませんね。『我等疲れ極まり、而も怖畏して復進む能はず。前路猶遠し、今退き還らむと欲す。』と書いてあります。『五百由旬の六割やつて来たが、お腹は空しく、疲れはて、あとの四割は迎も行かせぬ。もう迎も辛抱出来ませぬ。これでこらへて下さい。』と中路で屁古垂れてしまつた。

親方考へた。「今迄こんなに澤山持つて来た商品を、こんな所へ捨て、歸らうと云つて、歸れるものでない。家へ歸らうと云つても、三百由旬兎に角戻らなければならぬ。向ふへ行くにしたつてもうあと二百由旬程ある。大變な寶を放つて歸ると云ふやうな、馬鹿なことがあるものか。『イヤもう迎もやりきれませぬ。』仕様がな。そこで此の

親方、えらい人で幻術を使つて、大きな城を見せてやつた。城壁で圍んである一市街、神戸のやうな町を見せたのです。さうして置いて、「城が見える。もう直ぐ向ふだ。私等の行く所はさきだけでも、兎に角あの前に見えて居る城に行つたら、休息が出来るでないか。又そこで休息したら、それから進んでも差支ないでないか。』は、あ大きな城が見える。結構です。それでは一つ氣張つて向ふ迄行きませう。それから皆幻術の城へ這入つた。こつちの目が誤魔化されて居るから、まあゆつくり休息した。さうして休息したので疲れが癒つた時に、ぱつと消してしまふ。依然たるもとの沙漠です。「待つて呉れ、もう休息出来たでないか」休息出来ました。「二百由旬行け、もう千四百 粃だ、氣張れ、さうして氣張つて行つた。是が化城喩品の喩であります。

元來五百由旬行かなければならぬ。弱い者は途中でへこたれた。そこで三百由旬の所で城を見せてやつた。「先づお前等の悟と云ふものは斯う云ふものである。」と言つて、二乗の悟を示した。「實はそんなものはありやせぬ。私の方便力で見せてやつた。

お前等一應休息が出来たら、今度本當の所へ行かなければならぬぞ。」是が化城喩品であります。是は昨日申しました、十無上の中行の無上でございます。

八、五百弟子授記品

此邊は大抵停らずに急行で走つてもよい處です。それでも一つ二つは大きい停車場がございませう。此の五百弟子授記品は、第二流位の所が五百人ある。其の手合に記別を授けたことが書かれてあります。こゝに先申しました繫寶珠の喩が出て居ります。憍陳如以下第二流の五百の弟子達が、佛より授記を得て未曾有の歡喜を得、佛に申すには、「私共洵に無智の者でございました。佛は菩薩でおはした其の時より、私等をさとして一切智の心を發さしめたもうたのに、私共はすつかり忘れてしまつて、自ら滅度をしたものと思ひ込み、少分の涅槃に安んじ、以つて足れりとして居りました。譬へば貧しい人が、親友から無價の寶珠を着物の裏にかけられたのも知らず、方々をさまよひ歩いて、衣食のために、艱難苦心してゐたが、或る時其の親友から、それ

とさとされて、非常な歡喜を得、自ら恚にせる如く、私共も今佛の授記を得て、初めて實の滅度を知りました。洵によるこばしい極みです。」とこれが繫寶珠の喩でございませう。恰度前の信解品で摩訶迦葉が、特に信解を長者鷄子の喩で申した如く、五百の羅漢が佛の前に於て、授記を得たことを非常に喜びまして、この喩を出して其の心持ちを述べたのであります。これは洵に面白い喩でございませうから、も少し詳しく申上げておきます。

或る人がありまして、自分の極く親友の家へ行つた。所がお酒を飲んで酔拂つて臥てしまつた。御經驗のある方が此の中にあるかも知れませぬ。お酒を飲んで酔拂つて、何も知らずに臥てしまつた。所がその親友何か官の御用があつて、どうあつても立つて行かねばならぬ。それで自分の友達を起しても、困つたことに、グウ／＼寢て居て、一向起きそうにもない。あの友達は貧乏で酒喰ひだ、金のない先生だからさつと困るに違ひない。何とかしてやりたい。寢て居るので言ふ譯に行かぬ。それから眞珠の上等大きなのを、著物の裏へ縫ひつけて置いて、さうして立つて行つた。

其の酒喰ひ目を開いて見た。所が友達は何處へ行つたか居りませぬ。扱てどこへ行つたか、そこらのお巡りさんに聞いても分らぬ。だん／＼調べて見ると、官の御用があつて、夜遅く立つて行つてしまつた。そこで自分が起きた時には、もう立たれた後だから仕方がない。さあ困つた。少々無心を言つて、何とかして貰はふと思つて出て來た。官の用事で、俺の酔拂つて居る間に出て行つたのぢや仕様がな。其處を出て行きまして、あつちへ行つたり、こつちへ行つたり、うろ／＼やつて見たけれども、何分當節不景氣で緊縮ときてゐるから、うまい汁にもありつけない。さう云ふ事は、經には書いてありませんが、昔からありますこととせう。「衣食の爲の故に勤力求索し、甚だ大いに艱難す。」と書いてある。これは非常に不景氣でいかんことです。詰り金が儲からんと云ふことです。「若し少しく得る所あれば便ち以つて足れりと爲す」慾の小さい先生で、食へさへすれば結構な位でやつて居つた。一日五十錢か六十錢取つて居つたのでせう。

所がそうしてゐる中に、不圖、道で親友に會つた。「全體お前何して居るか、馬鹿ッ。

何と云ふ貧乏たれたさまをして居る。「着物は破れた着物を着て、瘦せて、餓鬼がついて居るやうな恰好をして居る。「どうして居る。「もうどこへ行つても彼處へ行つても、緊縮不景氣で誰も雇うて呉れませぬ。此の鹽梅では近き將來に干乾になりますでせう。「何を言つて居る。俺は貧乏してゐるお前が可愛相だと思つたから、俺の家へ來た時に、お前に樂をさせてやらうと思つて、俺は酒を飲ませてやつた。お前は酒を飲んで臥てしまつた。俺は御用があるから出て行かなければならぬ。お前は幾ら起しても起さぬ。仕方がないから其儘立つて行つてしまつた。其の時にお前が貧乏せぬやうに、眞珠の玉をお前の着物の中に縫ひつけて置いた。お前が一生食つて行つても、まだ餘る位の玉を入れてやつた。「そんなものありやせぬ。「こゝにあるぢやないか。」と言つて着物から取り出した。「なる程是れがあれば俺は困りやせぬ。「困らぬやうにしてやつて居る。しつかりしなくては駄目ではないか。「某年月日に於て、價ひするもの無き所の寶珠を以て、汝が衣の裏に繋ぐ。今故に現在す。而も汝知らず、勤苦憂惱し以て自活を求む。甚だ癡となすなり。「甚だ愚かなことだと書いてある。之を茲に持つて居

り乍ら、食ふや食はずでうろ／＼して居る。丁度さう云ふものである。佛は吾々に無上菩提を教へて下さつた。けれどもこつちが酒に酔つて寝て居つて何も知らぬ。それが分らぬ。五十銭か六十銭かで、どうかかうか一日食へれば結構とやつて居りました。一生食へる無上寶珠を入れて下さつたのが分りませんでした。今日それを承りまして、初めて無上寶珠が我々の體の中にあるのだ、と云ふことが分りました。是は丁度信解品の長者窮子と同じ形でございます。

九、授學無學人記品

是は皆弟子でございます。阿難尊者、羅睺羅尊者以下學無學の二千人が、皆佛の記別を受けて居ります。「來らん世、何時／＼の時に無上正徧智を悟るのだ」其の悟つた曉の如來名、國土名、劫名、如來の壽命數等、さきの授記品や五百弟子授記品と同じく、詳しく書かれてあります。たいした事ではありませぬから急行でパス致します。

一〇、法師品

一寸明石の驛か、姫路位な驛ですから、三分間位の停車を要します。こゝに藥王菩薩と云ふのが、初めて顔を出して來て居ります。藥王菩薩は非常に大事な菩薩で、後に此菩薩の功德を讃めてあります。こゝでは名前だけ出して置きます。

此の法師品はどう云ふことを言つたかと云ひますと、是は受持力を云つたもので、法華經を読み聞かして居れば、それがずつと功德になつて、無上正徧智を悟ることが出来る。茲に亦井の喩が出て居ります。どう云ふ喩かと云ひますと、高い原に井戸を鑿る。幾ら掘つても一向水が出て來ぬ。乾いた砂のやうなものが出て來た。それに辟易せず、段々／＼鑿つて行く。さうすると終ひに土が少しじけつと濕つて來る。「は、あ、それ行け」と云ふ譯でどん／＼鑿つて行くと、次に泥の所が出て來る。其の次に水が出るのだ。斯う云ふのが鑿井の喩です。そこで「妙法蓮華經を聞いて居つた者も、初めは分らぬけれども、段々やつて居る

うちに、乾いた砂から濕つた砂、泥、水斯う云ふ順になるから、此の經を始終大事に讀んで居らぬといかぬ。」と斯う云ふことでございます。

一一、見寶塔品

此の見寶塔品には一寸厄介な所があります。私は闍那崛多の添品法華經で講釋申上げて居りますが、普通世間では鳩摩羅什の譯を使つて居ります。此の譯には見寶塔品の次に、提婆達多品第十二と云ふものが來ます。所が此の闍那崛多の譯は、此の提婆達多品を別に開いて居りませぬ。見寶塔品の中に一緒にしてあります。それでこゝ迄は番號が同じで來ますが、次から違つて參ります。従つて闍那崛多の方は、分量が少くなつて、鳩摩羅什譯は二十八品でありますが、闍那崛多の方は二十七品であります。そう云ふわけで添品の方は、見寶塔品が却々長うございます。岡山の驛位停車しなければならぬ。大分ゆつくり停らねばなりません。

其の時に地面からノコノコと涌いて出て來たものがあるのです。其の涌いて出

て來たものは、井戸の水や温泉位のものではございませぬ。大分上等のものが出て來たのです。高さ五百由旬、ちよつと二千五百料の高さです。横巾は二百五十由旬で、ちよつと千七百五十料程ある、地球の半分位のものが、ノコノコと涌いて來た。大變に上等のもので、澤山な寶にて飾らると書いてある。四面より多摩羅跋梅檀の香を放ち、其の諸の旛と蓋は金銀瑠璃磲磔等の七寶で作り成されて居る。それが天まで届いて涌いて來た。空中に出たものですから、「是は全體何事ですか。」と皆の者はびつくりしてしまつた。妙法蓮華經はいつでも天から降るより地から出て居ります。やはりさう云ふ説方らしいでございます。

さうした所でさき申上げたやうなスツバ (Stupa) の中から、大きな聲で歎める言葉が聞えて來た。多寶如來と云ふ如來が現れた。多寶如來と云ふのは、無量百千萬億劫の過去に滅度したまへる如來であります。これも亦大變遠い昔のお方で、吾々の計算ではとても分りませぬ。其のスツバの中をボンと開けた所が、この如來が現れ出た。どう云ふことを言はれたかと云ふと、「善哉、善哉、善哉、釋迦牟尼佛、快く是の法

華經を説く。我是の經を聽かんが爲めの故に來れり。」「釋迦牟尼佛、お前が此の法華經を説いたと云ふことは、洵にうまいことをやつた。私は其の話が聞きたかつたので來た。よくやつて呉れた。お前の説く所の如きは、皆是眞實である。」「とこの法華經の眞實なることを證明して居ります。

「まあ私の座がこゝにあるからお前に半分上げる。」「然らば」と云ふので、釋迦如來半座を貰つて坐つた。えらい人同志だから、さう云ふ融通がさいた。」「全體この妙法蓮華經と云ふものは、非常に貴いものだから、私は此の經を聽きたさに、過去の入滅から再び起きて、之を聽きに來た。」「と云ふことが書いてあります。それから推して見ますと、妙法蓮華經と云ふものが、釋迦一代の説法でなくして、過去から來るものである。一切諸佛一番のものである。色々の理由がそこへ現はれて來ます。さうして莊嚴——色々立派な飾りのことを云つて來て居ります。其の意味は昨日婆藪槃頭の説を書いて置きました。

其の後の半分は提婆達多品であります、この提婆達多と云ふ人は、佛の從弟にな

る、阿難尊者の兄さんです。けれども佛と非常に競争をした人で、屢々佛に反對をして、佛の敵になつて居ります。その縁起を茲に説いて居ります。「私が過去の時に、法華經が聽きたかつたけれども、どうも聽かれなかつた。其の時に自分は國王であつたが、或る仙人があつて、「私は法華經を知つて居ると言つた。」「それでは俺は國王をやめてお前に就く、と云つて、仙人のために菓物を取つたり、水を汲んだり、薪を拾うたりして供養して、今日に至つて初めて法華經を知り、佛になることが出來た。其の時の王は我が身、其の時の仙人は今の提婆達多である。提婆達多の力によつて、今日私は斯う云ふ者になつたのだ。此の提婆達多は、これから無量の劫を過ぎた後、成佛して、天王如來になる。」「と書いてあります。

それですから佛の敵であると云つても、やはり如來になれる。ありとあらゆるもの如來ならざるもの無し。佛敵亦如來なりと云ふことになる。佛には恩怨俱にないと云ふことを表す爲に、提婆達多の事蹟を擧げて來た。天臺などで非常にやかましく申すところであります。

もう一つ龍女成佛と云ふのがあります。一番最初序品の時に、彌勒と應對して居つた文殊師利、其の文殊師利が地球の外迄走つて居つた。あゝ云ふ先生は計算を上手にやる人で、墨の點を打ちに行つて、又歸つて來た。「千葉の蓮華の大いさ車輪の如きに坐し。」と書いてありますから、そう云ふ飛行機のやうなもので歸つて來たのでせう。

所がこゝに智積菩薩と云ふのがある。これは多寶世尊に従つてゐる菩薩であります。が、この人が問うて云ふのに、「あゝどこへ全體行つて居つた。」私は大海の底へ行つて居つた。娑竭羅と云ふ龍族の所へ行つて來た。「さうか。」其の一緒に來て居る連中がある。「さうか、何しに行つて來た。シカラナーガの所に何しに行つて來た。」向ふの者を濟度に行つて來た。「文殊師利早い間に、チヨコ〜つとやつてしまつた。」どれだけ濟度した。「それは分らぬ。其の數無量計算も出來ぬ。口に言ふことも出來ぬ。心に測ることも出來ぬ。暫く待つて呉れ。其中、自然に分るから、文殊師利は算盤の名人だが、其の名人にも分らぬ程、澤山の人を濟度して來たのです。」

「今證據を見せてやる。」と言ふと、無數の菩薩が、是が又海から涌いて出た。法華經は

天から降らぬ。皆涌いて出て居ります。菩薩が言ふのに、「私等は皆文殊師利に救うて貰つて來た。」證人が出てきた。「さうかえらいことをやつたな。」いやそれだけでは無いのである。娑竭羅と云ふ王様の娘に、非常に偉いのが居つた。其の娘は智慧利根で、一切のことを心得て、陀羅尼を承知して居る。諸佛甚深の秘藏を悉く知つて居る。何でも心得て居る。一秒の四十分の一と云ふ短いうちに、菩提心を發し退轉しなす。「如何にスピードの世の中でも、こんな早い者は近頃迄出て來ませぬ。」そんな者がどこに居る。「今出してやる。」忽ち前に現ると書いてある。「頭面に禮敬し卻いて一面に住す。」でお辭儀をした。

舍利弗びつくりした。俺は大抵早いと思つて居たが、まだ俺より早い。小さい娘だが却々えらいことをやる。そこで娘に言ふには、「お前久しからずして、無上菩提を得ると云ふが信じられぬ。女のやうなお粗末な者に、そんなもの出來る筈のものでない。佛道を得ると云ふことは、無量劫を経て、苦行をして然る後得る。全體女は梵天、帝釋、魔王、轉輪聖王、佛にはなれぬものである。そんなことが出來ると云ふとは分らぬ話で

ないか。信じられぬ。」とさうすると娘は、一つの眞珠しんじゆを持つて居る。佛ぶつに献上けんじやうしようと思つて、うちから眞珠しんじゆを携まげて來た。大分上等なので御木本製位のはありません。地球一つ分位でない。これを千寄せて三乗した位の大きさですから、大分大きい。一月に井上さんが金解禁きんかいきんをやつたので、益々不景氣な日本邊りには、とてもありつこはないと云ふ、其の眞珠を持つて來て、「之を佛ぶつに献上けんじやう致します。」と斯う云つて佛ぶつの前に奉つた。釋迦如來しやくかによらいは「然らばお前の思を受けてやる。」と云つて取られた。

さうすると娘の曰ふのに「どうぢや舍利弗しゃりぶつ、今私が眞珠しんじゆを世尊せそんに奉つたら、世尊がお受けになつた。お前見て居つたか。」「見て居つた。」「早かつたかおそかつたか。」「お前が奉つたらよしと云つて取られた。早い。」「俺が今度成佛じやうぶつするのを、舍利弗しゃりぶつお前の神通じんづう力で觀みよ。私が珠を差上げて、お取りになつたのが早いか、自分が成佛じやうぶつするのが早いか。」「そこで舍利弗しゃりぶつはびつくりした。「娘ながらえらいことをする」と思つて見て居ると、龍女りゆうにょは忽然こつぜんとして男子の相に變つてしまつて、南方無垢世界なんぼうむくせかいに往くので、こんな所に

は居らずに、南に走つて行つて、三十二相八十種好さんじふにさうはちじゆがうの相をして見せた。

そこで娑婆世界しゃはせかいに居る一切衆生いっさいしゆじやう、此の世界に居る者は、向ふの者を見て、びつくりした。「三千の衆生不退地しゆじやうふたいちに住し、三千の衆生菩提心しゆじやうぼだいしんを發して、授記じゆきを得たり。」「智積ちじやく菩薩ぼさつ、及び舍利弗しゃりぶつ一切衆會いっさいしゆゑ默然もくねんとして信受しんじゆす。」そんな者を見せつけられたら、大抵の者が默然もくねんとする。それで文殊師利もんじゆしりが、そう云ふ工合に、龍の女が成佛して、一切人天いんてんのために法を説くのを見せさせと云ふのは、一切の者、智慧ちゑの利鈍りどんに拘らず、この法華經けきやうを信するものは、其の功德くどくによつて、卽座に佛になると云ふことを表したものであります。佛の眼から見れば埃だつて佛である。凡夫の儘佛であります。こちらの眼から見るからさつぱり駄目なので、明かな智慧ちゑの目玉即ち佛から見ると、どんなものでも佛である。そこで龍女りゆうにょの成佛は當然の當然少しも疑ふ餘地はない。蠶おたま斗まじやくしが蛙かになるよりまだ珍しくないことでもあります。

一一一、勸持品

こゝは急行で走つてもよい所です。先の法師品や見寶塔品に出て來た、藥王菩薩や大樂說菩薩が佛の前に出て來て、誓ひごとを立てた。後の惡世の衆生は、善根少く、増上慢で、とても教化することは難しいが、自分達は一つ大忍力を起して、この經典を受持し、讀誦し、書寫し、衆生のために、開示說法致すでありませう。續いて授記を得た五百人の阿羅漢や、同じく學無學の八千人の者が同じやうに誓を立て、居ります。其の時八千萬億那由他の既に不退地に住し、陀羅尼を得た菩薩が、佛の威力と守護の下に、如來滅後に、十方世界の衆生のために、この經を説かんことを誓つて居る。佛はこの不退の菩薩の誓願を勧められた。これが勸持品の要點であります。

茲で注意せねばならぬのは、出家の女子が成佛の記別を受けて居ることでもあります。前の龍女の成佛は、在家の女です。娑竭羅龍王の娘ですから、出家ではございませぬ。蛇の親方か何の親方か知りませぬが、その王女。而も小さい八つの女です。今度は一番最初に申上げました摩訶波闍波提 (Mahāprajāpatī) と云ふ佛の姨母さん、及び佛の太子の時のお妃が出家して居ります。此の二人は出家の女子の一番上席でございませぬ。それが今度、「私共はどんなになります。」と言つた。お前等も同じく悟を開く。男女の別はない。「最初に在家の女子を出して、「男女の別はない。」と云ひ、今度は出家の女子を出して、「男女の別はない。」と云ふことを表して居ります。

一三、安樂行品

文殊師利菩薩が世尊に問ふて云ふのに、「末世に於てこの法を受持し、讀誦し、宣説することは大變に難しいことである。先の八十萬億那由他の不退の菩薩は兎も角として、この難事に堪へない他の者の爲に、一つ安い方法をお説き下さい」そこで世尊は是の受持する所の末世の行者に對して、樂にやる方法として、身、口、意、誓願と四つの安行を示された。樂にやると云ふことはどういふことかと云ふと、例へば「誘惑のある傾向のある所へ近づくな」と云ふ風なことが、澤山擧げてございます。さう云ふ所へは近づかぬ方がやりよい。惡縁の誘惑を受けるやうな所へ行くなと色々説かれてあります。そうして最後に茲に髻珠の喩と云ふものを持つて來てあります。是はどう云ふのか

と云ふと、威力のあるえらい大王があつて、小王の命に順はぬものは、兵を起して討伐する。其の功あるものは色々の賞勳を與へる。「普通のものには皆やるが、只自分の髪の毛の中に入れて居る、三千大千世界に値するやうな眞珠の明珠だけはやらぬ。」日本で云ふと功一級金鷄勳章と云ふところですから、却々濫りに出せませぬ。東郷元帥のやうな人が初めて頂戴する。特別の武勳のあるものでなければ是はやらぬ。丁度如來も其の通りであつて、「一切法を説いて、一切衆生を濟度する。けれども此の法華經を説いて、之を聽かせてやると云ふことは、是は丁度大王が、自分の頭の寶冠の中に入れて居る所の無價の珠をやるやうなもので、之を受取るといふ事は希有なことである。」と斯う云ふこととございます。

一四、從地涌出品

法華經は皆地面から涌きますが、是はどう云ふのか面白いことがあります。モヤモヤ地面から涌いて出た。其の出方が六萬恒河沙と云ふのですから、澤山涌いて出

た。出ただけならよいけれども、それが皆上行菩薩と云ふのを親方として、釋迦如來を禮拜する。如來だから禮拜するのは當然ですが、洵に面白い。「吾々今日迄永い間釋迦如來の御化導を蒙りまして、洵に有難うございます。是れ皆釋迦如來の賜物でございます。皆茲に參上して御禮申上ます。」と斯う言つた。「えらいことぢや。お辭儀するのはよいが、一寸わからぬことがある。釋迦如來は迦毘羅衛(Kapila-Vastu)の王宮を出て、伽耶(Gaya)の城を遠からぬ所の菩提樹の木の下で、悟を開いて四十何年にしかならぬ。あんな澤山な大菩薩が「永い間昔から教を蒙つて居ります。濟度して頂きました。」と欣んで如來を讚嘆して居る。辻褄の合はぬ話だが、全體どう云ふことであらう。「丁度考へて見れば頭の毛の黒い、顔の色の綺麗な二十五位の男が、百になつた頭に毛もなにもない老人をつかまへて、「彼は私の子だ」百になつた爺が、二十五の若い者をつかまへて、「お父さん」と云つて居る。世の中にこんな譯の分らぬことがあるものであらうか。そこで又大衆の中の頭の彌勒即ち慈氏菩薩は、心に疑惑を生じ、「どうも此の事は分りませぬ。斯う云ふことはどうも吾々一向分らぬ。王宮を出で、菩提樹の下でお悟りに

なつて、今日迄やつと四十年にしかならぬ。百千萬劫の時間か、つても勘定出来ぬ程の澤山な菩薩達が、モク／＼涌いて出た。其の澤山な菩薩が、『教を蒙つた。お弟子である。』と云ふことは一向分りませぬ。佛よ、是は一體どうしたにかお教へ下さいませぬか。私は佛説を信じまして、承知をして居りますけれども、滅後の新發意の者が、さう云ふことを聞きまして、必ず疑ひを起す。『佛の説法と云ふものは、よいころ加減なことを云つたもので、百の親爺を二十五の男が倅と云ひ、百の親爺が廿五の男をお父さんと云ふやうなものである。』と云つて信用を致しませぬ。それでは非常な大罪を犯します。『破法罪業の因縁を起す』と書いてある。『それでございますから、其の満足の出来るやうに、世尊どうぞ吾々の疑ひを解いて、又末世の諸善男子此の事を聞いて、疑ひを生ぜぬやうにして頂きたい。』是が從地涌出品でございます。これから如來壽量品、佛の説法となります。

一五、如來壽量品

此の如來壽量品と申しますものは、是が一番最初申上げました方便品と相呼應致しまして、妙法蓮華經の中、最も重大な所でございます。天臺大師が天臺宗を立てられた時には、方便品を主として解釋して來て居ります。日蓮上人が日蓮宗を立てられた時には、多く此の如來壽量品を主にして居ります。此の二ヶ所はどちらも甲乙がない大事な所であります。それで方便品の方では、妙法蓮華經の趣意を、二と云ひ三と云ふは假りの方便であつて、一が眞實だと云ふ事を眞つ直に表して居ります。如來壽量品の方にありますと、如來の智慧、如來の覺さう云ふ點を表はして來て居りまして、少し解釋が難しくなります。

前の從地涌出品で、二十五の青年が百のお爺さんをつかまへて、是は私の倅だと云ふ。百のお爺さんが二十五の青年をお父さんと云ふ。世の中にこれ位譯の解らぬ事はありません。全體これは私が分らんばかりではありませぬ。こゝに居る所の大衆が皆分りませぬ。何んとか分らせて下さい。』と斯う云ふのが彌勒の質問でございます。それに對して釋迦如來が、洵によい答をして居られます。『汝等當に如來の誠諦の語

を信解すべし」汝等當に如來の誠諦の語を信解すべし」汝等當に如來の誠諦の語を信解すべし」三遍佛が言つて居られるのです。「如來の言ふことには嘘がないのだから、お前等は如來の言ふことを聞いたらいではないか。如來の言ふことを信じたらよいではないか。」と斯う三遍如來が同じ事を言はれて居る。

抑も佛たるものが三遍言ふと云ふ事はありませぬ。又大菩薩たるもの大阿羅漢たるものが聽いて居つて、三遍佛に言はせると云ふことはないのです。言ふ方も三遍なら、聽く方も三遍です。如何に大事なことでも、餘程もの覺えの悪い連中が集つてゐる。こんな者には百遍言つても分りませぬ。そんな物覺の悪い者は、お經の中にはありはせぬ。兎に角如來の言ふことを信じねばならぬ。如來の言ふことはどう云ふことかと云ふと、二十五の若い者が、百のお爺さんを息子と云ふ。是は如來のお言葉であるからさう信じねばいかぬのである。そこで今度は又彌勒が頭になつて、「私はたとひ二十五の者が、百の爺さんを息子と云つても、百の爺さんが二十五の男を親爺と云つても、百になる迄二十五のお方が御養育下さつた洵に有難うございましたと、禮を云つたとい

はれても、それを決して疑は致しませぬ。疑ひませぬけれども、どうぞその謂れを言つて下さう。」「我等當に佛語を信愛すべし」それは決して佛の仰しやることに、疑ひを起すことはありません。けれどもどうぞ吾々の爲に、其の謂れを言つて下さう。」「よしそれでは言つてやらう。佛が三遍言はれたものですから、彌勒亦三遍お願ひ申上げた。

其の時佛の仰しやるに、「汝等諦かに聽け、如來秘密神通の力を聽け」如來と云ふものはえらいものである。これから如來のえらい所を講釋してやる。お前等は我釋迦牟尼佛は、此の釋氏の城を出で、さうして伽耶を去ること遠からぬ所で、無上菩提を悟つた。斯う思つて居るかも知らぬが、然しさう云ふことはないのである。「我實に成佛已來無量無邊百千萬億那由佗劫」を過ぎて居る。何も三十年四十年前に成佛したのではない。數限りもない程前に、既に佛になつてしまつて居る。だから二十五の倅ではないのである。百の親爺でもないのである、數の分らぬ程昔からの親爺で、倅も百位の短い人間でない。今悟を開いてから今日に至るまでの時間を計算して出してやる。」「此

の計算が生やさしくない計算です。一寸出します。

五百千萬億那由他阿僧祇、(Nayuta asankhya)

50萬×萬×億×那由他×阿僧祇×三千大千世界

億と云ふのは日本の千萬でございませぬ。是は掛算です。三千大千世界が阿僧祇寄つて、それが那由他寄り、それが又億寄つて萬よつて五十萬寄つたものです。大分大きな面積でせう。逆も今の天體望遠鏡では見えぬ。之を例の如く磨りつぶします。さうてそれをアトム (Atom) の状態にします。お經には微塵と譯してありますが、今の理學の言葉では原子と言つて居ります。原素の中をまだ細かく割つたものです。目に見えぬ程小さいものです。其のアトムの状態迄此の大きさのものを磨り潰します。澤山出來ますでせう。又例の如く此のアトムを持つて、斯う云ふ工合に東方へ行かねばならぬ。此の距離が又

50萬×萬×億×Nayuta asankhya×三千大千世界

これだけを過ぎて東へ行きます。「これだけ過ぎた所へ行つて塵を落す——塵點す

る——これだけ磨り潰したアトムを、これだけ過ぎて、一つづつ落とし、其の塵がないやうになつた面積、各世界の數と云ふものは、お前等どれ位の數と思ふか「其れに彌勒は答へて居ります。「それは逆も計算出來ませぬ。考への及ぶ所ではございませぬ。「算數の知る所に非ず。亦心力の及ぶ所に非ず。「それは及びませんでせう。一切の聲聞辟支佛の無漏の智慧、煩惱の無い智慧を以て計算しても、其の限數は分りませぬ。「私等はこれで阿毘跋致 (Avinivartaniya) と云つて、無上正徧智から後歸りせぬ、不退轉地に住して居つて、佛の智慧と大して違ひない智慧を有つて居ります。それでゐて却々一寸分りませぬ。世尊よ諸の世界は量無く邊無しと申す外言葉がございませぬ。「彌勒すら分らぬと云ふのですから、私共の分らぬのは少しも恥にはなりませぬ。あなた方も大きな顔をして分らぬと仰しやつて差し支へはない。「分つた。」と云つたら嘘になります。

其の時に「善男子我これから言つてやる。此の一つの塵と塵との間の、其の勘定の出來なかつたのを、もう一遍磨り潰す。」まあ非常に大きな磨鉢が要ることとせう。「此

の磨潰すりつぶした微塵みじんになつたその一塵を、亦一劫かっばとして計算する。「一劫は吾々の方で言へば五十億年ですが、磨潰したものに、一々五十億年掛けるのですから、一寸計算ができませぬ。」「それ位長い年限だと思へ。其の年限より遙かに過ぎて居る事が、又百千萬億那由佗阿僧祇だ。」「これ程昔から私はもうちゃんと成佛じやうぶつしてしまつて居るのだ、と云ふのですから、百位の者が、二十五の伴を親父と云ふところの騒ぎではありませぬ。此の前ありました大通智勝如來たいつちしやうにょらいの話の時、「其の大昔しのことを、今見て居るが如し。」とありましたが、それはさうでせう。其の時分から生きて居る人だつたら、そんな氣持がするに違ひない。吾々でも昨日の話だつたら、今日覺えて居りますから、今見て居る如く感じます。さうして其の時から此の世界へ来て法を説いて居る。此の世界ばかりでない。又外の所でも法を説いて居る。百千萬億那由佗阿僧祇の國に於て、法を説き教化して居るのである。

又其の先にデーバンカラ(Dīpankara)如來にょらい即ち然燈如來ねんどうにょらいのことが説いてある。然燈如來ぜんどうにょらいと云ふのはどう云ふ如來かと云ふと、昔の時に釋迦如來しやかにょらいに、「お前は他日長い年

限の後佛ごうぶつになられるであらう」と云ふ記別を授けた如來です。其の記別を私に授けたと云ふことすら、其の中間に示した相である。私の佛になつたことは、本來デーバンカラよりもつと／＼昔の話だ。デーバンカラに記別を受けたと云ふことは、その中間に過ぎぬ。」「中間に於て我然燈佛等と説く、」「又其の中間に於て、我が涅槃ねはんに入るやうに言ふ。斯ういふ事は、皆方便力を以て、お前に示して居るのである。一切衆生はその賢いと馬鹿と、根機の鋭いのと鈍いとの關係から、涅槃ねはんに入ると言つたり、成道じやうどうして佛になつて見せたり、法を説いたり、色々やつて居るのだ。吝ちぢなことを樂ねがひ、徳薄く垢重けがれくして、而も悟を開いたと思つて居るやうな者は、三四十程前に悟を開いて、成佛じやうぶつしたと思つて居るかも知らぬ。けれどもそんなのは更に譯わけが違ふのだ。逆さかも勘定の出來ぬ程昔から佛になつて居るのだ。さうして皆を引つ張つて來ようと思つて、色々色々の茲ここに相すがたを示して居るのだ。」「斯う云ふことです。それだから茲ここで頭に這入らんでも構かまひませぬ。這入らんのが當り前で、這入つたら間違ひです。心力しんりきの及ぶ所に非ずと書いてある。さうするとこつちは齒が立たなくなりませぬ。

こゝで天親の優婆提舍によると、此の壽量品と云ふものは、『成大菩提無上』——大菩提を成ずること無上なり——十の無上が現はれると云ふことを、最初に申上げて置きました。其の中に成大菩提無上と云ふのがあります。大いなる所の覺りを成ずるのが勝れて居る。外に類がないさう云ふことを示して居るのだと云ふことであります。

此の壽量品は二つに分れました、前段と後段とになります。前段は大菩提を成じた相、後段は涅槃に到つた相を現す。今大菩提を成ずる方を御覽に入れます。

一、應身

二、報身

三、法身

斯うなります。全體凡ての佛と云ふものは、此の三つの身を有つて居ります。

應身、Nirmāṇa kāya

報身、Sambhoga kāya

法身、Dharma kāya

此の三つは佛、大菩薩は皆有つて居ります。吾々にも出来ぬことはございませぬが、一寸斯う鮮かにいけませぬ。けれども、それでも若干其の香ひを有つて居ります。

此のニルマーナカーヤと云ふのは、必要に應じて現はれて居る相でございます。斯う云ふ必要だから斯う云ふ相を現す」と云ふ。サンポーガカーヤは自分本來の相、自分分は本來斯う云ふ形であるのだと云ふ佛自證の相、自分の證りの相であります。ダルマカーヤは原則通りの相をして居る。是は私共でも使ひ分けます。使ひ分けますが、佛や觀音菩薩のやうな工合に鮮やかに行きませぬ。

本來の相と云ふものは私自身も有つて居りますが、今日は斯うやつて、こゝへ光壽會の講演に來て居ります。南洋へ行けば百姓の相をして居る。トルコへ行くと絹織物の工場を有つて居りますので、そこでは工場の主の相をして居ります。スキツルには邸があります、山水の間を逍遙して居ると、文人の相をして居ります。是が私自身ニルマーナカーヤです。あなた方の中には、或は會社銀行等に勤めて居られる人もあります。其の時は會社銀行の人になつて居る。官に就いて居る時は、官の人にな

つて居ります。これはあなた方のニルマーナカーヤでございます。サンボーガカーヤは本體、本來の相でありますから、一軒の御主人であり妻であり、息子さんであるとか、奥さんであるとか云ふ様なものが、このサンボーガカーヤでございます。ダルマカーヤは、過去久遠劫、さつきの計算程昔から成佛して居ると云ふ原理の相でございます。これが擱めたらうろ／＼致しませぬ。あの數字よりそれを過ぎること百千萬億劫の昔成佛して居る。これでは益々分りませぬ。處が分らぬだけで、吾々も實はこの原理の中にあるのです。何となればダルマカーヤと云ふものは、形もなければ何も無い、相形を持ちませぬ。故に一切物平等である。一切衆生平等ですから吾々も持つて居る。たゞ持つて居ると云ふことを承知して居らぬ。ないことはないのです。覺つた人の目から見れば、吾々のダルマカーヤも見えて居る。それですから他の二つは見えても、是は見えませぬ。餘程こつちの目がよくならぬと、私共の目では見えませぬ。

佛のサンボーガカーヤ、それは彌勒、觀音、勢至は見ます。もつと降つても見えるかも知れませぬ。もう一寸降つたところで、我々になると見えませぬ。人間で見たいの

は餘り無いやうです。何んでも歴史の傳ふる所では、善導大師がサンボーガカーヤと、ニルマーナカーヤの中間位を、見たことがあるやうであります。善導大師に會つて見ぬから分りませんが、觀經の眞身觀を見たのですから、阿彌陀如來の此の眞中頃を見たらしい。もう私達の宗祖も見て居りませぬ。源空上人も見て居ませぬ。これは一寸見えませぬ。佛の方を見る時には、我々の望遠鏡が悪いものだから見えぬ。けれども佛の方から見れば見える。是は斯ふ云ふ譯で、一切衆生、皆學理的にダルマカーヤを持つて居る。實際的に他の二つを持つて居るのです。これをもたぬ者は餘程下等な者です。それはもう畜生とか何とか云ふ手合は、ニルマーナカーヤだけでございます。これを最も上手に出すのは役者であります。舞臺／＼で變へて行きますから、女になつたり、男になつたり、上手なものです。彼等はそれで飯を食べて居るだけある。是は劣等高等の程度はありません。動物にもあります。佛は我身に佛力があるから之を自由に出して居ります。

一、應佛、今印度に於ける釋迦如來は、「迦耶城を去ること遠からず、道場に坐して、

阿耨多羅三藐三菩提を得たり。「是れは現在得道の佛——現在成佛——であります。

二、其の次の報佛と申すのは、「我實は成佛已來無量無邊百千萬億那由佗阿僧祇劫なり斯う云ふ工合に、久遠の過去に成佛して、今日に及んでゐると云ふ、佛自證の相であります。法佛になるとまだ申しませんが、如來は如實に三界の相を知見す——如來如實知見三界之相——で法佛は學理になつて來る。報佛は頭もあり、足もあつて、恰好を持つて居る。いつの昔に佛になつたとか、何とか形を持つて居るが、法佛の方は形を持つて居ない。これは「如來の智慧」であります。そこで今度は又もとへ戻りまして、如來が一切衆生を濟度する爲に、「或は己の身を説き、或は他の身を説き、或は他の身を説し、或は己の事を示す」と云ふのですから、好いたやうにうまい事をやれるのでせう。併し「諸の言ひ説く所皆實にして虚に非ず」嘘を言はれては具合が悪い。皆本當のことで嘘はない。それはどう云ふことであるか。「如來は如實に三界の相を知見す。」實のまゝに三界の相を見たまうからであります。

三、法佛、それですからダルマカーヤは、如來は實の如く三界の相を見て居る。正し

く實の如く見て居る。吾々は三界の相を見損ねて居る。一寸手に合ひませぬ。「生死有ることなし。若くは退、若しくは出、亦在世及び滅度もなし。實に非ず、虚にあらざ、如に非ず、異に非ず、三界の如くならずして三界を見る。斯の如きの事如來の明見錯謬あることなし。」と斯うあるのです。逆も此れは難かしいことで、何に非ずくとはいねとばされてしまふから、どんな工合になるのか分りませぬ。それが分つたら私共が如來の智見になる。如來の知見のない私共に分る筈はありませぬ。分りませぬが何やら如來の智見と云ふものは、さう云ふえらいものなんです。こゝにある「三界の如く三界を見ずと云ふのは、どんな工合に見るのか」是は分りませんが、婆藪槃頭菩薩が見たことですから、其れの通りにやります。本當は私共には分りませぬから、餘り追窮せぬやうに願ひます。

一、無衆生界即涅槃界

二、常涼清淨不變の義

三、如來藏眞如の體不離衆生界

斯う云ふのが三界の如く三界を見ぬことです。一つは此の吾々衆生と云ふものは、即ち涅槃と同じものだ、覺りと同じものだ、斯う一遍見ねばなりませぬ。三界は斯う云ふ迷の境界を云つたのである。衆生界のことを三界と云つたと思つたらよろしうございませぬ。衆生界即涅槃界であつて、衆生と云ふものは覺りのものだ。うろ／＼して居る手合が皆覺りだ。斯う一遍見ねばなりませぬ。

常涼清淨不變の義と云ふものは、是は法華經には明文がございませぬけれども、勝鬘經に明文がございませぬ。勝鬘經に、如來藏はと言つた時に「常涼清淨にして變せず。客塵煩惱の染むる所。」と書いてあります。それを婆藪槃頭が引張つて來て解釋した。本來の性といふものは、どう云ふ譯で涼しいと云ふ字を使はれて居るか分りませぬ。原本がございませぬから、譯が間違つて居るかどうか分りませぬが、涼しい冷靜と云ふ字でございませぬ。熱靜と云ふ字はございませぬ。熱ならば動く氣味がある。性と云ふ字に常涼と云ふ字を使つたのは、動かぬと云ふことを含ませたのだらうと思ひませぬ。原本がございませぬから、慥かなことは分りませぬ。それはきれいなもので、

元來變るものではない。常涼清淨にして變せず、客塵煩惱が之を染めて、ガヤガヤして居るけれども、本來の性質は不變なものだ。斯う云ふのが勝鬘經の意でございませぬ。其の意をこゝへ表はして來て居ります。

それからもう一つは、如來藏眞如體と云ふものは、衆生界を離れて居らんだ。逆に之を戻したら、如來と云ふものと、衆生と云ふものと、何にも變りは無いものだと言つてある。それは何であるか。常涼清淨不變のものが、本體であるとする、如來藏と云ふものは常涼清淨不變のものであり、且つ客塵煩惱の染める所のものでありませぬ。

客塵煩惱と云ふのがお分りにならぬかも知りませぬが、是は自分本體に汚れて居る塵ではないのです。外から這入つて來た塵です。こゝら邊には客塵煩惱が澤山ございませぬが、これは皆向ふの方から來るものであります。こゝは商工會議所でございませぬが、この建物自身が塵を製造してゐるものではございませぬ。何處からか皆集つて來たものです。港がある船が塵を吐く。そこで商工會議所、水上警察、税關が始終客塵煩